

湧田古窯跡(Ⅲ)

— 県庁舎警察棟建設に係る発掘調査 —

1997年3月

沖縄県教育委員会

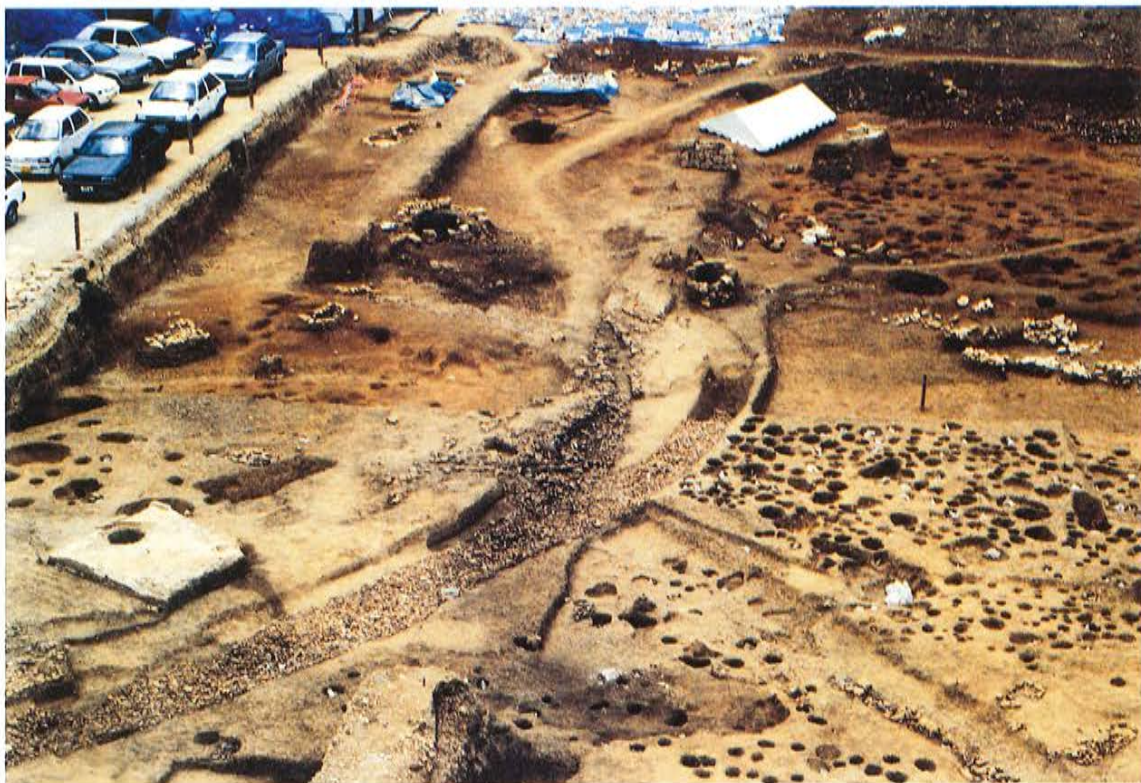
沖縄県文化財調査報告書 第129集

湧田古窯跡（Ⅲ）

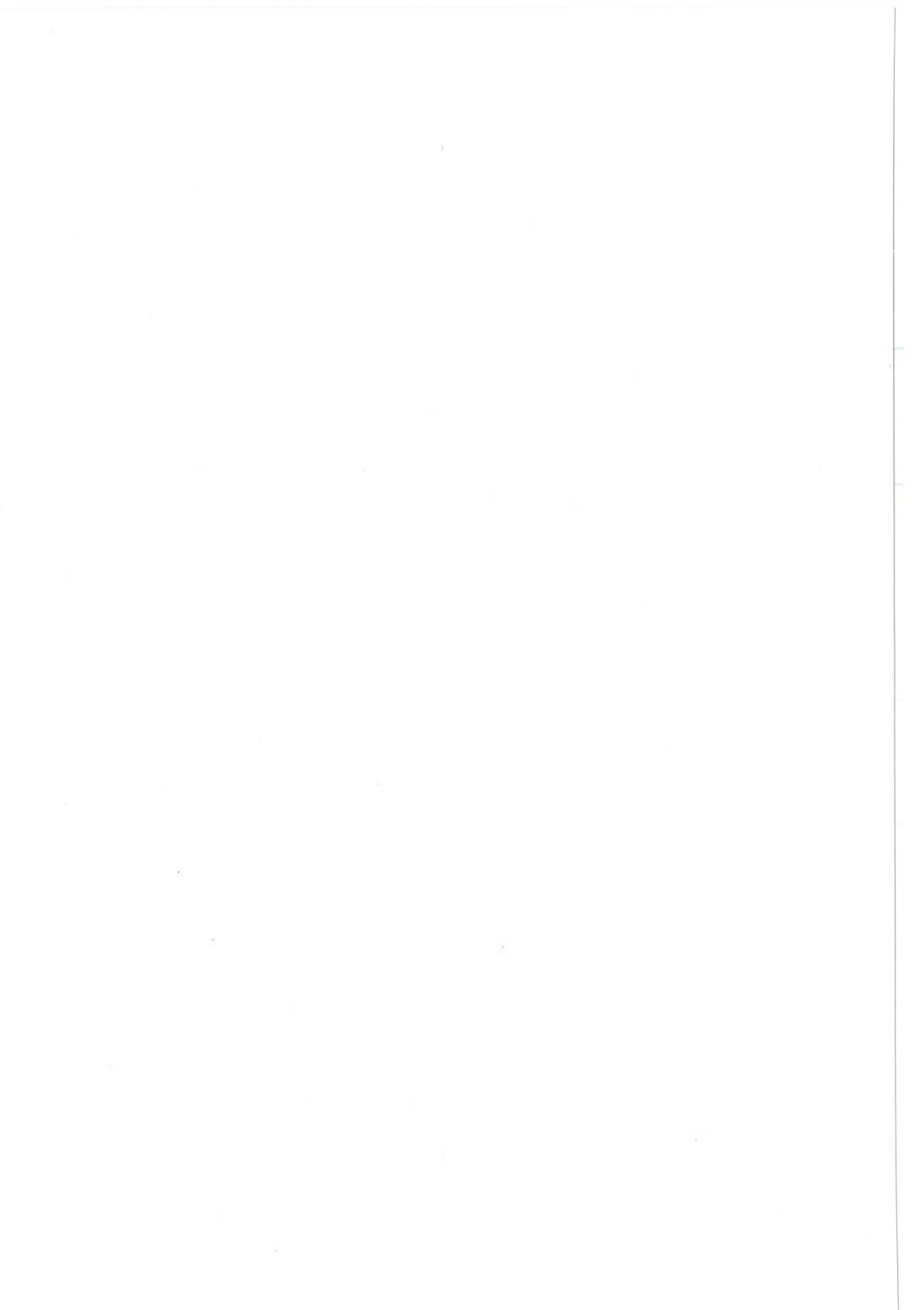
－ 県庁舎警察棟建設に係る発掘調査 －

1997年3月

沖縄県教育委員会

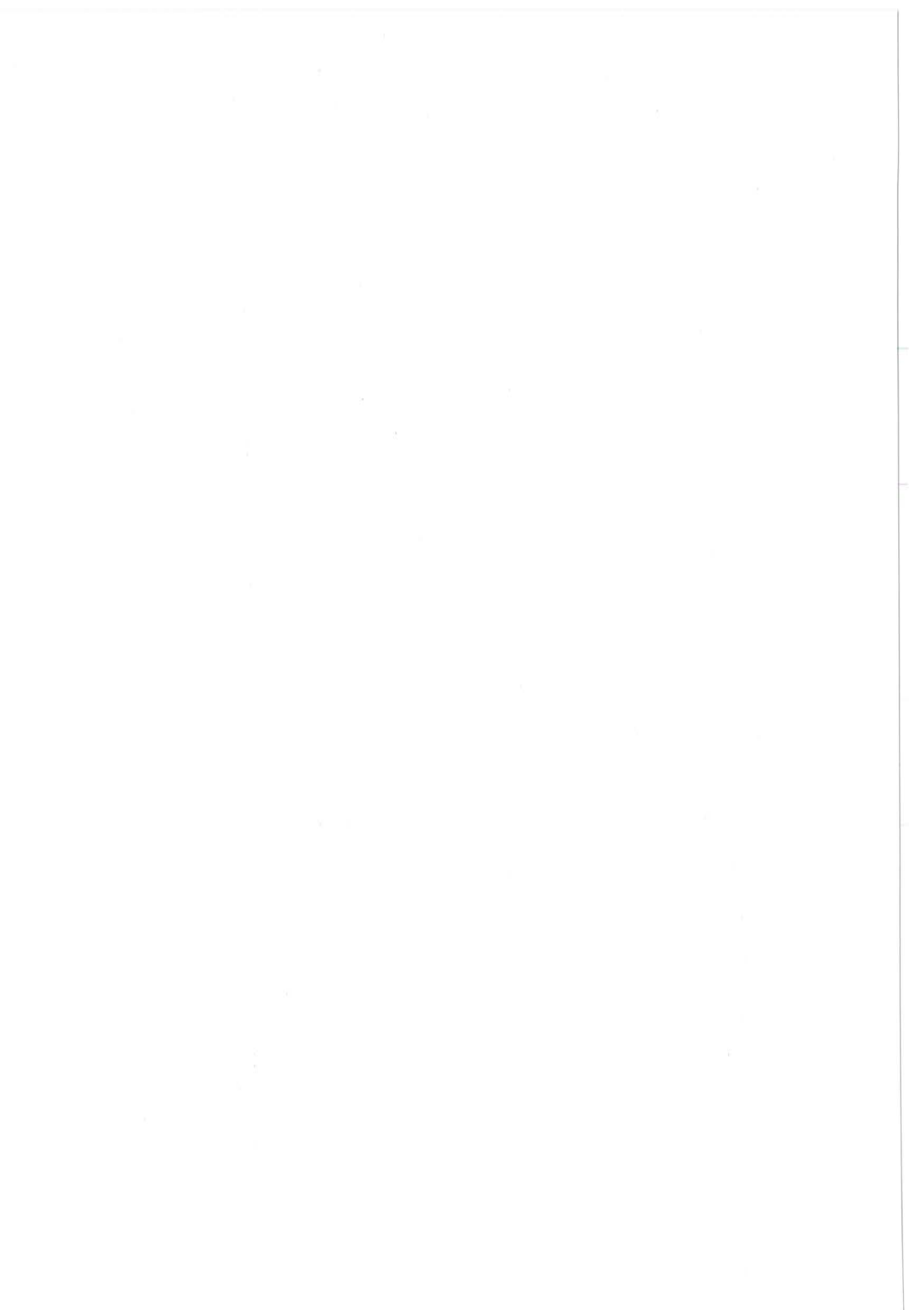


卷首図版1 上・下：発掘調査地区近景



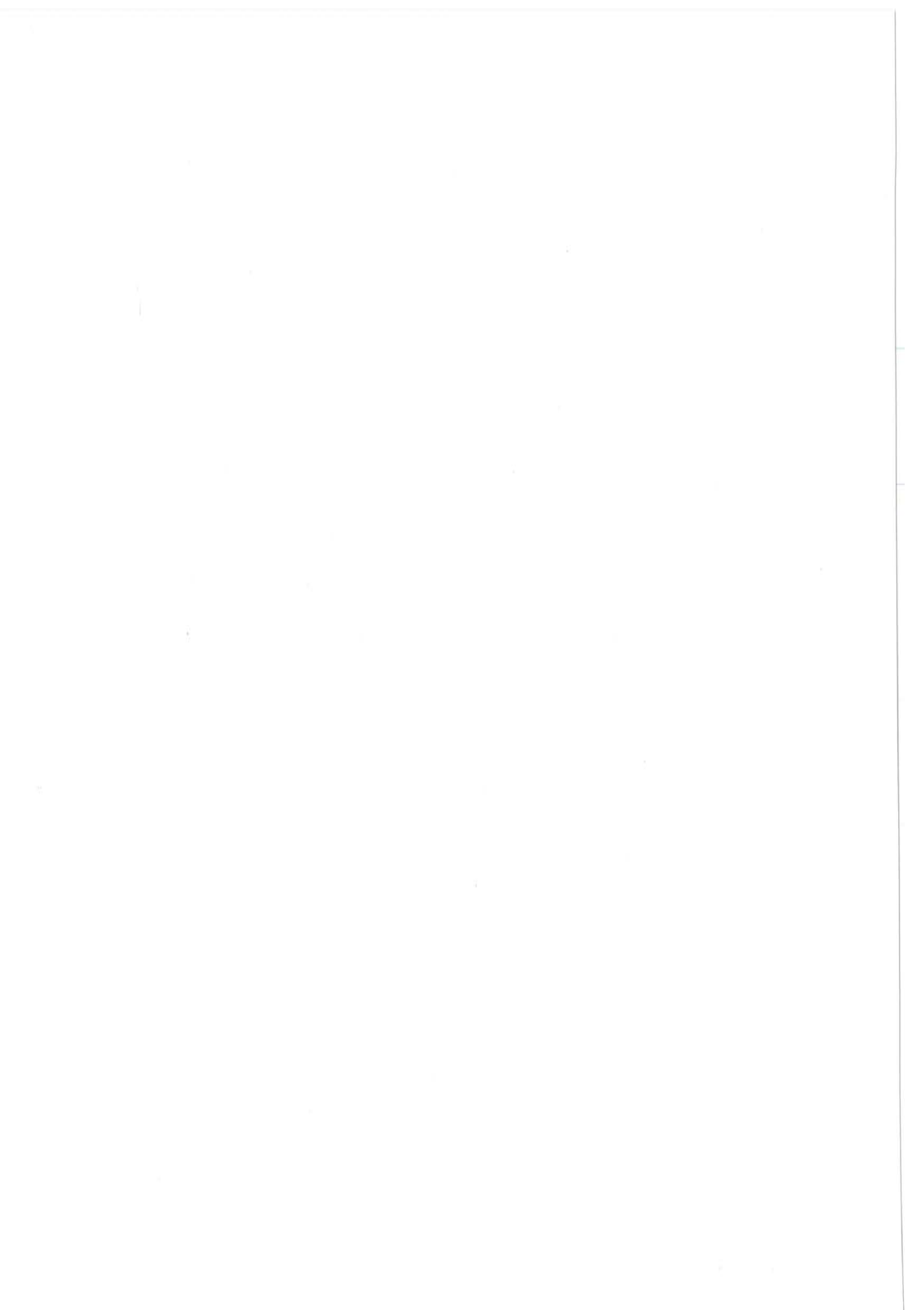


巻首図版 2 上：発掘調査地区近景 下：ピット群検出状況





卷首図版3 上・下：建物遺構検出状況

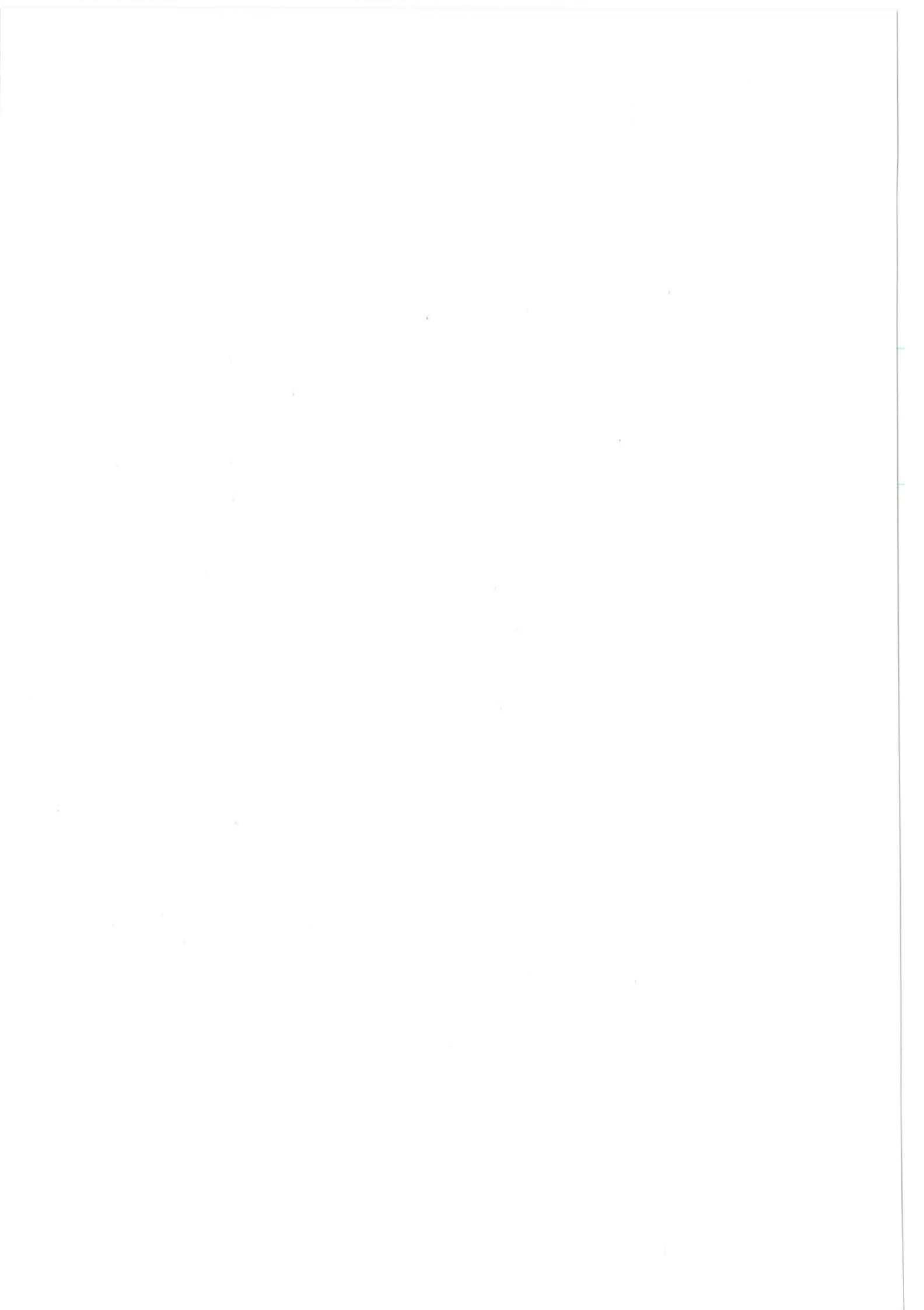




卷首図版 4 上：各種遺構検出状況 下：方形状建物遺構

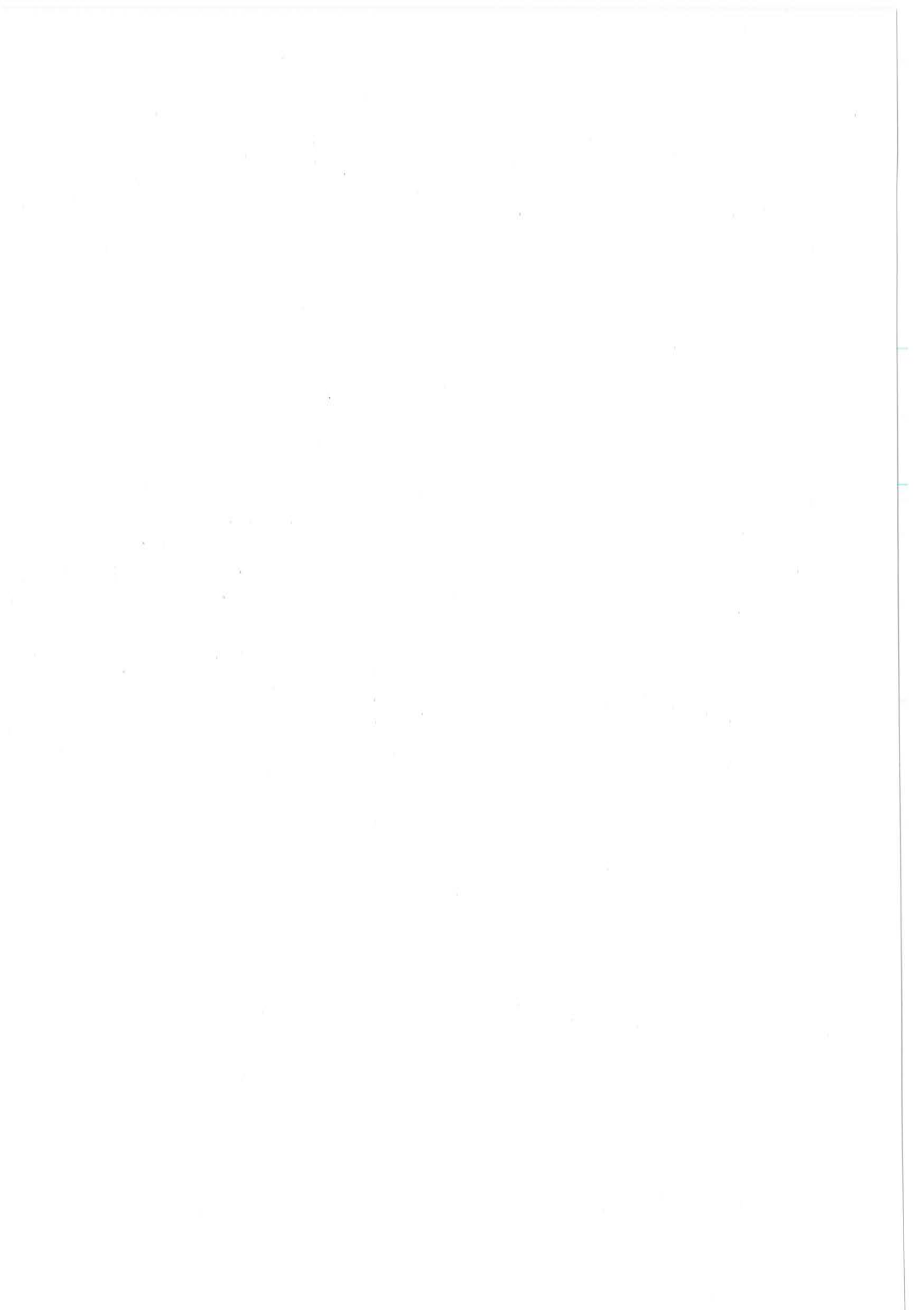


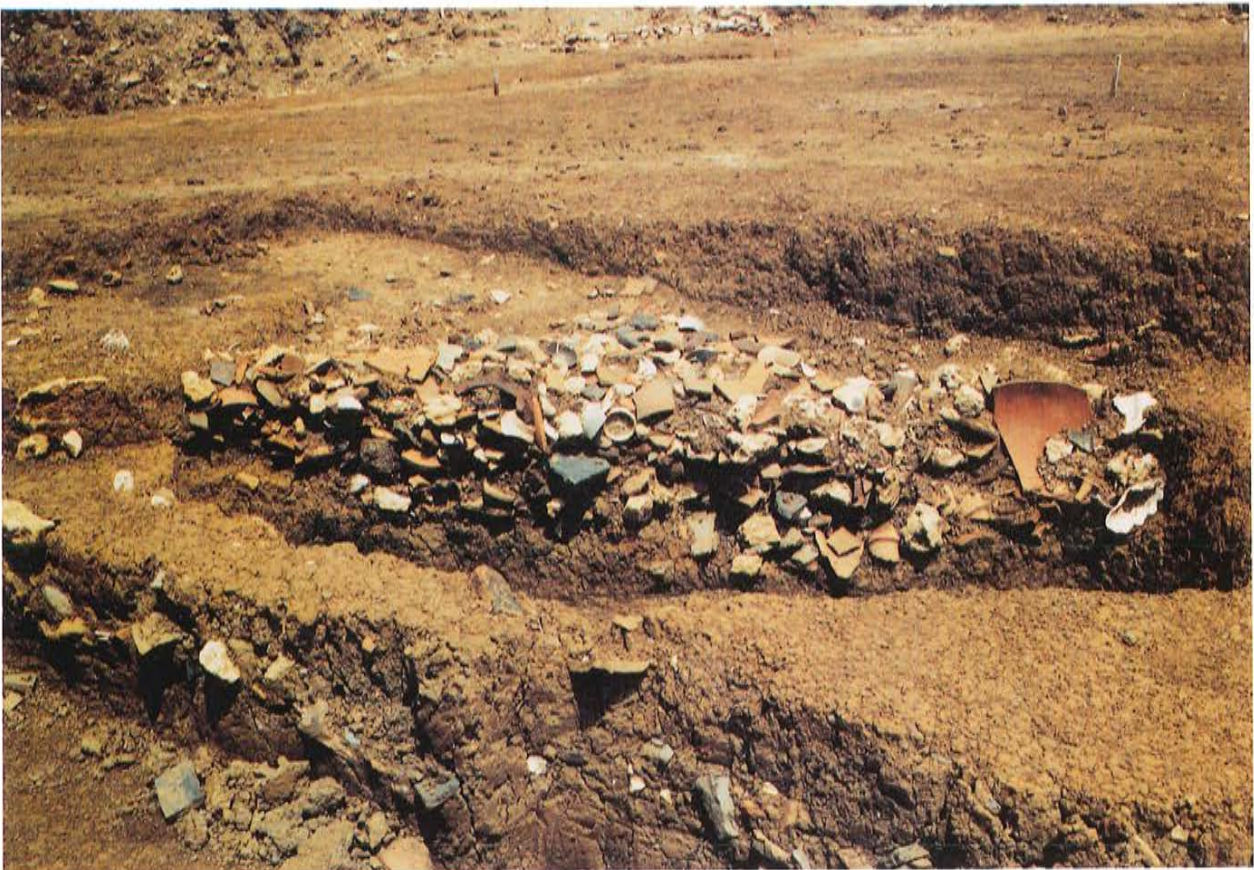
卷首図版5 上：石敷遺構 下：方形状遺構



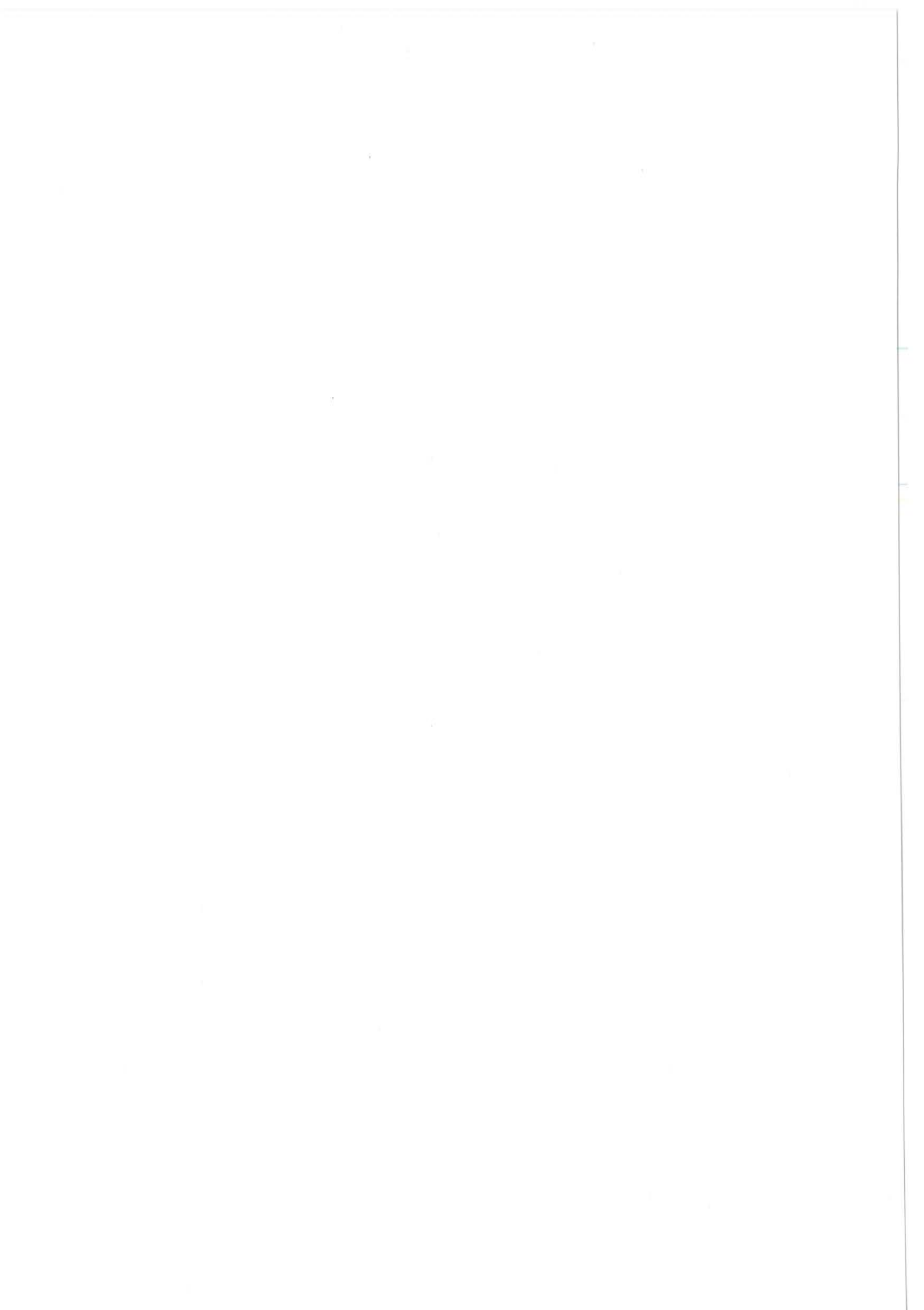


卷首図版 6 上：円形状遺構（溜井） 下：大溝遺構検出状況



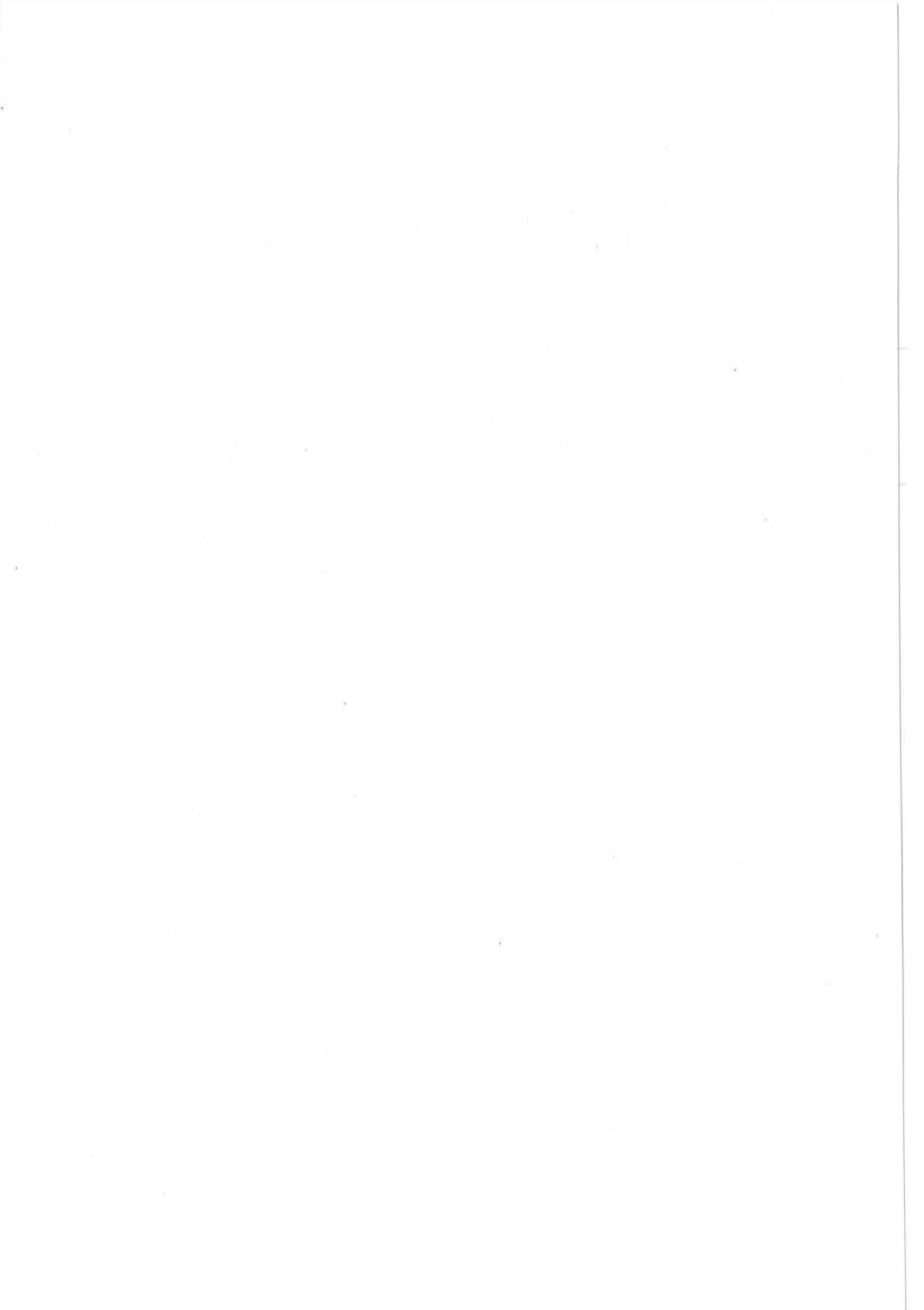


卷首図版7 上：石列遺構 下：遺物集中遺構



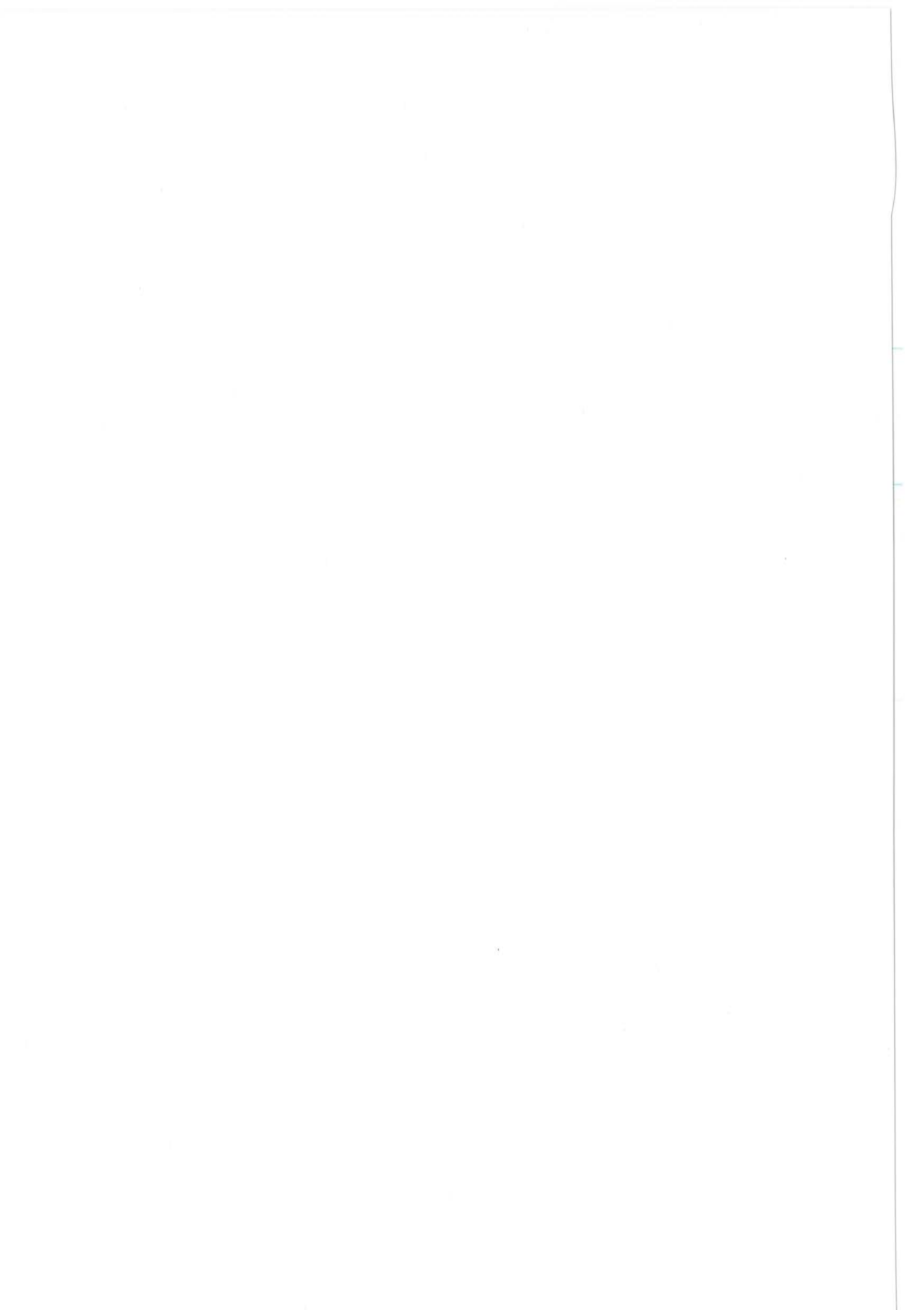


卷首図版 8 上・下：遺物出土状況



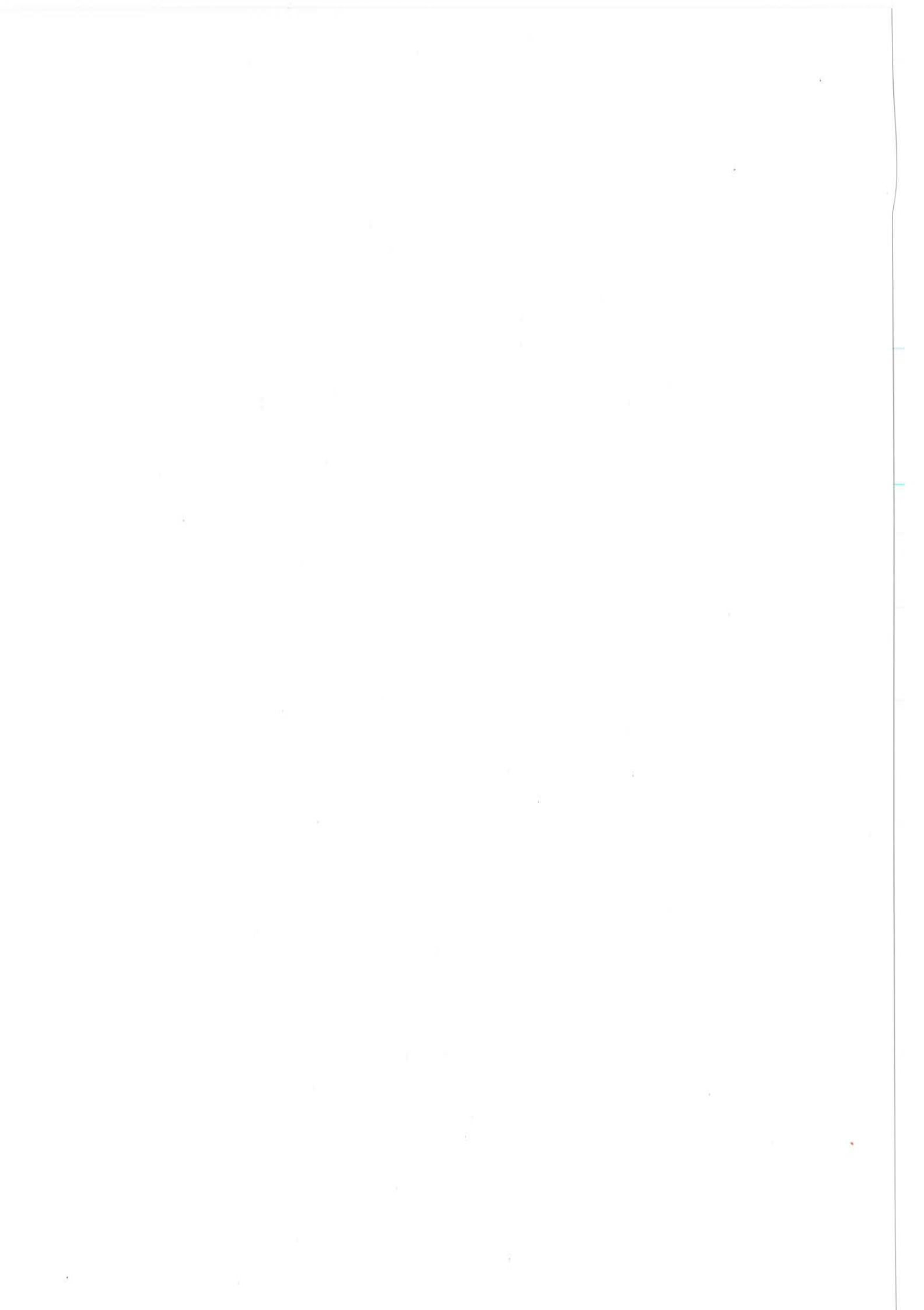


卷首図版9 上・下：井戸遺構





卷首図版10 上：井戸遺構検出状況 下：井戸遺構断ち割り



序

本報告書は、県庁舎建設局からの分任を受け、平成2年度から平成3年度にかけて実施した県庁舎警察棟建設工事に伴う緊急発掘調査の成果を記録したものであります。

県庁舎は、行政棟・議会棟・警察棟の3つのセクションから構成され、それぞれが独立した建物として昭和61年に行政棟建設工事に着手し、平成5年の警察棟の竣工をもって完成しました。

本報告書はこれまでに報告してきました『湧田古窯跡（Ⅰ）－行政棟建設に係る発掘調査－』、『湧田古窯跡（Ⅱ）－議会棟建設に係る発掘調査－』に続く最後の報告書となるもので、『湧田古窯跡（Ⅲ）－警察棟建設に係る発掘調査－』として刊行するものであります。

ご承知のように県庁舎が位置する一帯は、古く17世紀頃には湧田村があり、現在の壺屋窯の開設よりも60年も前に焼き物が作られていた地であります。

その記録として琉球王府が編纂した「球陽」の中に湧田窯創建の記事を見ることができます。

湧田古窯跡の発掘調査は、沖縄の窯業史研究に大きな影響を与えたと言っても過言ではありません。特に行政棟の敷地一帯からは、中国や東南アジアにルーツがあると考えられている平窯が検出され、夥しい量の瓦、磚などが出土し、近世の生産遺跡の実態を把握するのに十分な資料を呈示したと言えます。

今回の警察棟地区からは、上焼、荒焼などの陶器や窯道具、陶土、坩堝等が出土し、行政棟地区とは様相が異った生産の場があったことが確認されております。また、遺構は湧田期から昭和の時期まで複雑に重複して検出されました。これにより、近世窯業地の湧田古窯跡の全容を浮き彫りにすることができたと考えております。湧田古窯跡の調査を契機に各地に残されていた古窯跡の発掘調査が行われるようになり、近世の窯業形態の研究に弾みがついたと言えます。

本報告書が遺跡の保護や文化財並びに歴史に対する認識と理解を深めるとともに、学術研究の一助になれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査及び資料整理作業にあたり、多大なるご協力を頂いた関係各位に対して深く感謝いたします。

平成9年3月

沖縄県教育委員会
教育長 仲里長和

例 言

1. 本調査報告書は1990年度（平成2）から1991年度（平成3）にかけて県教育委員会文化課が県庁舎建設局からの分任を受けて、県庁舎警察棟の建設に伴って発掘調査された記録をまとめたものである。
2. 第Ⅱ章で掲載した『那覇読史地図』（明治初年の那覇）は嘉手納宗徳氏の製作によるものである。
3. 第Ⅱ章第4図で使用した2500分の1の国土基本図は建設省国土地理院発行によるものである。
4. 本書に表示した高度値は全て海拔高である。
5. 各章の執筆は下記のように分担し、編集は長嶺均が行った。
大 城 慧（第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章）
豊見山 禎（第Ⅳ章）
6. 発掘調査で出土した遺物及び本書に掲載した実測図、写真類等の資料は全て、県教育委員会文化課資料室に保管している。

本文目次

卷首図版	
序	23
例言	24
報告書抄録	28
第I章 調査に至る経緯	31
第1節 調査に至る経緯	31
第2節 調査体制	31
第II章 位置と環境	34
第III章 調査の方法と経過	37
第1節 調査の方法と経過	37
第2節 発掘調査日誌抄	38
第IV章 層序と遺構	42
第1節 層序	42
第2節 遺構	43
第V章 結語	58

図目次

第1図 沖縄本島及び那覇市の位置	29
第2図 湧田古窯跡の位置と調査地域	30
第3図 古地図に見る湧田村	35
第4図 現県庁舎と発掘調査地区	36
第5図 層序	45
第6図 窯体（1号窯）	46
第7図 廃棄土壌	47
第8図 グリッド設定図及び遺構の配置状況	48
第9図 遺構配置状況	49
第10図 石敷遺構	50
第11図 方形状遺構	51
第12図 石列遺構	52
第13図 瓦列遺構	53
第14図 井戸遺構（平面）	54
第15図 遺構配置状況	55
第16図 遺構配置状況	56
第17図 遺構配置状況	57

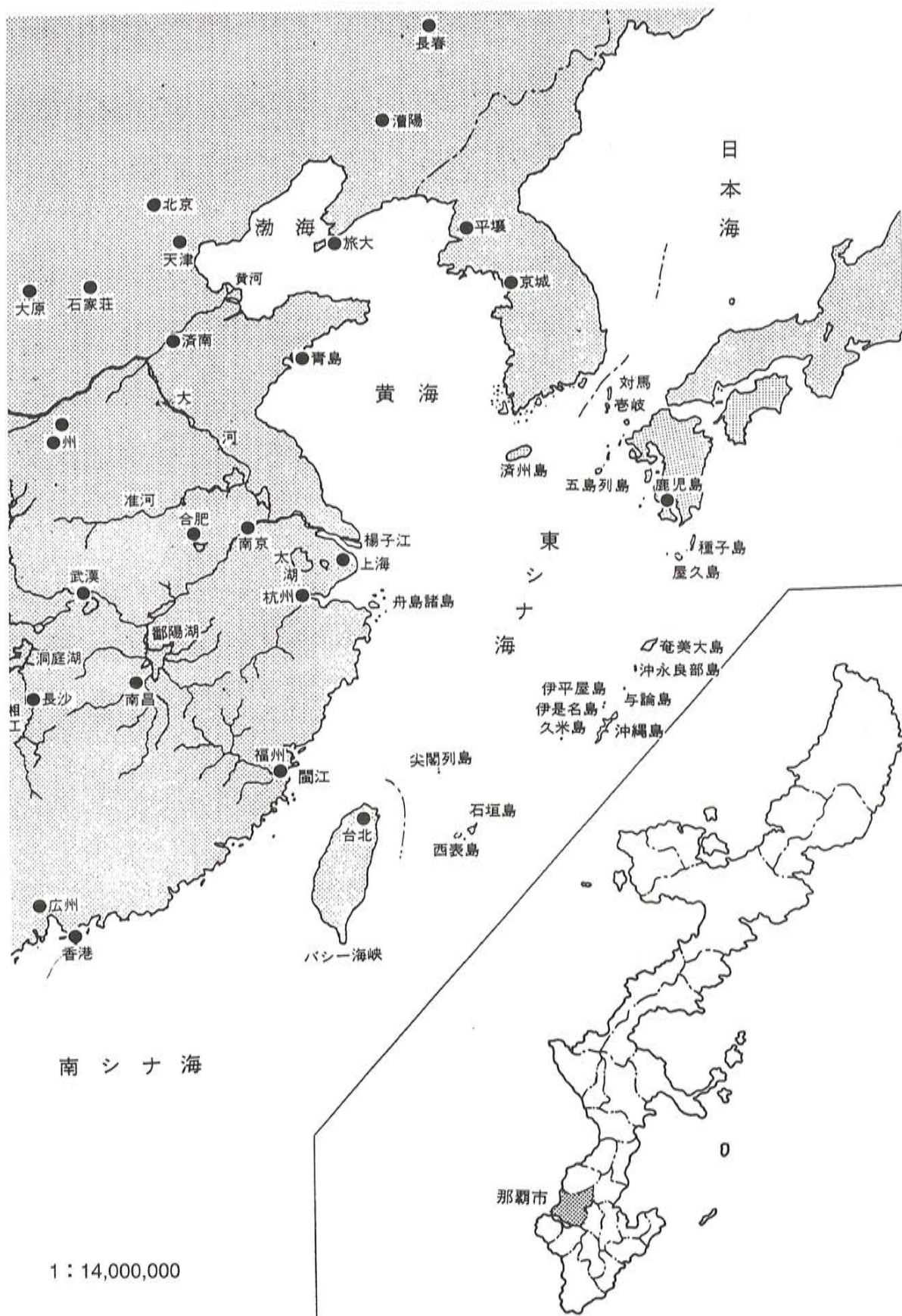
図 版 目 次

第1図版	発掘作業風景	61
第2図版	平板測量作業状況	62
第3図版	遺物包含層の堆積状況	63
第4図版	1号窯検出状況	64
第5図版	廃棄土壌検出状況	65
第6図版	遺物出土状況	66
第7図版	遺物出土状況	67
第8図版	遺物出土状況	68
第9図版	獣骨出土状況	69
第10図版	遺物集中遺構検出状況	70
第11図版	遺物集中部検出状況	71
第12図版	土壌検出状況	72
第13図版	礫集中部検出状況	73
第14図版	礫集中部検出状況	74
第15図版	石溜り検出状況	75
第16図版	建物遺構検出状況	76
第17図版	建物遺構検出状況	77
第18図版	建物遺構検出状況	78
第19図版	建物遺構基礎跡検出状況	79
第20図版	石積遺構検出状況	80
第21図版	井戸遺構検出状況	81
第22図版	井戸遺構検出状況	82
第23図版	井戸遺構検出状況	83
第24図版	井戸及び周辺の遺構検出状況	84
第25図版	方形状遺構検出状況	85
第26図版	方形状遺構検出状況	86
第27図版	方形状遺構検出状況	87
第28図版	方形状遺構検出状況	88
第29図版	方形状遺構検出状況	89
第30図版	方形状遺構検出状況	90
第31図版	方形状遺構検出状況	91
第32図版	方形状遺構検出状況	92
第33図版	円形状遺構検出状況	93
第34図版	各種遺構検出状況	94
第35図版	各種遺構検出状況	95
第36図版	各種遺構検出状況	96
第37図版	2号石列遺構検出状況	97

第38図版	石列遺構検出状況	98
第39図版	各種遺構検出状況	99
第40図版	方形状遺構検出状況	100
第41図版	方形状石敷遺構検出状況	101
第42図版	石敷遺構検出状況	102
第43図版	大溝遺構検出状況	103
第44図版	溝遺構検出状況	104
第45図版	各種遺構検出状況	105
第46図版	ピット群検出状況	106
第47図版	ピット群検出状況	107
第48図版	ピット群検出状況	108
第49図版	ピット群検出状況	109

報 告 書 抄 録

ふりがな	わくたこようあと							
書名	湧田古窯跡（Ⅲ）							
副書名	県庁舎警察棟建設に係る発掘調査							
巻次								
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第129集							
編著者名	大城慧・豊見山禎・長嶺均							
編集機関	沖縄県教育委員会文化課							
所在地	〒900 沖縄県那覇市泉崎1丁目2-2 TEL 098-866-2731～2733							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わくたこようあと 湧田古窯跡	おきなわけん 沖縄県 なはしいづみざき 那覇市泉崎	47201		26° 12' 28"	127° 40' 58"	1990年10月 ～ 1991年7月	7,800	県庁舎警察 棟建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湧田古窯跡	生産遺跡	近世	方形瓦敷遺構 窯体 廃棄土壌 石敷遺構 溝状遺構 石列 瓦列 井戸遺構 柱穴群		青磁 白磁 染付 褐釉陶器 色絵 瑠璃釉 黒釉陶器 三彩 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 土器 陶質土器 瓦質土器 青銅製品 古銭、埴埴			



第1図 沖縄本島及び那覇市の位置



第2図 湧田古窯跡の位置と調査地域

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

県庁舎建設事業は、昭和61年に着工して以来、行政棟、議会棟、警察棟と順次工事が進められ8年間の歳月をかけて全ての新しい行政施設が完成しました。県庁舎が位置する付近一帯は、17世紀頃の焼物の生産が行われていた地で湧田村が存在していたところである。戦後の焼け野が原から復興して次々と開発が進められ、近代的な建物が建ち並ぶ行政の中心地となった。その間、周辺地の文化財の調査が実施される機会がないまま、湧田村が地下に埋もれることとなった。しかしながら、以前から庁舎一帯は湧田焼の上焼や荒焼の陶器片が採集されていたところで、文献や焼物関係者の中では周知されていたところである。そのような歴史的環境を有したこの地域に、新庁舎の建設が計画され文化財との調整が必要となった。

湧田古窯跡の本格的な発掘調査は、昭和61年の行政棟建設工事に伴う緊急発掘調査（調査面積約5,000㎡）を契機として、平成元年には議会棟（調査面積約3,000㎡）、平成2年には警察棟（調査面積約7,800㎡）が実施された。約15,000㎡に及ぶ広大な面積からは、そこに生活した人々の残した膨大な量にのぼる遺物と遺構が発掘され湧田古窯跡の様相が確認された。これらの多くの成果を提供した湧田古窯跡も調査後は消滅した。警察棟建設予定地は、旧第2庁舎を建設する際の基礎工事の際に破壊されている箇所もあったが、中庭や駐車場として利用されていたところは、地下包含層が比較的良く残っていた。

警察棟建設に伴う緊急発掘調査は、先に実施されてきた行政棟、議会棟建設に伴う事前の協議調整の反省にたつて、県庁舎建設局と教育庁文化課との連絡会議がもたれるなど、工事着手前の事前協議調整を早めにするるとともに、事前確認調査、さらに本調査の為の調査計画がたてられた。

発掘調査は平成2年10月から開始され平成3年7月までの約10ヶ月の期間を費やした。同年8月には現場業務完了報告とともに、県庁舎建設局へ現場の引き渡しをした。

第 2 節 調査体制

発掘調査は1990年（平成2年）～1991年（平成3年）にかけて、約10ヶ月間の長期に及ぶ調査となった。発掘調査から資料整理については県文化課が行った。

調査及び出土資料の整理、報告書刊行までに至る業務体制は下記のとおりであった。

調査組織

調査主体 沖縄県教育委員会

教 育 長	高良清敏（平成元年度～平成2年度）
〃	津留健二（平成3年度～平成4年度）
〃	嘉陽正幸（平成5年度～平成6年度）
〃	仲里長和（平成7年度～）
文 化 課 課 長	宜保栄治郎（平成元年度～平成3年度）
〃	金城功（平成4年度）
〃	糸数兼治（平成5年度）
〃	西平守勝（平成6年度～平成7年度）

文化課課長補佐	大城将保 (平成8年度～)
〃	平田興進 (平成元年度)
〃	上江洲均 (平成元年度～平成2年度)
〃	伊佐真一 (平成2年度～平成3年度)
〃	知念勇 (平成3年度～平成6年度)
〃	川満一成 (平成4年度～平成5年度)
〃	新垣末子 (平成6年度～平成7年度)
〃	日越国昭 (平成7年度～)
〃	稲嶺靖子 (平成8年度～)

調査事務

管理係係長	仲里哲雄 (平成元年度～平成3年度)
〃	大村光仁 (平成4年度～平成5年度)
〃	比屋根正治 (平成6年度～)
〃主事	波平淳 (平成元年度)
〃	上原節子 (平成元年度)
〃	照屋邦雄 (平成元年度～平成2年度)
〃	新垣昌頼 (平成元年度～平成3年度)
〃	仲里富代 (平成元年度～平成2年度)
〃	玉村良子 (平成2年度～平成4年度)
〃	上間尚子 (平成2年度～平成4年度)
〃	比嘉美代子 (平成3年度～平成5年度)
〃主任	伊波盛治 (平成4年度～平成6年度)
〃	當間保智 (平成7年度～)
〃主査	新垣和子 (平成5年度～平成6年度)
〃	新垣敏子 (平成7年度～)
〃副主査	宮城直子 (平成5年度～平成6年度)
〃	新崎文子 (平成6年度～平成7年度)
〃	村山佐代 (平成8年度～)
〃	上原直樹 (平成8年度～)

調査総括

埋蔵文化財係長	安里嗣淳 (平成元年度～平成2年度)
〃	大城慧 (平成3年度～)
発掘調査員	豊見山禎 (充指導主事 現県立開邦高等学校教諭)
〃	長嶺均 (文化課主任)
〃	金城亀信 (文化課主任)
〃	上地千賀子 (前文化課嘱託調査員)
発掘調査員補助員	大城聖子 (前文化課嘱託調査員)
〃	山城安生 (現北谷町教育委員会文化課)
〃	矢沢秀雄 (文化課嘱託調査員)
〃	田中ゆきの (文化課嘱託調査員)

新城恵（前文化課嘱託調査員）

発掘調査協力員 池田栄史（琉球大学助教授）

発掘調査作業員

比嘉まり子、鳩間利恵子、与儀恵子、川上益子、金城敬子、宮城サダ子、上原美智子、大村由美子、中塚末子、宮国恵子、与那嶺勢津子、中田邦子、具志常子、幸地マサ子、諸見里豊子、兼城光子、金城春江、森田良子、辺土名キヨ子、赤嶺晴美、並里富子、新垣直美、大城豊子、上原美枝、仲間末子、山川トシ子、金城由美子、新里造一、島尻三郎、比嘉すが子、金城一美、金城ツネ子、渡嘉敷セツ子、上原春子、金城八重子、新里新吉、山内政子、新垣ナヘ子、平良康子、平良ツル子、比屋根美代子、呉屋救、新垣シゲ子、知花まさ子、新城トシ子、幸地ヨシ子、小波津夏子、与那城妙子、川上サツ子、中村芳美、儀間トヨ、城間ハル子、比屋根トミ、仲村ツル、与那原寛貴、小橋川幸子、玉城富子、杉山知寿子、比嘉キク、呉屋正一、知念政行、金城米子、西銘パトロシニア

遺物洗浄作業員

名嘉夏樹、嘉数キミエ、小沢紀美子、親泊貞子、上原涼子、伊志嶺ひとみ、岡村綾子、真境名百合子、新垣かおり、山城淳子、上原菊枝、中村昌子、大城好昭、牧志珠代、吉田トヨ子、饒平名安子、上原美穂子、大城敏子、大城好明、嶺井米子、平良加代、山城ツヤ子、宮城伸一

資料整理作業員

石嶺真由美、源河秀子、安次富智子、新垣由美子、城間悦子、玉城初子、渡慶次純子、譜久村郁子、安西いずみ、上原美智子、浜元春江、石橋朝子、川満美智子、石嶺さゆり、外間峰子、新垣千恵子、金城美祈、田中睦美、大城淳子、備瀬枝美子、呉我フジ子、仲原邦江、知念純子、瑞慶覧尚美、池原直美、金武雅子、金城敬子、大村由美子、折田衣子、玉寄智恵子、長田剛、上原園子、崎原千恵子、我那覇悠子、仲宗根三枝子、城間千鶴子、外間瞳、長嶺初子、大城勝江、渡慶次ゆかり、西銘定子、大城聖子、池田悦子、當山慶子、嘉数禮子、高良三千代、手嶋永子、木佐貫るみ子、吉岡好子、川上益子、宮城サダ子、照屋利子、西銘パトロシニア、津波古好子、鳩間利恵子、比嘉まり子、与儀恵子、新垣直美、安和千代子、高宮とり、普天間直也、仲村恒子、岡村綾子、比嘉昌子、杉山知寿子、神村英樹、神村英世、矢沢秀雄、座間味美津子、平良貴子、金城礼子、上原博美、城間桂子、島袋春美、又吉純子、池田悦子、田中ゆきの、新城恵、比嘉優子、仲嶺朋恵、伊波小百合

第Ⅱ章 位置と環境

湧田という地名は、現在では消滅したが、古くは那覇市の四町（西町、東町、若狭町、泉崎町）の商業地域とともにその南東側に隣接し窯業を中心に活気を呈した村で、その範囲は広範囲に及び現在の那覇市泉崎1丁目2番2号一帯から2丁目、南側は壺川の一部を含んでいたとされている。その中で湧田古窯の範囲がハーバービューホテルや旧ラジオ沖縄が位置していたところまで広がっていたとされている。

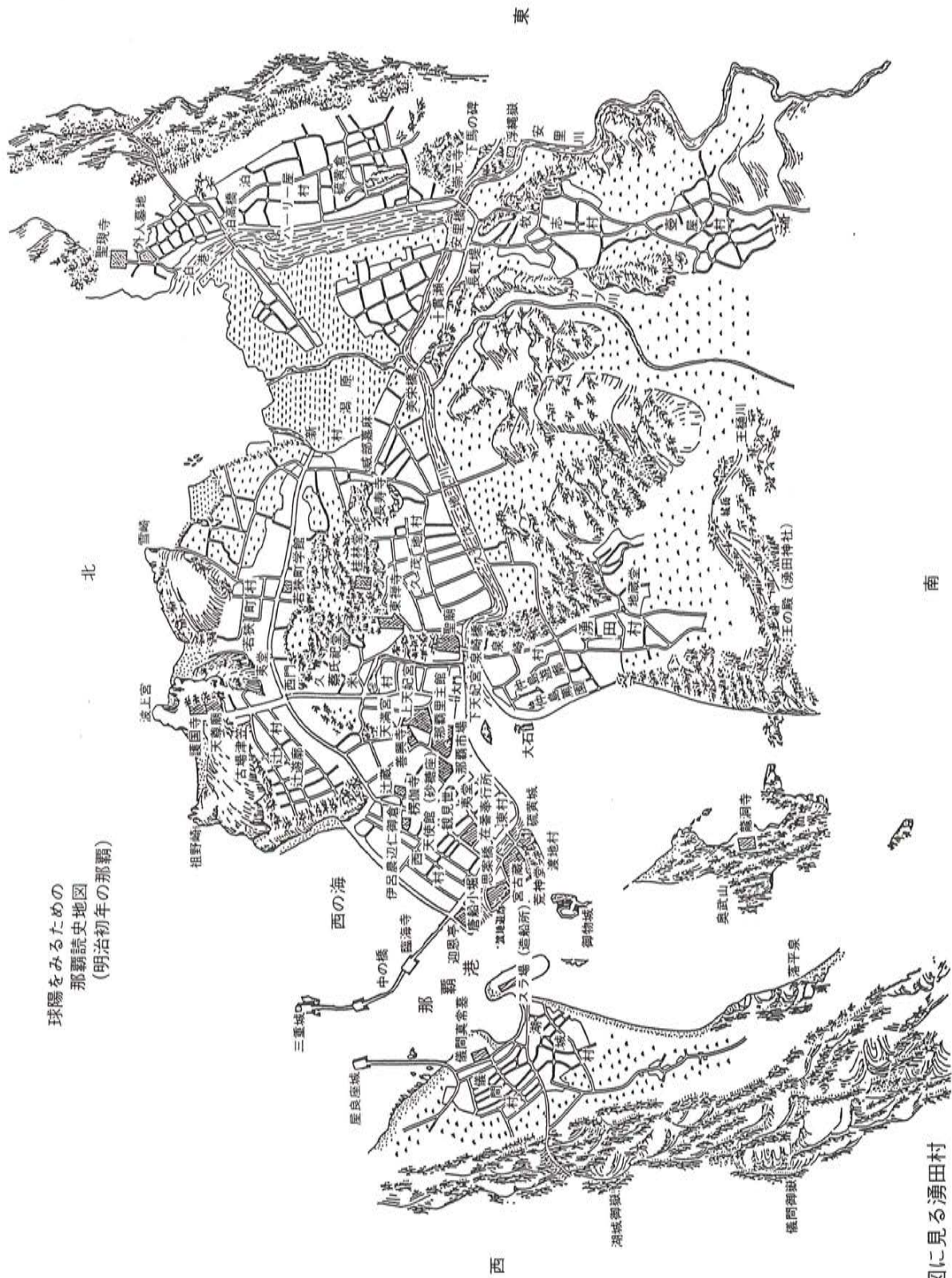
旧湧田村が位置していたところを明治初年の那覇を表した『那覇読史地図』を見てみると泉崎村と湧田村が隣接し奥武山は海上に浮かぶ浮島となっている。さらに周辺の歴史的環境や地形を『南島風土記』の記事のなかにみることができる。それによると、泉崎は、識名丘陵からの続きで、安里川と國場川との間を走って古波蔵から城岳の丘陵を越し、那覇港に舌状に突きだした小さな丘陵地であったとされている。いわゆる那覇港へ流入する入り江近くに形成された丘陵縁端部に形成された村であった。

地形的には、現在の楚辺や城岳一帯には琉球石灰岩の丘陵地が広がり、西側（現在のバスターミナルや那覇市役所、開南小学校にかけては、湿地帯がひろがる低地帯であったとされている。地質をみると鳥尻層群（砂岩、泥岩）が基盤をなし、内陸側は琉球石灰岩がそれを覆い、さらにその風化土である赤褐色土（鳥尻マージ）が堆積している。また、通堂町から奥武山一帯は、現在でこそ埋立による陸地部分が広がっているが、その昔は小さな浮島が点在していたとされている。明治橋が架けられるまで小禄、垣花方面から那覇市街への交通は小さな小舟による海上ルートによっていたとされている。

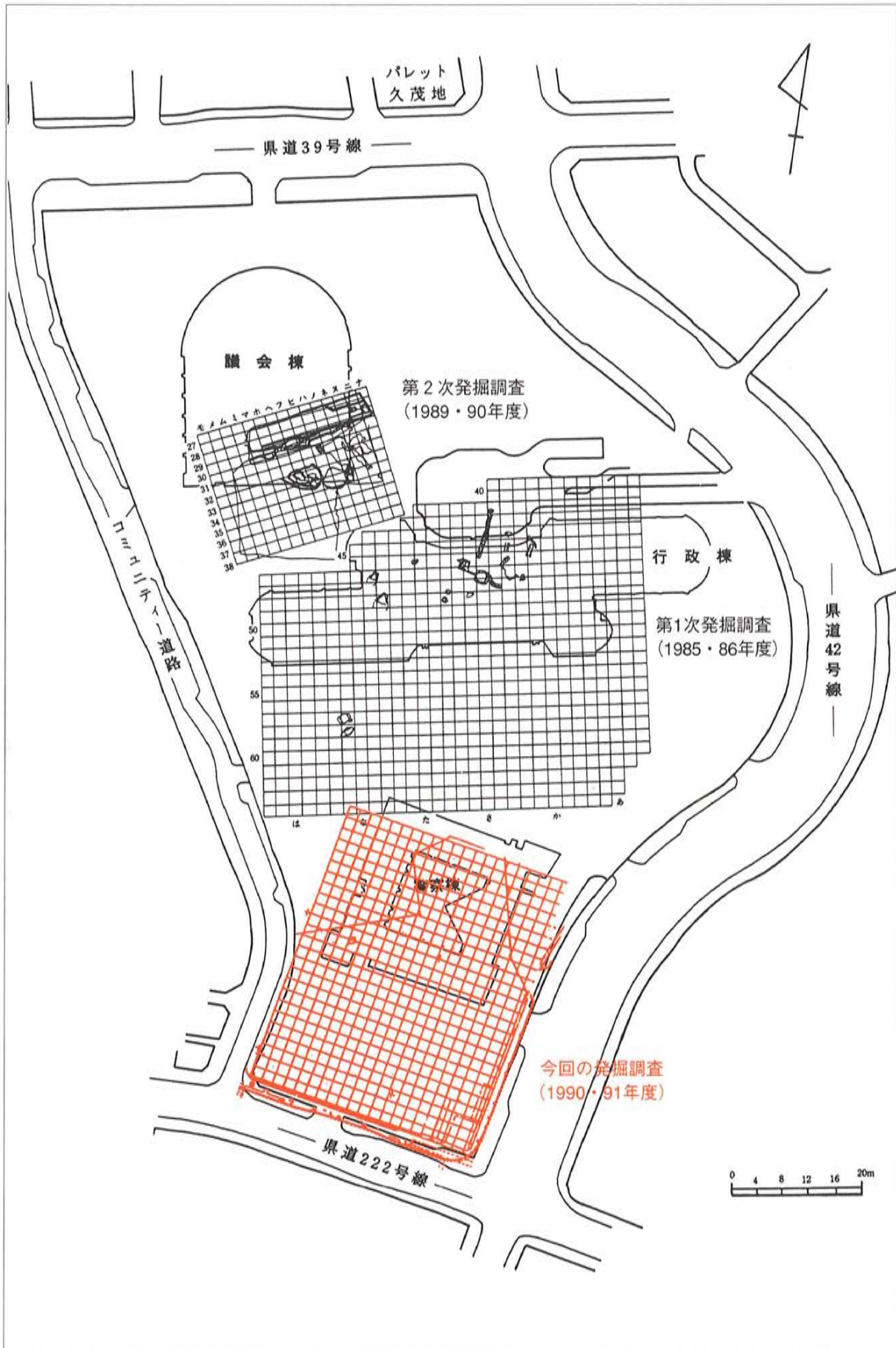
また、湧田村は、古くは1838年（尚育4）の冊封の冠船の来航の際に冊封使一行の滞在期間中の飲料水供給の地としても重宝されるなど、湧田村に存在した湧田井一の管理なども行われたとされている。それを記した碑文（1865年尚泰18）が建立されていたとされているが、去った沖縄戦において破壊され、現在はその跡形も残ってない。この地が首里王府のお抱えの窯業生産地として多くの焼き物を生産しており、特に1616年に尚豊の王命により、薩摩から朝鮮（高麗人）の一六、一官、三官などの陶工を連れて帰り、焼き物の技術を伝授している。沖縄の代表的な陶工である平田典通・中村渠致元らも、ここ湧田村で作陶業に精を出し多くの製品を生み出していったと言われている。

1682年に現在の壺屋の地に統合されるまでの約65年余の間、近世の時期における琉球最大の窯業の村の一つであった。その後、この一帯は明治期から大正期、昭和にいたる各時代を通して県庁や県立図書館など公共施設が立ち並ぶ那覇市の中心地と変わっていった。しかしながら、去る大戦において、ことごとく町は灰燼に期し、戦前からの旧来の町並が消滅した。戦後は再び現在の地に民政府が建設され行政の中核センターとしての位置を占め今日に至っている。

球陽をみるための
那覇読史地図
(明治初年の那覇)



第3図 古地図に見る湧田村



第4図 現県庁舎と発掘調査地区

第Ⅲ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法と経過

警察棟建設予定地内に係る発掘調査は、これまでの行政棟（5,000㎡）及び議会棟（3,000㎡）建設に伴って実施してきた一連の緊急発掘調査によるもので、県庁舎建設事業に係る最終調査区として県庁舎建設局と調整に入った。行政棟、議会棟建設の際の協議を踏まえて建設着手前の事前協議が早期に図られた。

発掘調査については、旧第2庁舎の解体撤去後の更地になったところに調査範囲を設定した。調査期間は平成2年10月から平成3年7月までの約10ヶ月で、調査面積は7,800㎡を対象に実施した。さらに工事着手後の基礎工事中に新たに人骨が出土した為、緊急に12月から4日間の追加調査を実施した。

調査中途において、台風の接近により、発掘調査の進行に一部影響を受ける等、調査の制約もあった。最終的には行政棟、議会棟地区を上回る調査面積となった。旧第2庁舎が残っていた場所は、地山面まで基礎工事により深く掘削され破壊されている状況であった。しかしながら、中庭や駐車場として利用されていたところについては、湧田期のオリジナルな遺物包含層がよく残っていた。

調査区の設定は、警察棟地区全体に4m×4mを1単位としたグリッドを組んでいった。グリッドの基準線は東西ラインとし、南側隅に基本点を設定した。グリッド名は南側ラインから北側へア、イ、ウ、エ、オとし、さらに東側から西側へ1、2、3、4、5、と算用数字を使いアー1、アー2、イー1、イー2と順に番号を振っていった。

発掘調査は、南側、西側、東側の順に重機により客土の除去を行った。西側寄りでは攪乱が著しく湧田期の包含層は大きく攪乱されている状況であった。中央部（前庭部分）については、比較的安定した土層が続き表土より約70cm下からは茶褐色の土層の広がりが見られた。第Ⅲ層とした湧田期の生活層として捉えた層である。中央部については表土除去の段階で昭和期の建物の基礎石や屋敷囲いの石垣跡が出土するとともに、湧田期の瓦片、荒焼、上焼きの陶器片が混在して出土してくることから、昭和期の遺構が見え始めたところから作業員による手堀による発掘を実施し、表土除去後に東西ラインと南北ラインの土層セクションを設けた。中央部と南側、東側に集中して湧田期の遺物や遺構が出土したことからⅢ地区に特に限定した調査となった。

中央部の発掘状況からは、建物が位置していたと思われる場所はほぼフラットに近い状態で造成されており、西側から北側にかけてゆるやかに傾斜している。建物跡に床もちの基礎石が検出され、ほぼ等間隔（50cm～60cm）で並んで出土した。掘り上げ面は木炭混在で焼けたガラス質の滓とともに焦土面が広がっていた。石垣は東西方向に積み上げられているが、小振りの石灰岩、サンゴ礫を使ったあいかた積みであった。

遺構は昭和期から湧田期の時期まで複雑に重複した状況で、さらに下層の地山上面には湧田期よりも一時期古いピット群が検出された。以上のように昭和初期の建物の礎石や井戸、屋敷囲いの石垣跡、排水溝が出土するとともに、湧田期の層からは窯跡や擧大の礫を敷き詰めた小道の石敷跡、井戸、方形の石組遺構等が検出された。さらに、その下層には地山面に掘り込まれた小ピット群、石列、瓦溜まり、排水溝状遺構が検出された。遺物は瓦をはじめ、陶磁器、窯道具、鉄滓、埴塼、金属製品、古銭、歯ブラシ、人骨、獣骨等コンテナ数約1,700箱の膨大な量が出土した。

調査終了後は、調査区全体を埋め戻した後に県庁舎建設局へ現場を引き渡した。

第2節 発掘調査日誌抄

1990年（平成2年）

- 10月15日（月） 本日から発掘調査を開始する。調査面積約7,800m²。
掘削機械により客土の除去作業、調査区の南側から始める。
旧第2庁舎の基礎や配水管が残っており、深く攪乱されている。後世の赤色瓦とともに湧田焼碗、播り鉢、荒焼の甕の破片が混在して出土してくる。
- 10月16日（火） 掘削機械により西側地区の客土の除去作業も始める。西地区においても旧庁舎の基礎コンクリートが残っており深く攪乱されていた。戦前の建物の基礎石が出土。戦災により焼けており、基礎石の周辺にガラス片が散在していた。
現場事務所への発掘調査機材等の搬入。
- 10月17日（水） 東地区、南地区の客土の除去。東南側から40cm～50cm下で地山面が露出してくる。
遺物包含層は確認できなかった。
- 10月19日（金）
- 10月22日（月） 今日から発掘作業員が入る。手掘りによる包含層面の検出作業。黒色土の包含層面が広がる。石積みの円形状井戸が出土。
- 10月23日（火） 調査区中央部付近において敷き石の一部が出土。作られた時期は判然としないが、上部に薄く漆喰様なものが塗られている。
井戸は円形でやや歪みがある。径は約70cm前後と小さい。周囲は石で取りまいていいる。井戸の周辺には焼土が残っており、地山面を深く掘り込んでいる。
井戸、敷き石の出土状況の撮影。テントの搬入。
- 10月24日（水） 調査区全体の客土の除去が続く。昭和期から湧田期の遺物が混在して出土。
中央部付近において石列が出土、漆喰が塗られている。比較的フラットな状態で包含層が広がっている。
- 10月25日（木）
- 10月26日（金） 中央部の客土部分の除去、上層部分の発掘。
建物の基礎と石垣の一部が検出された。時期的には新しい遺物が混在していることから、戦前のある時期の建物の可能性あり。全体的に火を受けた跡があり、もろくなっている。礎石は約80cmから90cmの間隔で配置されている。素材は琉球石灰岩、珊瑚石。石垣は50cmから60cmの高さで、屋敷囲いの石が東西方向に積み上げられている。
- 10月29日（月）
- 10月30日（火） 西地区、南地区の発掘。
褐色土の包含層が部分的に残存しており、木炭の混ざりが見られる。地山を切り込む形で東西方向に石垣が出土。石材は珊瑚石で鑿の加工痕が残っている。あいかた積みとなっている。片面だけの化粧積みで土留めとして積まれたものである。
- 11月7日（水） 建物の基礎石の一部が出土した。
西側壁面より方形状の石組遺構が出土。小規模の範囲で10cmから20cm大の琉球石灰岩を加工している。遺物はかなりの量出土しているが、覆土中からのものが大半である。瓦類は少ない。上焼、荒焼の碗、煙管、貨銭、播鉢、褐釉陶器、黒釉陶器、染付等。

- 11月8日(木) 発掘の為のグリッド設定。1グリッド4m×4mとして東西ラインを基本軸とした。
 \
- 11月22日(木) クイ打ち作業。中央地区の包含層の掘り下げ。第3層茶褐色土層は湧田期の包含層
 となっている。窯道具、湧田焼の灰釉碗、漁網錘、播鉢等が出土。第2号井戸の検
 出。円形状の井戸回りは2重の石積みとなっている。井戸に付設した袖石積みが両
 脇に位置し、その間を石敷きで埋められている。湧田期に利用された井戸の一つで
 ある。
- 11月23日(金) 勤労感謝の日。現場は休み。
- 11月26日(月) 中央部の発掘。全体の俯瞰撮影。
 \
- 11月27日(火)
- 11月28日(水) 台風28号の接近で発掘作業中止。遺物の洗浄作業。
- 11月29日(木) 中央部に入るが、雨で午後から中止。
 \
- 11月30日(金)
- 12月3日(月) 中央部の発掘。第2層(攪乱層)の掘り下げ。昭和期の建物基壇の検出。出土遺物
 \ は新しい時期と湧田期のものが混在している。陶器、播鉢、貨銭、赤瓦、染付、褐
 釉陶器。
- 12月7日(金)
- 12月10日(月) 中央部の発掘。昭和期～大正期の建物跡か。排水溝、セメント張り、漆喰塗り。第
 5号井戸の検出。中央部の平板測量。西側地区に発見された不発弾の撤去。
- 12月14日(金) 自衛隊不発弾処理班による撤去。
- 12月17日(月) 南西地区の発掘。平板測量。マスコミ各社への中間報告。記者会見。
 \ 調査区域の聞き取り調査を始める。現在、発掘している地区は戦前期の県庁舎構内
 の一部と考えていた。
- 12月21日(金) 昭和4年頃を想定した那覇市の民俗地図を参考に検討したところ、検出されている
 建物の跡は県議会棟や県立図書館の一部にあたるものではないかと考えた。ところ
 が、聞き取り調査の結果は、県庁舎の構内とは別に隣接していた「カラー」一帯
 の敷地であった。その当時、一帯は個人の住宅が建ち並ぶところであったとしてい
 る。
- 12月25日(火) 南西地区、中央部分の発掘。第3層茶褐色土層の掘り下げを続行。一部は地山面が
 \ 露出。東側でやや高くなり、西側へ傾斜していく。焼土面の広がりが見られる。
- 12月27日(木) 遺物は細片ながらよく出土する。青磁片、染付、荒焼のカメ等が出土。昭和期の建
 物跡の割り付け作業。
- 12月28日(金) 午前中中央部の発掘。建物跡の20分の1の実測作業。
 御用納め。
- 1991年(平成3年)
- 1月4日(金) 御用始め。1月からは中央部、南西地区を中心に掘り下げを行う。湧田期の包含層
 の掘り下げと昭和期の建物跡、石垣部分の発掘に終始した。
- 1月7日(月) 今日から再び本格的な発掘調査を実施。中央部、南西地区の掘り下げ継続中。
 \ 中央部から手榴弾1個が出土した。那覇署へ連絡。第4号井戸の割り付け作業。小
 礫の石列が出土。方形状の石列囲いの中に石を敷き詰めた遺構が検出された。出土

- 遺物は湧田期のものが多くなる。
- 2月1日(金) 南西部の発掘。中央部の発掘。県庁舎建設局への調査状況の中間報告。第3層の茶褐色土層の掘り下げ、ソー8グリッドにおいて東西方向に延びる浅い溝を検出する。
- 2月28日(木) 1号溝とする。20cmと浅くU字状をなす。覆土中から荒焼、青磁、白磁等が出土。17世紀以降のものだと判断される。
- 3月1日(金) セー7、8では淡褐色土層中に灰色瓦、埴、甕等が集中して出土。ソー9、10では土坑が検出された。一括投棄された可能性がある。
- 3月1日(金) 3月に入ると湧田期の生活層の掘り下げが中心となる。途中雨天により発掘作業を中断する。中央部、南西部の発掘調査。中央部のセー4～6、ソー4～6、ター4～5にかけてピット群が検出された。淡褐色土層の掘り下げ。中央部は約6割が地山面までの露出作業が終わっており、地山面に小ピット群が検出されている。黒釉の急須と小壺が円形のピットの中から発掘された。コー10では地山面から赤色の陶質土器の完形品が出土。各ピット群の平板実測作業を始める。セー5に東西ラインに溝状遺構が検出された。2分の1の分割掘り下げを行う。第4号井戸の断ち割り断面実測。
- 3月29日(金) 戦前期の建物の基礎石と石列が残っていたところで図面と写真を撮り終えた後に、解体撤去し内部の掘り下げ。
- 3月29日(金) ケーライン、セクションベルト。北壁セクション図の作成。2号方形石組の掘り込み。ケー4に出土した窯跡の検出作業。
- 4月1日(月) 4月は中央部の発掘を集中的に行った。ピット群の全体の平板測量とピット内のレベル記入作業。淡褐色土層中からは瓦溜まりが確認された。全体的に遺物の出土が少なくなる。地山面の検出作業。東西方向に傾斜している。東西アゼの取り壊し作業。
- 4月30日(火) 5月は北側地区の発掘が中心となった。タ・チー6ではV字溝の上面とみられる遺物溜まりを検出する。湧田期と壺屋の時期が混在して出土する。溝状ブランの検出。
- 5月1日(水) 埋土状況の確認。北側地区に検出されたピット群の掘り下げ。1号、2号石列の平面実測。
- 5月31日(金) 6月は北側、西側地区の発掘が中心となった。北側ピット群検出。ウーラインの黒褐色土層の掘り下げ。ウー14において石組遺構と石集中部を検出。ウー18から明代の青磁、染付がかなり出土してくる。
- 6月3日(月) 発掘作業も終盤に入り、残りの北側、東側、西側地区部分の発掘。北側の地形測量。
- 6月28日(金) 北側ケー4において検出された1号窯の床面の残存部の検出と床面セクションの実測。2号井戸の掘り下げ。窯内のピット群の掘り込み。西側地山面の検出。西側地区の地形測量。20分の1のコンター作成。1号瓦列の平面実測。
- 7月1日(月) 北側チー3の東壁沿いに人骨が出土。
- 7月31日(水) 大方の調査が終了。出土した遺物、発掘機材等を収蔵庫へ搬出する。
- 8月1日(木) 北側の写真撮影。現場において人骨の鑑定を長崎大学医学部松下孝幸先生に依頼する(現在、山口県土井ヶ浜にある弥生ミュージアム館長)。鑑定の結果、成人男子で年齢40～60代、長身。日本人か否か断定が出来なかった。

- 8月5日(月) 1号窯東側の陶器廃棄土坑内の遺物取り上げ及び実測。
1号人骨の検出。土坑の南側には棺の側板の跡と見られる格子状の棧を検出する。
- 8月8日(木) 棺には地下足袋のそこが残っており、地下足袋をはいたまま埋葬したと判断された。
また、左腰近くにはブリキのケースに入ったメガネが副葬されていた。
- 8月9日(金) 1号人骨の取り上げ。調査区の埋め戻し。県庁舎建設局、那覇市環境公害衛生課、
県警鑑識課立会いによる人骨確認の後、取り上げ作業にはいった。
- 8月10日(土) 調査区全体を埋め戻したあと、全ての調査を終了。機材の撤収。現場を引き渡す。

第Ⅳ章 層序と遺構

第1節 層序

まず、本調査区の全体的な状況について概観すると、本調査区は、調査区のはほぼ中央に旧庁舎が位置しているため、庁舎部分は基礎によって、地下深く抉られていた。このため比較的遺跡の保存状況が良好とみられたのは庁舎周辺の前庭や空地部分と考えられた。しかしながら、これらの部分も本遺跡が廃絶したあと、屋敷地となり、更に第2次大戦の戦火を受けたのち、屋敷地は整地されたという経過をたどった結果、本遺跡の遺構及び遺物包含層はかなりの削平ないし攪乱をうけている。またこの地域の地形は地山面から想定すると、県庁前通りから張り出した微高地が開南小学校に向けて落ち込んでいく形状を示すものと考えられる。このような状況から、本調査区では、調査区西側では整地に伴うとみられる堆積層が覆い、東側では地山面近くまで削平をうけるという状況になっている。このため本遺跡に伴うとみられる遺構および遺物包含層を確認できたのは調査区の東側から北東側にかけての微高地上のごく限られた部分であった。

次に、本調査区の層位について述べる。本調査区の層位は前述したような状況から地区により部分的な堆積層が確認されたが、基本的な層序は以下の通りである（第5図）。

表土層 旧庁舎に伴う整地層で、石灰岩を破碎した礫から成る。

第2層 黒褐色土層。同層は屋敷地の下部から屋敷地を被覆する層で、本遺跡の廃絶後の整地に伴う層と考えられる。しかし、近現代の遺物の他、明代から清代にかけての中国産陶磁器および近世の国産陶磁器、沖縄産陶器など大量の遺物を包含している。

第3層 淡褐色土層。地山への移行層で、調査区東側から北東側にかけて分布する。地区によっては褐色を呈する。遺物の包含は少ないが、本遺跡に伴うとみられる遺構が検出され、遺物はこの遺構面に散乱した状態で出土している。遺物は沖縄産陶器・瓦類を主体とする。

地山 褐色の粘土質。

第2節 遺構

本調査区では、戦前期から本遺跡に属するとみられる近世期にかけての遺構が検出されているが、層序の項でも述べた通り、全体的に後世の攪乱及び削平を受けており、保存状態は良好とはいえない。しかしながら、後述するように窯体の一部・廃棄土壌及び石敷遺構の検出は本遺跡の性格を究明する上で貴重な手掛かりを得た。次に遺構の検出状況について述べる。まず、第2層（黒褐色土層）を掘り下げの段階で、調査区南半部において屋敷跡・井戸が検出された。屋敷跡は土留め石積み、礫石、犬走り状遺構、溜め井などから構成され、ガラスの散乱もみられた。また、礫石や土間には火を受けたとみられ、赤化した状況が観察された。さらに屋敷内部より、旧日本海軍の60キロ爆弾が木箱に入った状態で検出されるなど、この屋敷地が戦災により焼失した状況が確認されている。

次いで、第2層を完掘し第3層（淡褐色土層）から地山面にかけて、本遺跡に属するとみられる遺構が検出されている。これらの遺構は調査区東側から北側にかけて分布しており、第2層期に削平などの破壊を受けている。検出された主な遺構には窯体、廃棄土壌、石敷遺構・溝状遺構、石列、瓦列、柱穴群等がある。以下、第3層から地山面にかけて検出された遺構を中心に記述する（第6図～第17図）。

窯体（1号窯）（第6図）

調査区東側で1基確認された。主軸線は概ね南西－北東方向を示し、長軸方向約250cm、短軸方向約180cmを測る範囲に上部に黒褐色土、下部に赤色土の2枚からなる硬化面が検出された。後世の攪乱と削平を受けているため遺構の残存状況は良くない。残存部の断面の形状は、南西方向からほぼ水平な硬化面が約10°の角度で立ち上がっていることから、焚き口部に相当するとみられる。焼成室等の形状は残念ながら後世の削平により、詳細は不明であるが、焚き口部の形状及び窯床の傾斜の状況等から単室の登り窯であったと推定される（註1）。

註1. 池田栄史・松島朝義両氏のご教示による。

廃棄土壌（第7図）

調査区東側で、窯体に隣接して検出された。平面形は長軸方向280cmを測る不定形をなす。土壌内部から焼成中に破損した壺、厨子甕、播鉢等が一括廃棄の状態で見出されている。

石敷遺構と溝状遺構（第8図～第10図）

調査区東側で検出された。弧を描くように溝状の遺構が概ね南北方向に走り、その周囲を石灰岩の縁石を廻らせ、さらにその内側を石灰岩礫で敷きつめたもので、石敷面には沖縄産陶器が散乱した状態で検出された。またこの溝状遺構の外弧に平行する形で長さ約800cm、幅60cm、深度60－70cmを測る溝状遺構が廻る。この遺構は黒褐色土をまじえた多量の遺物によって埋積された状態で検出されている。

石列（第11図・第12図）

調査区中央で2基検出されている。2基はほぼ平行して概ね南西－北西に走る。東側より、1号・2号とした。1号石列は石灰岩礫から成り、幅40cm、長さ580cmを測る。北西端に同じく石灰岩礫を廻らせた溜め井状遺構が付属する。溜め井状遺構は長形状をなし、深度30cmを測り、内面は後世の補修によるとみられるコンクリートで被覆されている。

2号石列は、石灰岩礫から成り、幅80cm、長さ860cmを測る。石列中央には縁石が残存しており、排水溝ではないかとみられる。石列内部から沖縄産陶器・瓦・埴等が検出されている。

瓦列（第13図）

前述の石列とほぼ平行する形で検出されている。長さ440cmで一列検出されている。瓦は灰色瓦、赤褐

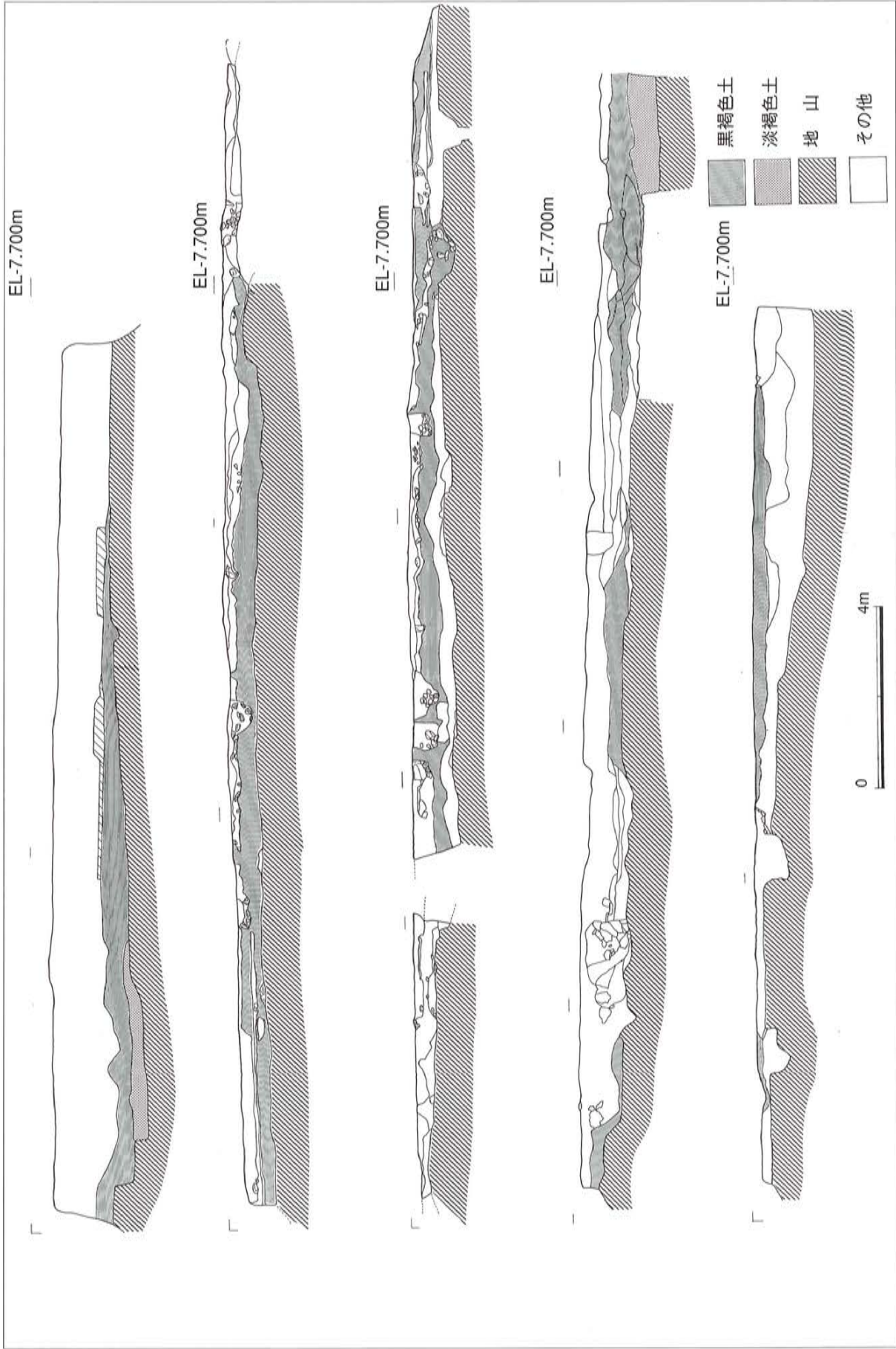
色瓦からなる。

井戸 (第14図)

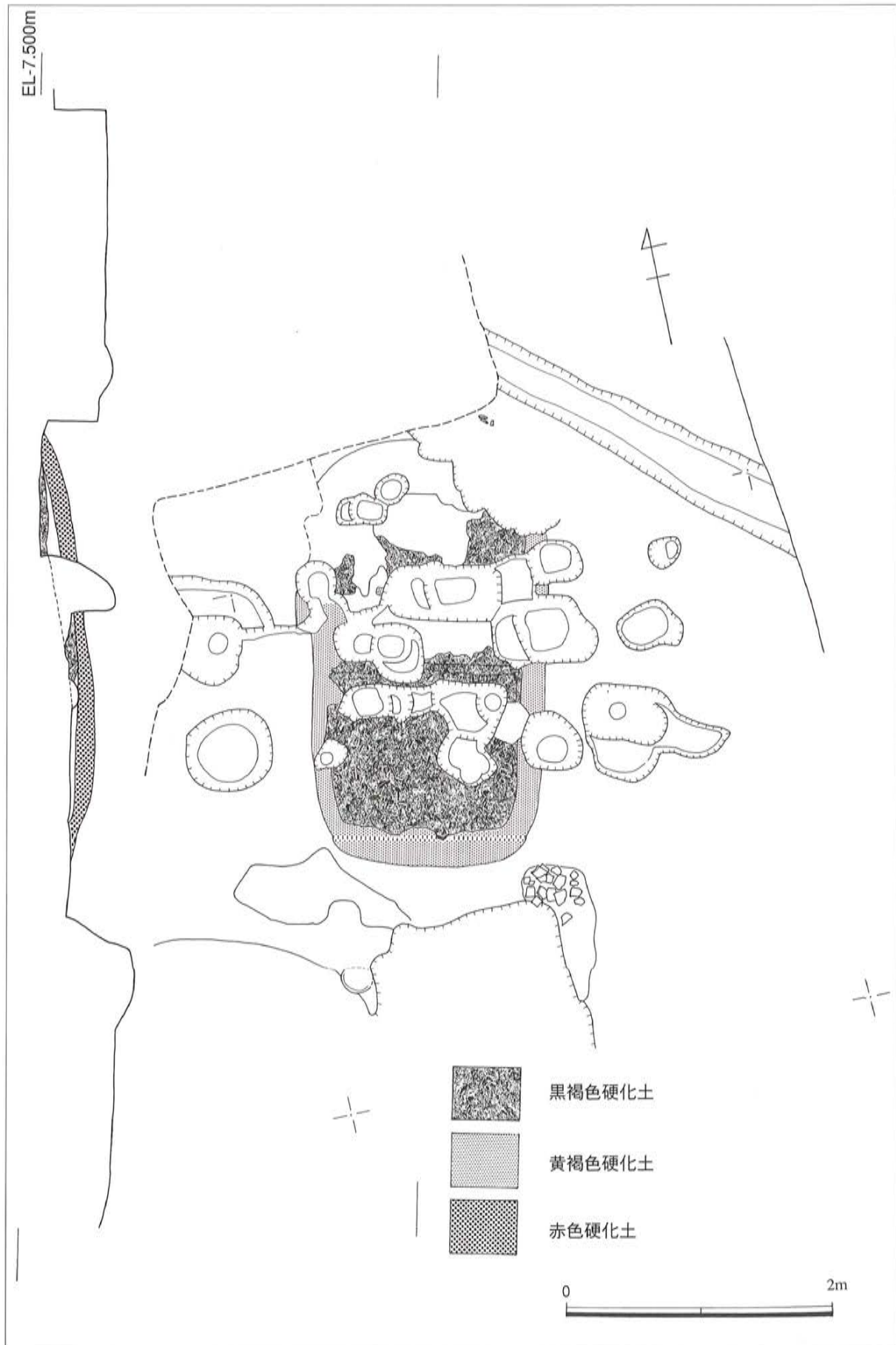
調査区東側で検出された。本調査区では合わせて5 - 6基の井戸が検出されているが、いずれも石灰岩礫を廻らせた円形状をなす掘り抜き井戸である。長軸方向460cm、短軸方向260cmを測る。この井戸は石敷き部を有するもので、周囲を縁石で廻らせる。

柱穴群 (第15図～第17図)

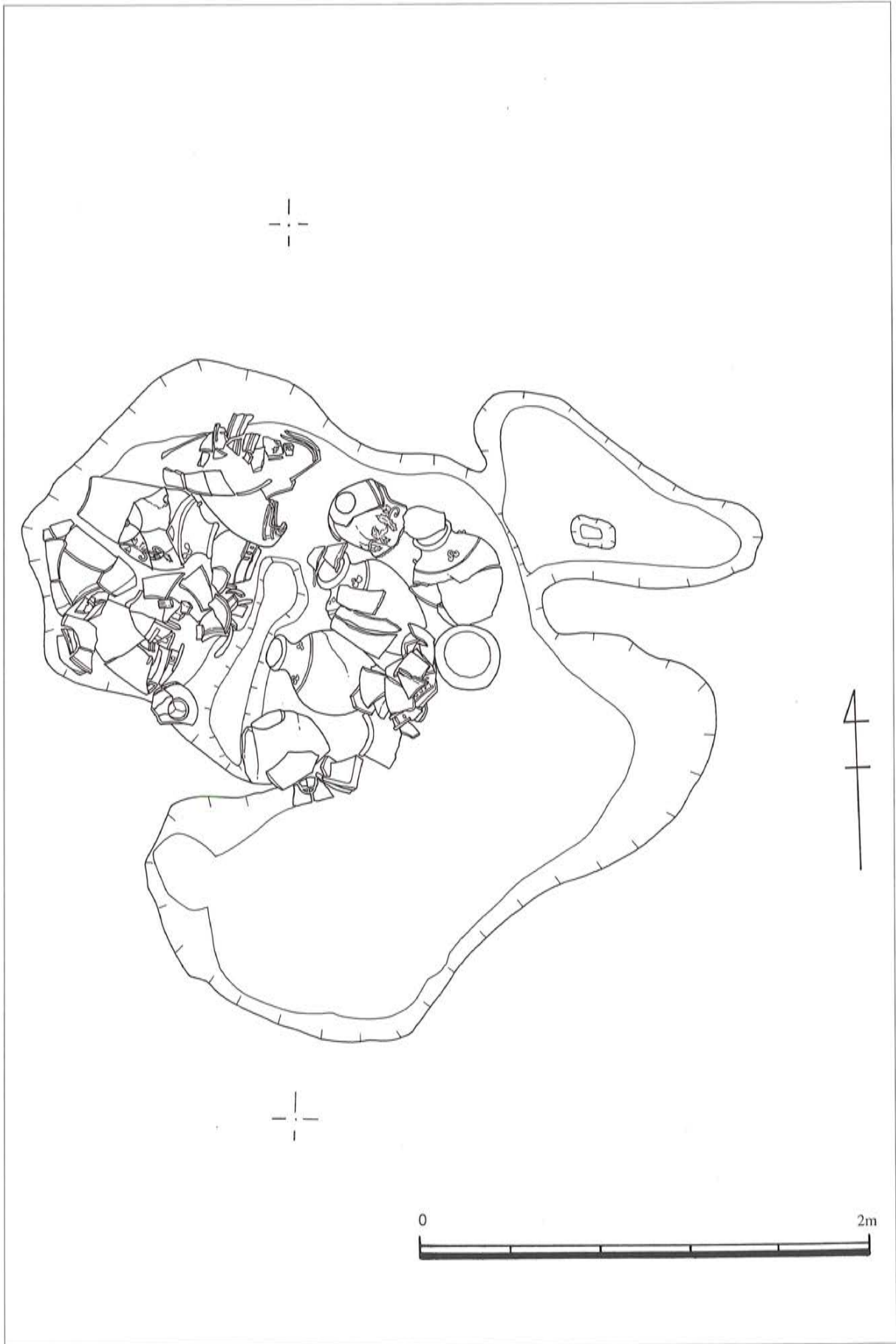
調査区北半を中心に夥しい数の柱穴群が検出されており、この中には根固めと考えられる石、瓦類の破片等が確認されたものもある一方で、上層からの掘り込みとみられるものもあり、時期の特定及びプランの検出は困難であった。



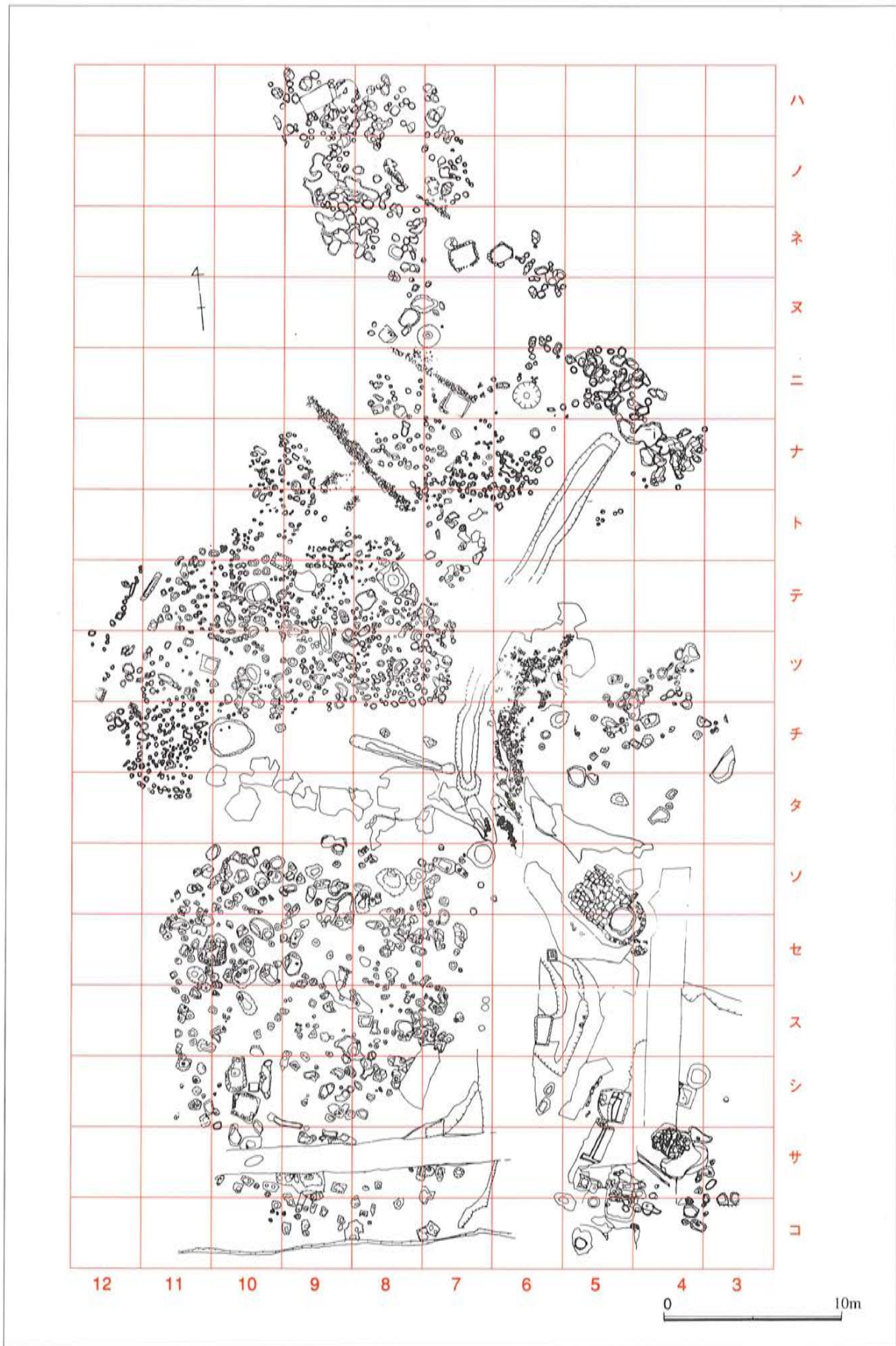
第5図 層序



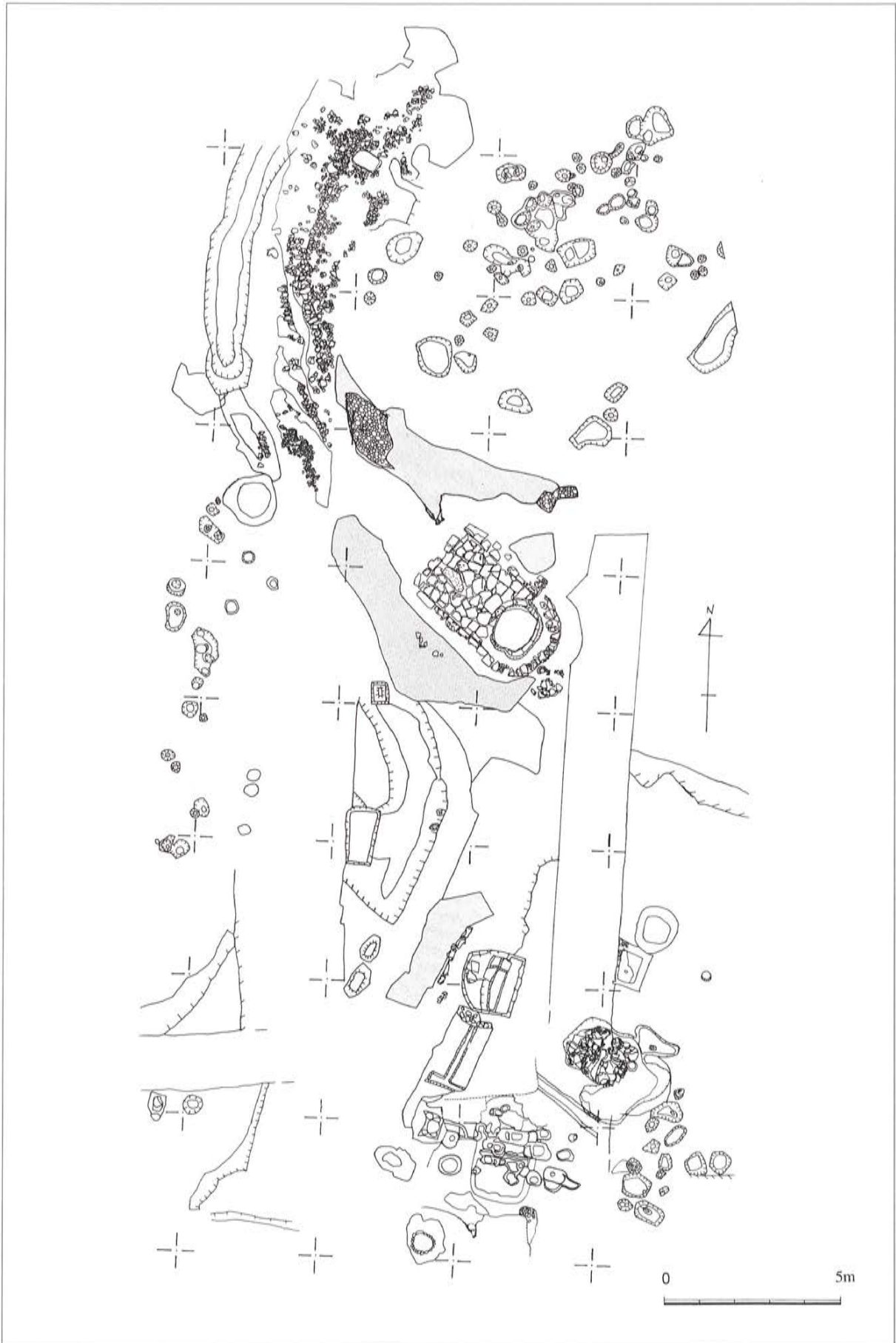
第6図 窯体（1号窯）



第7図 廃棄土壙



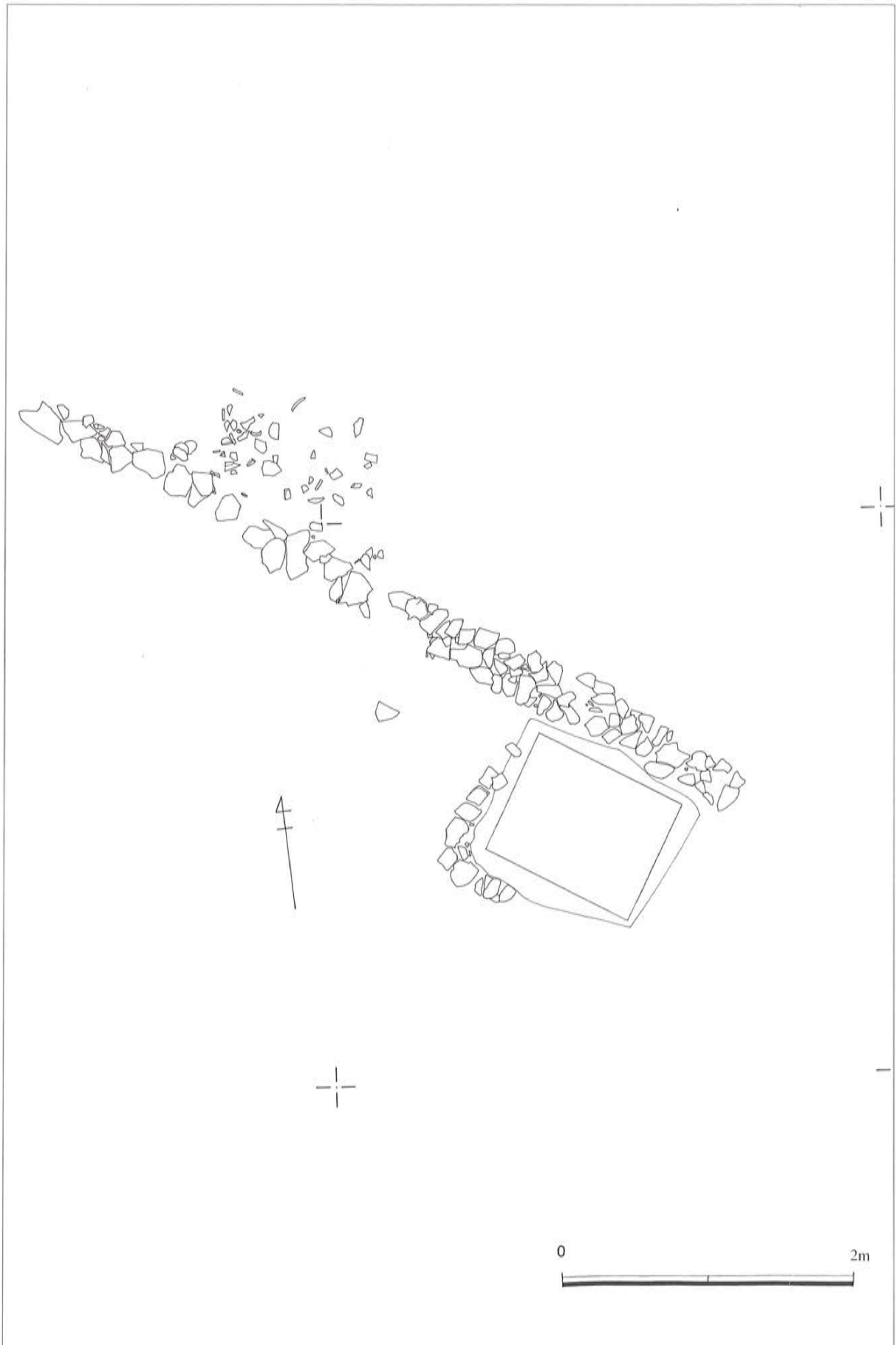
第8図 グリッド設定図及び遺構の配置状況



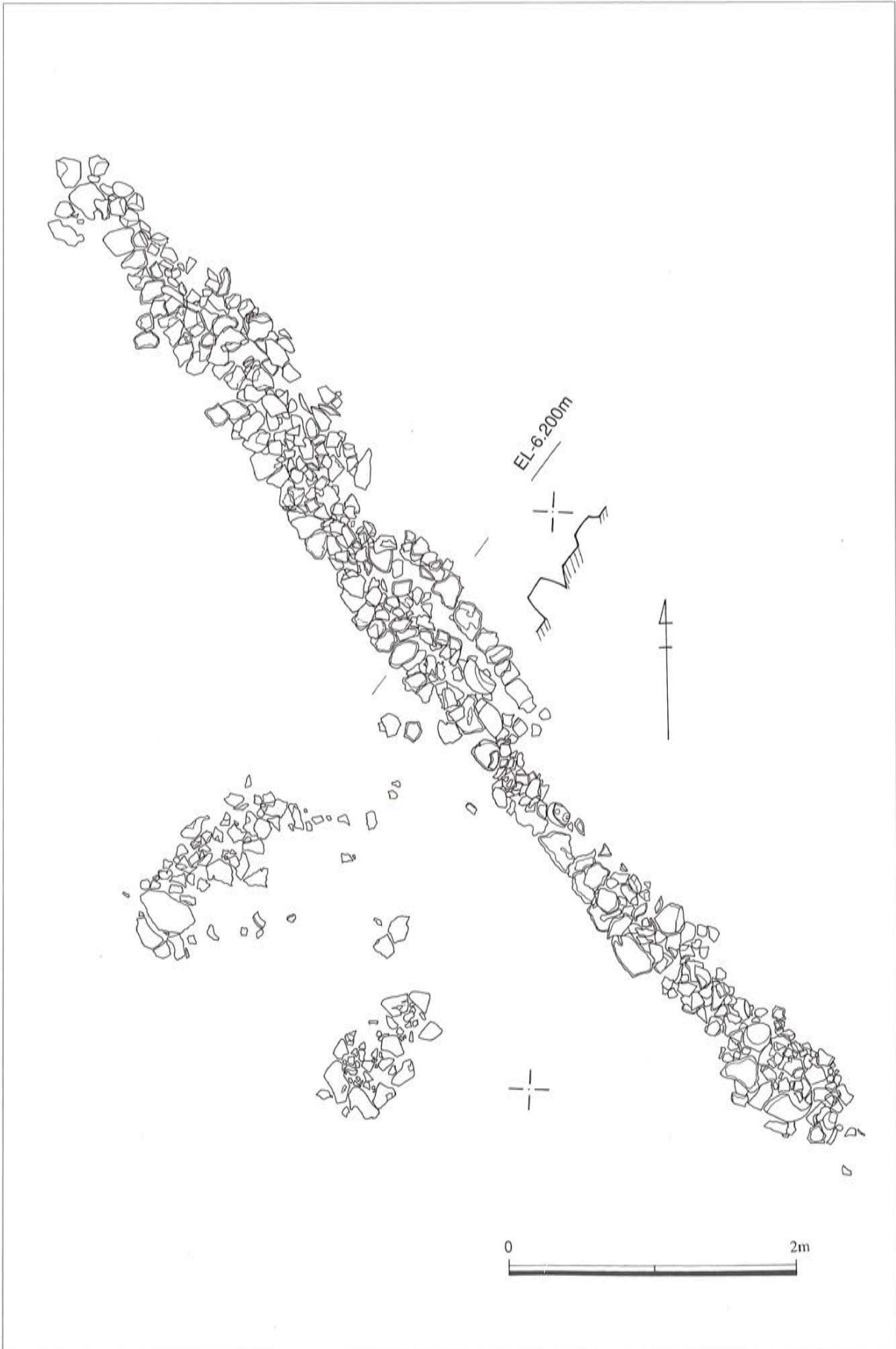
第9図 遺構配置状況



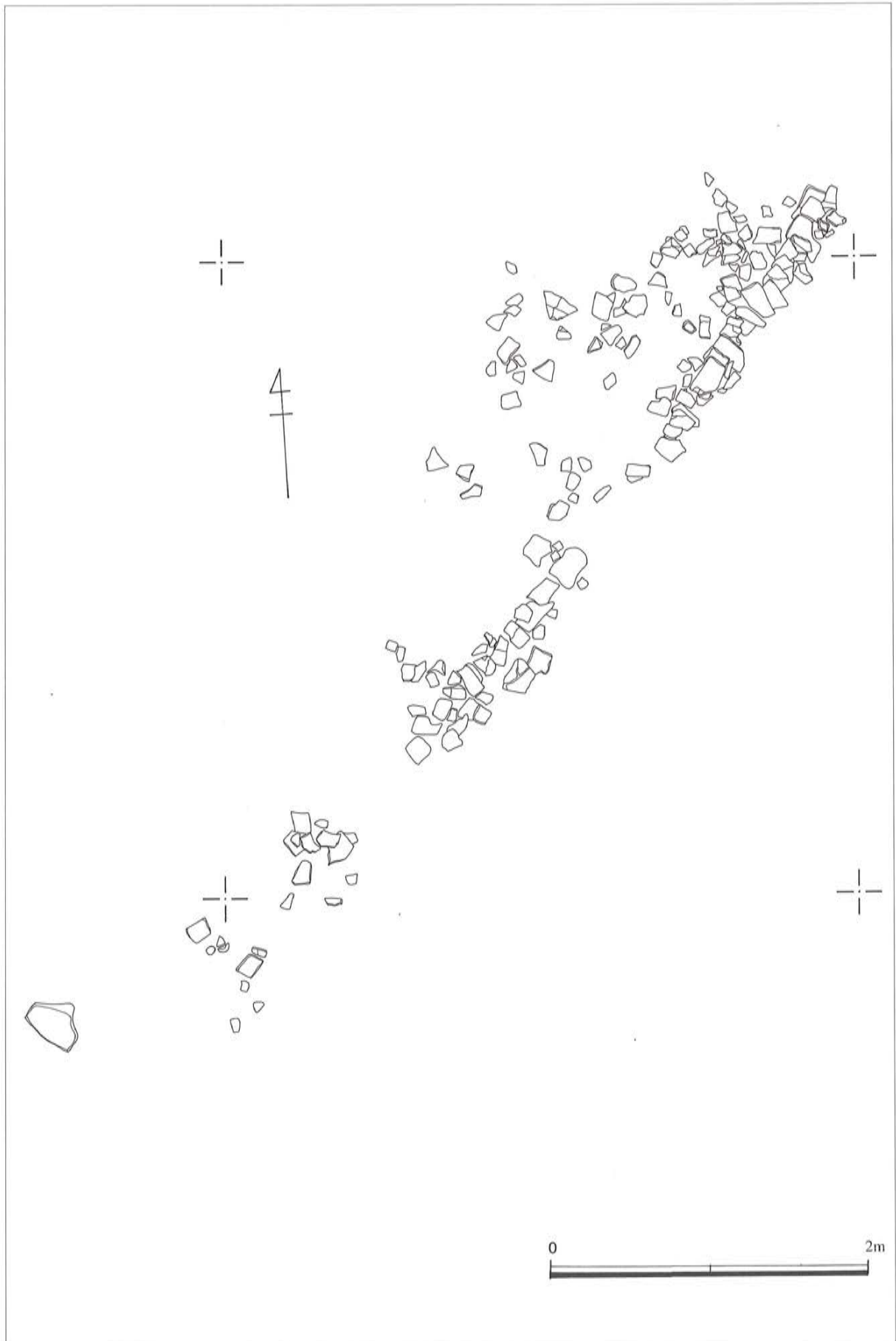
第10図 石敷遺構



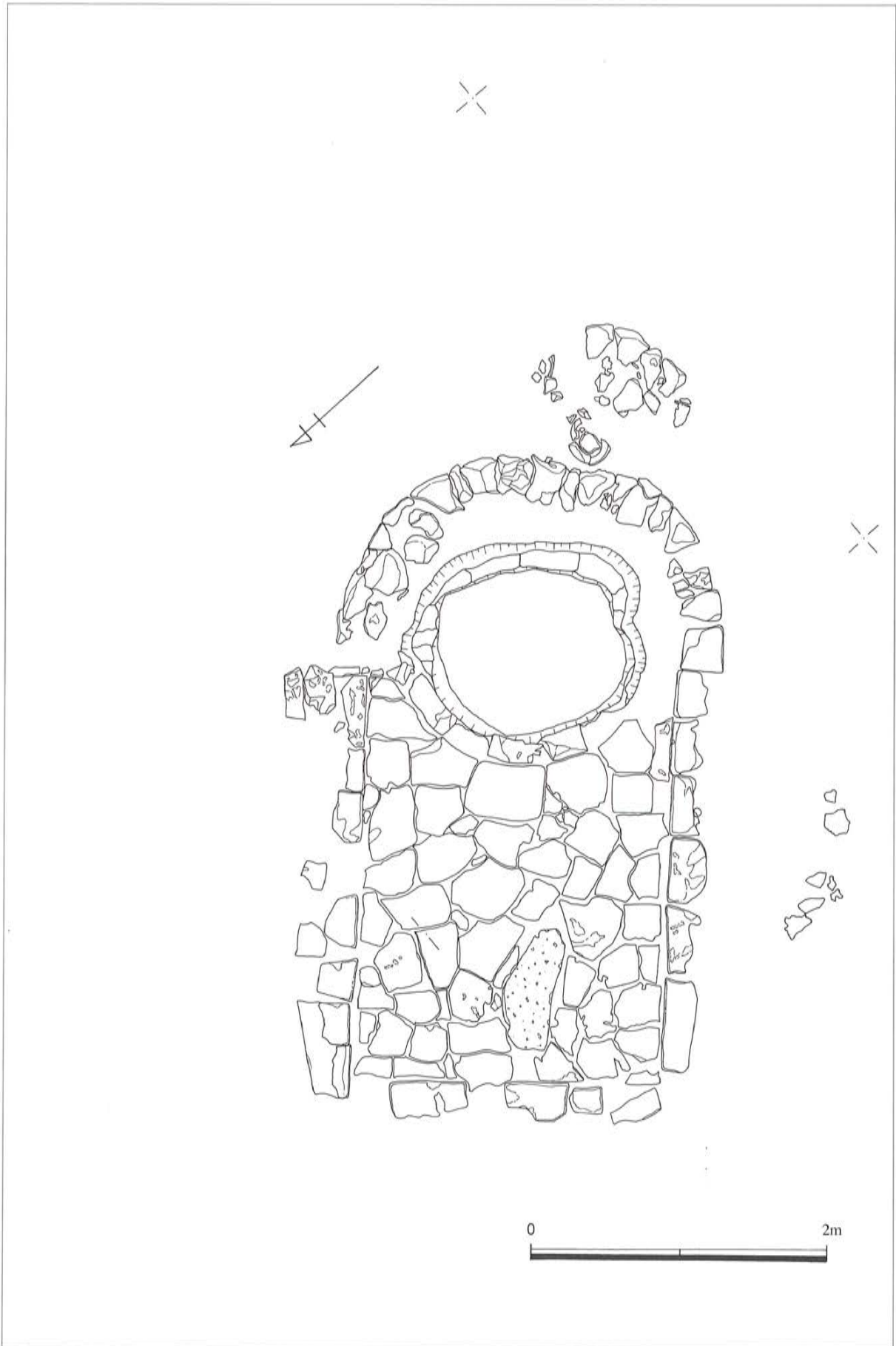
第11図 方形遺構



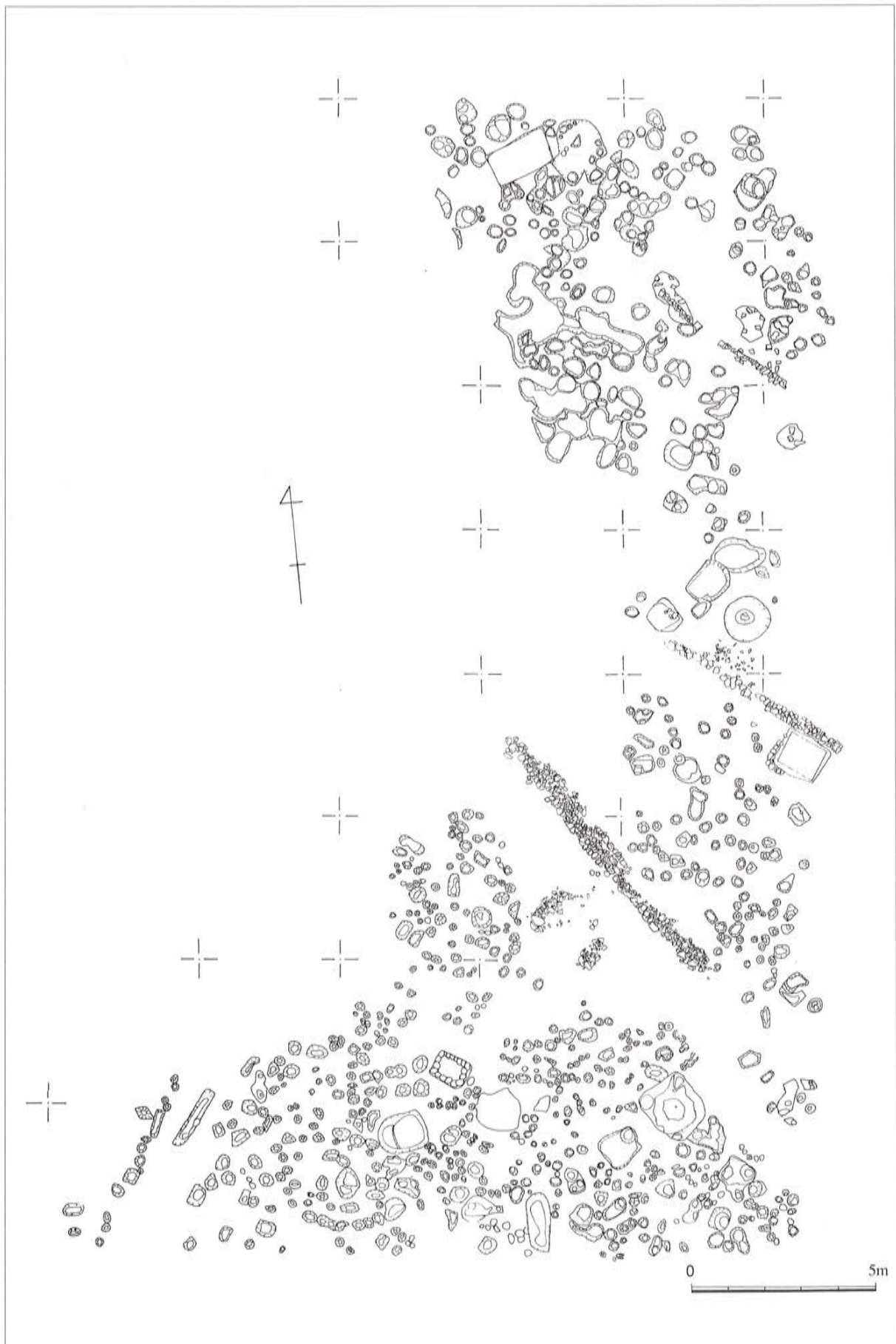
第12図 石列遺構



第13図 瓦列遺構



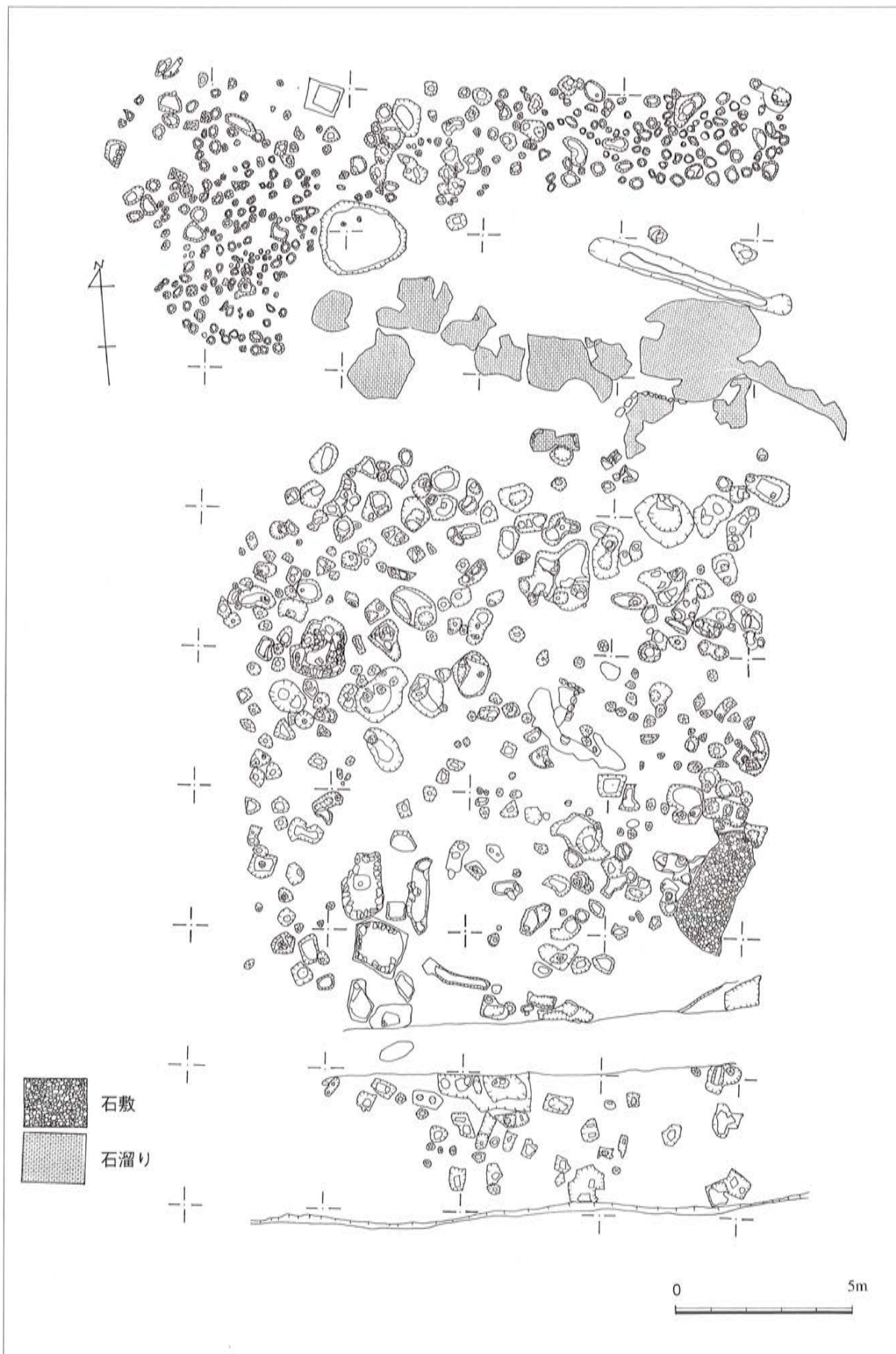
第14図 井戸遺構 (平面)



第15図 遺構配置状況



第16図 遺構配置状況



第17図 遺構配置状況

第V章 結 語

湧田古窯跡については、行政棟、議会棟、警察棟建設地区において実施してきた3度の発掘調査の成果により、その全容を把握することができたと考える。特に行政棟地区の調査においては予想だにしなかった県内初の円形状の平窯構造の単窯が出土し登り窯とは違った窯として構造的にも、あるいはそのルーツや生産した対象物等について、新しい資料を呈示するとともに近世沖縄窯業技術の問題点を提示した。登り窯が沖縄の一般的な窯構造として捉えていたものが、従来の見解とは異なった窯構造が発掘されたことにより、複数形式の窯業形態が存在していたことを示すものであった。近世沖縄窯業技術の解明に考古学的見地から一石を投じることとなった。また、湧田古窯跡全体の中では生産する対象物によって地区が分かれていたこと、その製造が瓦、磚を生産した瓦窯、甕、壺を焼いた荒焼窯、さらには湧田焼と呼ばれる碗、皿等を焼いた上焼窯を生産した場所が存在していたことが確認され、それぞれが専門化した窯場が存在していたことが分かった。

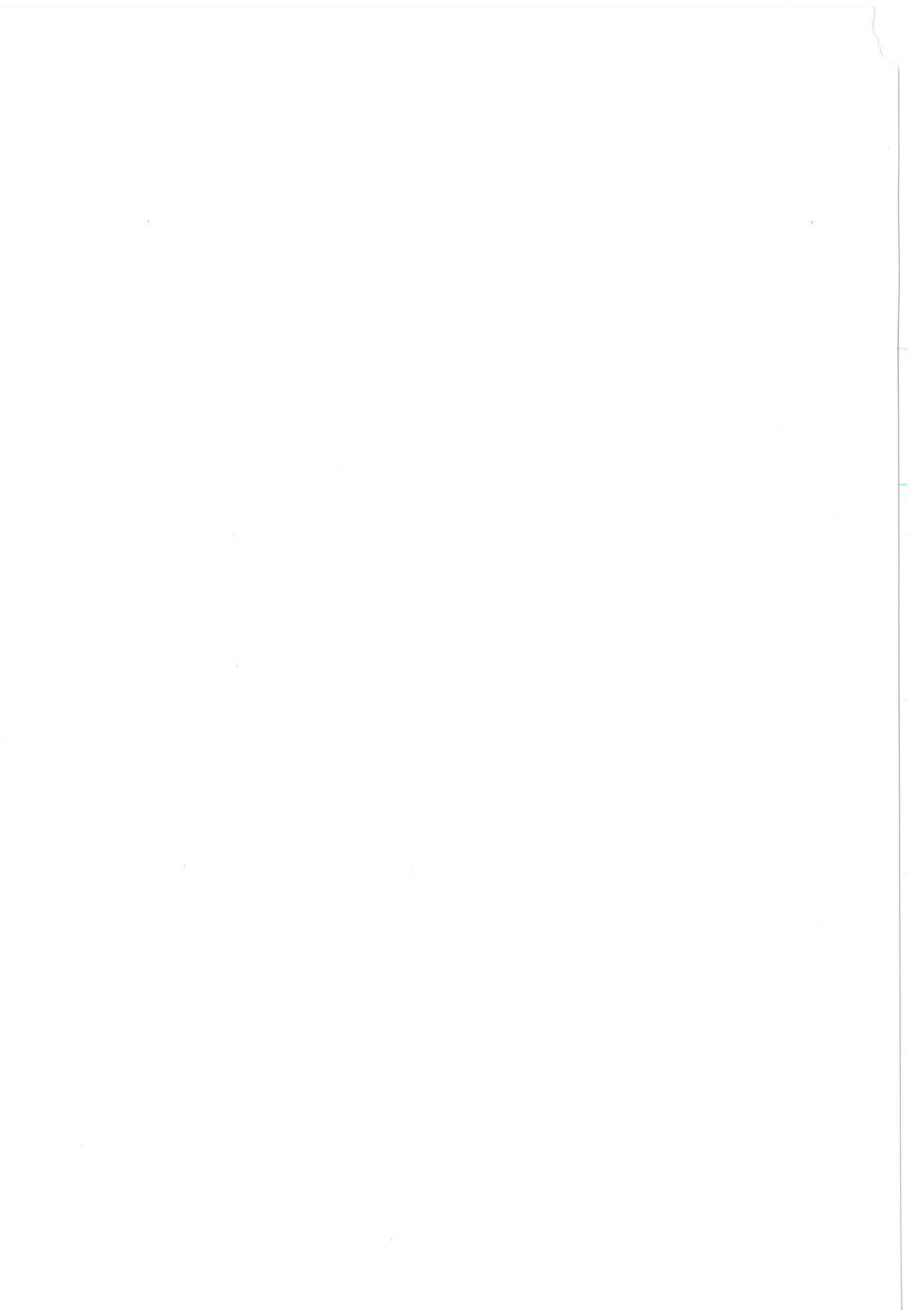
今回の警察棟地区については、荒焼きを中心とした生産の場であった可能性があり、出土遺物とともに窯跡が検出されるなどそれを示す膨大な資料の出土に恵まれた。遺構については昭和期から湧田期、さらにはその下層に一時期古い遺構が検出され、複雑に重複して残存している状況が見られた。中でも湧田期の窯として判断したものが3基検出されたが、いずれも地山面に下部の炉床部分と思われる焼土面の広がりが残っている状況で炉床からの立ち上りの壁面や上場の構造については破壊されており、全体の構造が確認できなかった。しかしながら出土した遺物を見てみると窯道具の一つであるトチンが数多く出土しており、窯のなかの製品を焼成する際の支持台として使われるものであることから、本地区において焼き物の生産が行われていたと考えられる。さらに、同地区内の中央部からは荒焼きの甕に入った陶土も出土しており、原料を貯蔵した可能性がある。荒焼か上焼用の陶土として用いられたものとして判断される。

また、本調査区からは5基の円形石組みの井戸が検出されたが、その内一基については円形の井戸回りに小振りの石で二重に取りまき、さらに帯状に石敷きの流し場を取り付けた井戸が検出された。残念ながら井戸内は深く土が投げ入れられており井戸内が狭く掘り下げが困難であったことから、下部の構造まで把握することは出来なかった。湧田期に利用された井戸の一つとして解された。さらに湧田期の下層においては、地山面を掘り込んだ小ピット群が検出され湧田の時期より一時期古い時期の遺構として捉えられた。ピット群からの建物全体のプランは確認出来なかった。

また、遺物においてはこれまでの行政棟、議会棟をはるかに越える膨大な量が出土したことから、窯業の生産地として、あるいは湧田村の様相を知る手がかりが掴めたと言える。主要なものでは瓦、湧田の上焼、荒焼、中国陶磁器、本土産陶磁器、窯道具、坩堝等があり、ある程度の時期の目安になった。中国陶磁器についてみると18世紀から19世紀頃までが目立ち、湧田古窯の時期、警察棟地区の性格を考える貴重な資料を呈示したと言える。湧田焼と呼ばれる上焼、荒焼を対象にした窯については窯体部分が未だ明確ではないが、今後、湧田古窯跡と想定されている範囲の中において発掘されることが望まれるとともに、今後の資料の追加が必要である。

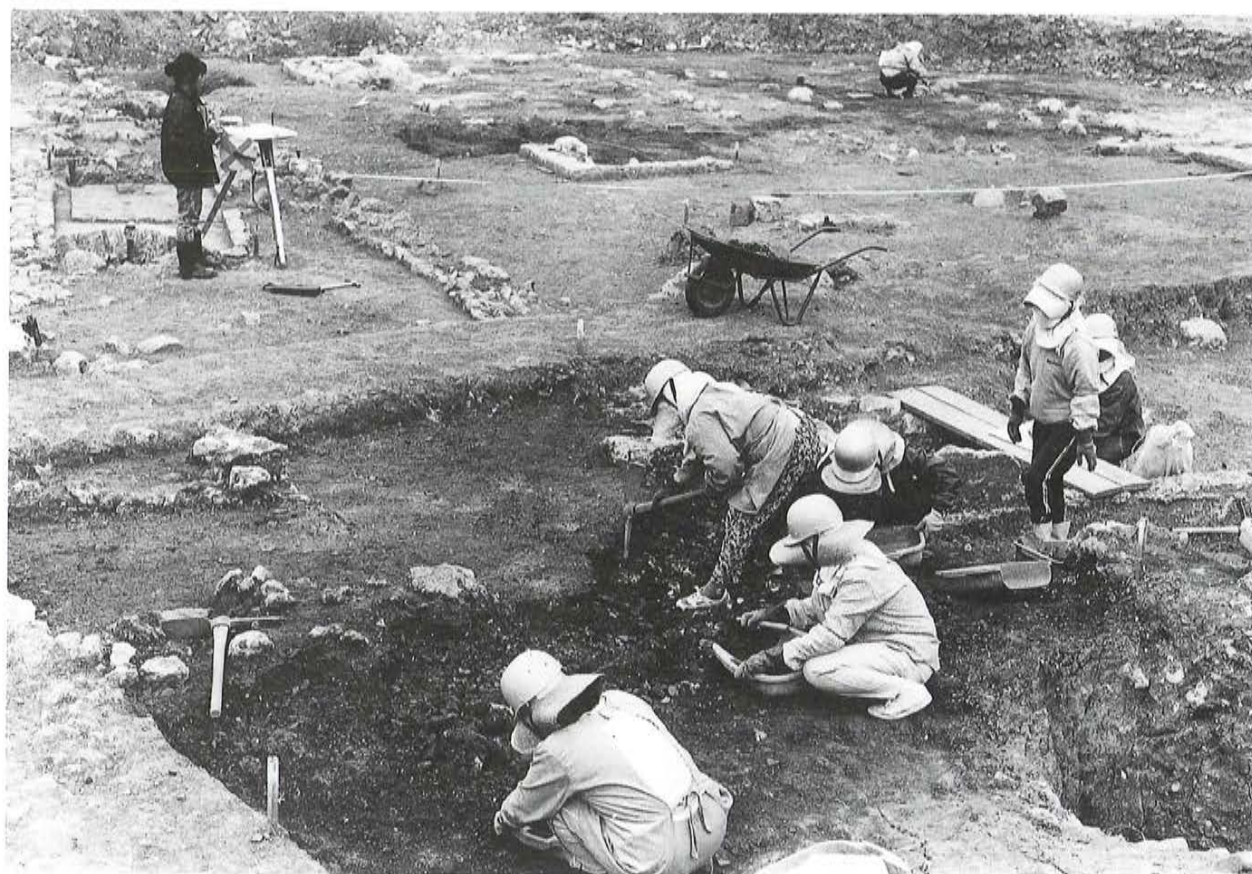
なお、末尾になりましたが、本地区から出土した遺物の全てについては、あまりの膨大な資料であったため、個々の遺物について詳細に記述しまとめ本報告書に掲載することが出来なかった。発掘調査を担当した者として記してお詫びを申しあげるとともに、本報告書が精細を欠いたものとして研究者並びに関係各位から御叱声を受けるものと深く反省するものです。本編とは別に遺物編としてまとめあげ報告する予定にしている。

图 版

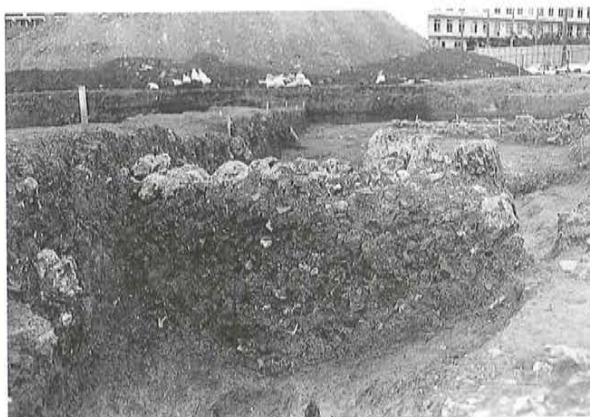




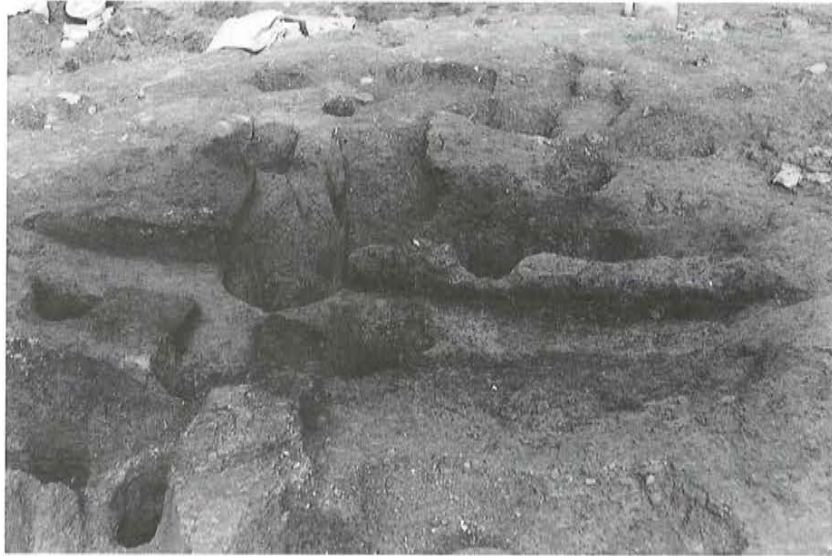
第1図版 発掘作業風景



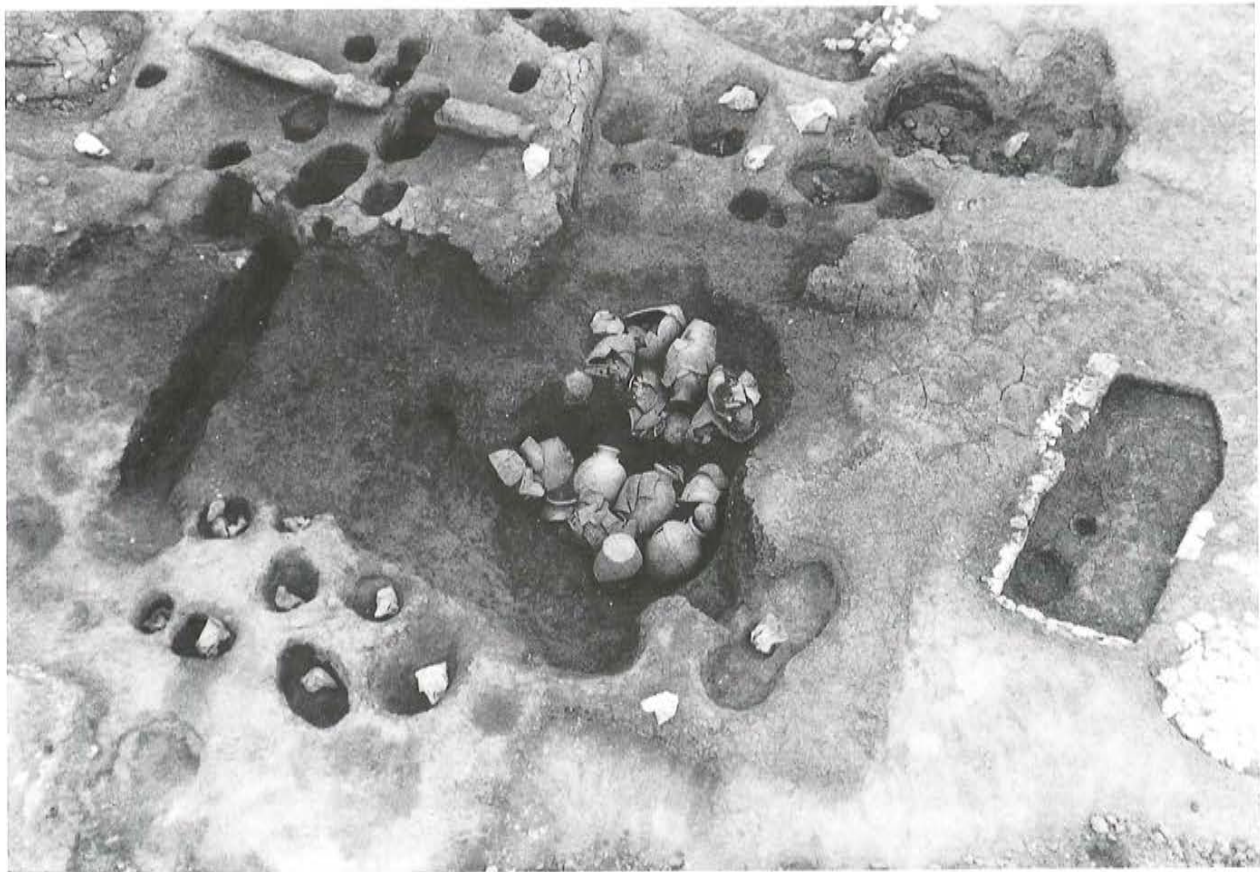
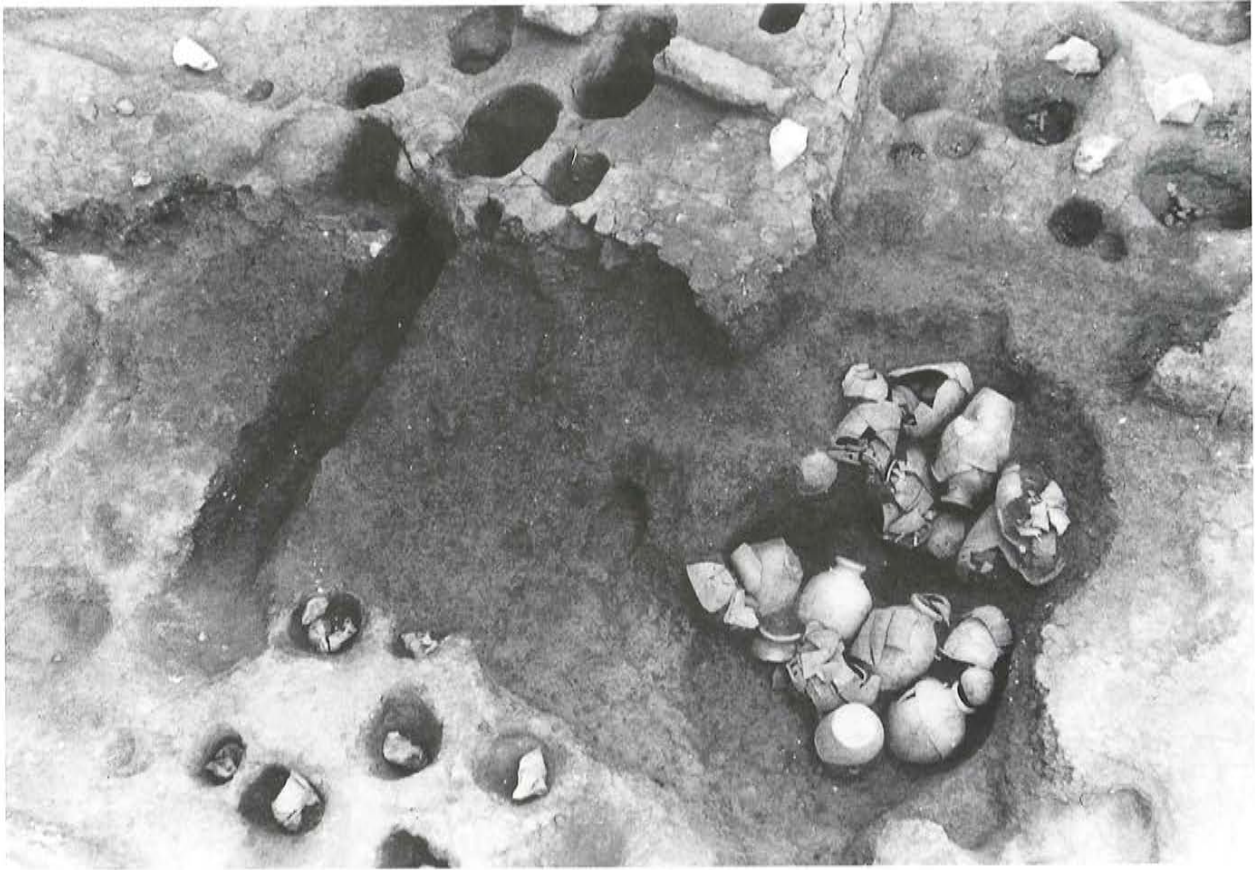
第2図版 平板測量作業状況



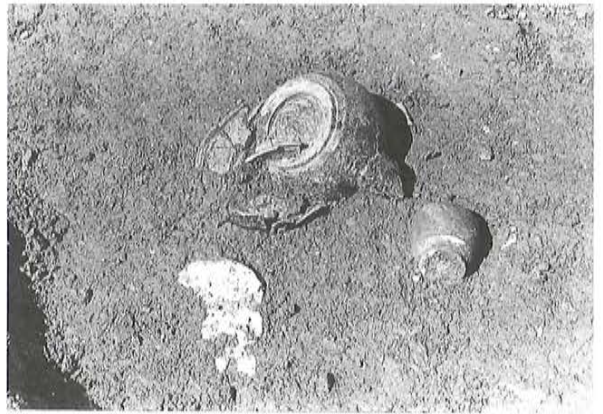
第3図版 遺物包含層の堆積状況



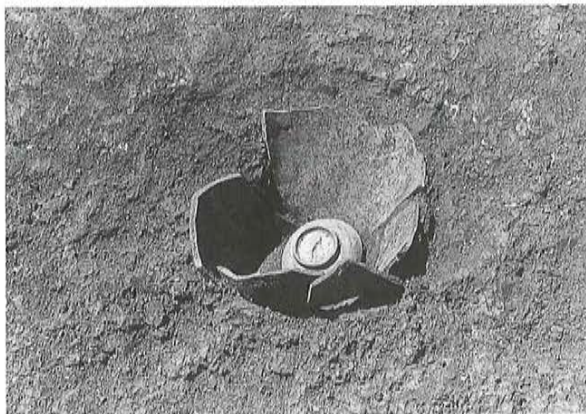
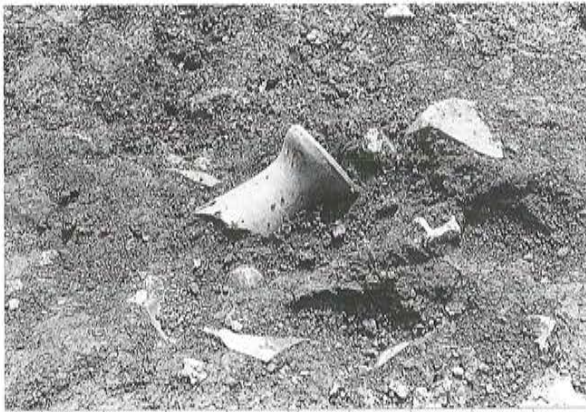
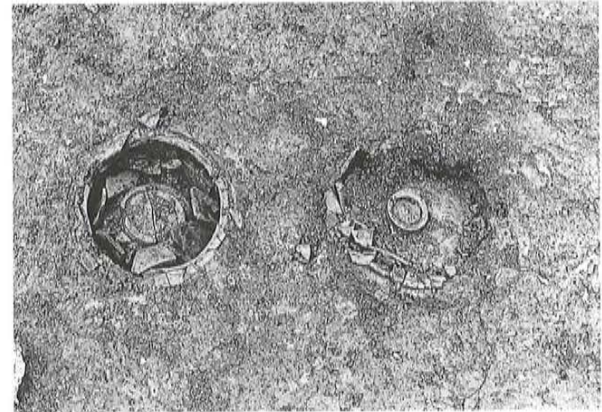
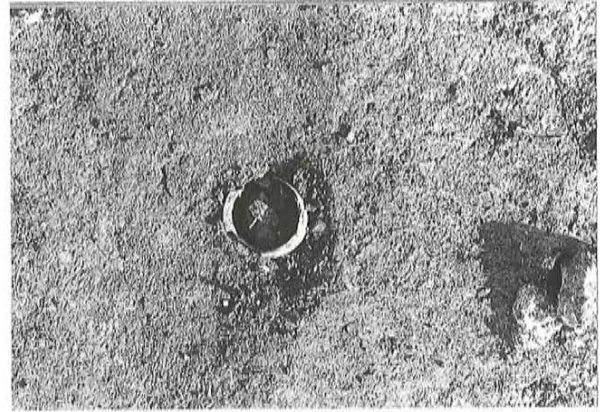
第4図版 1号窟検出状況



第5図版 廃棄土壙検出状況



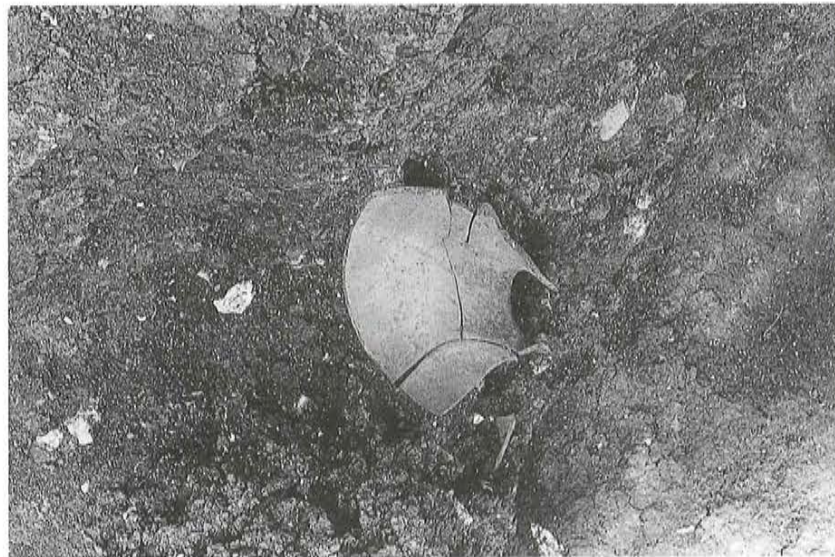
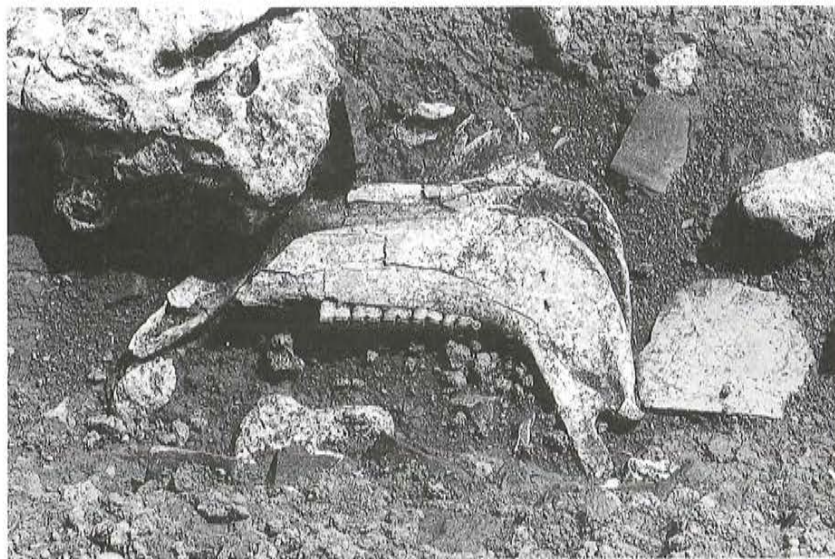
第 6 図版 遺物出土状況



第7図版 遺物出土状況



第 8 図版 遺物出土状況



第9図版 獣骨出土状況



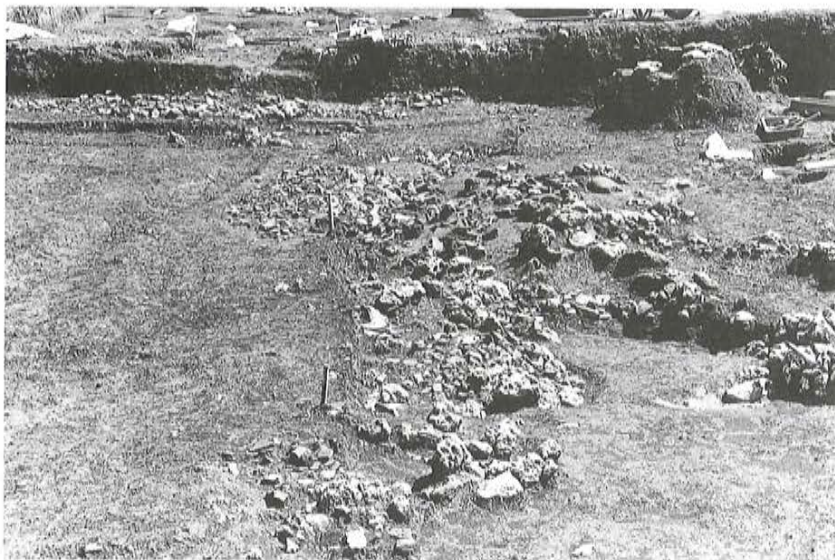
第10図版 遺物集中遺構検出状況



第11図版 遺物集中部検出状況



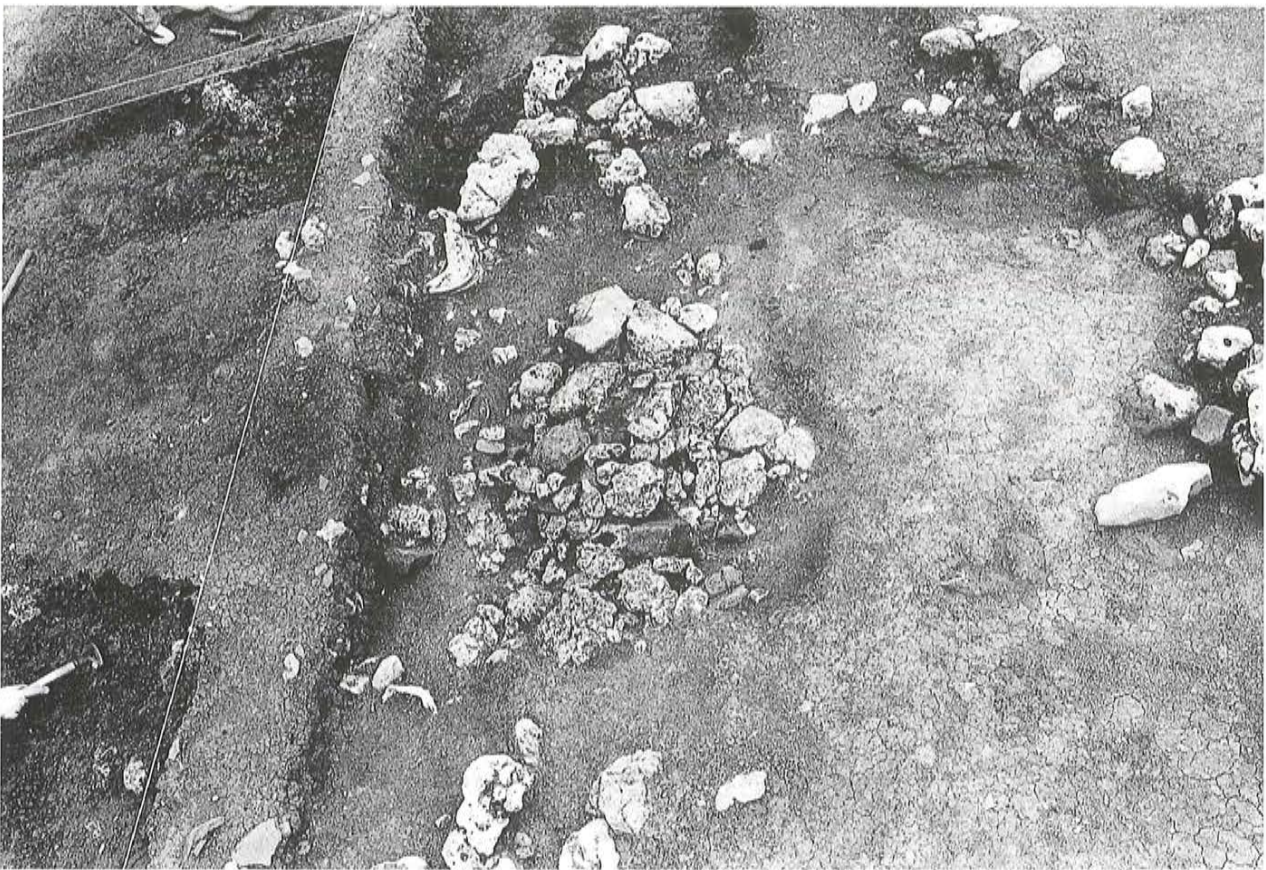
第12図版 土壙検出状況



第13図版 礫集中部検出状況



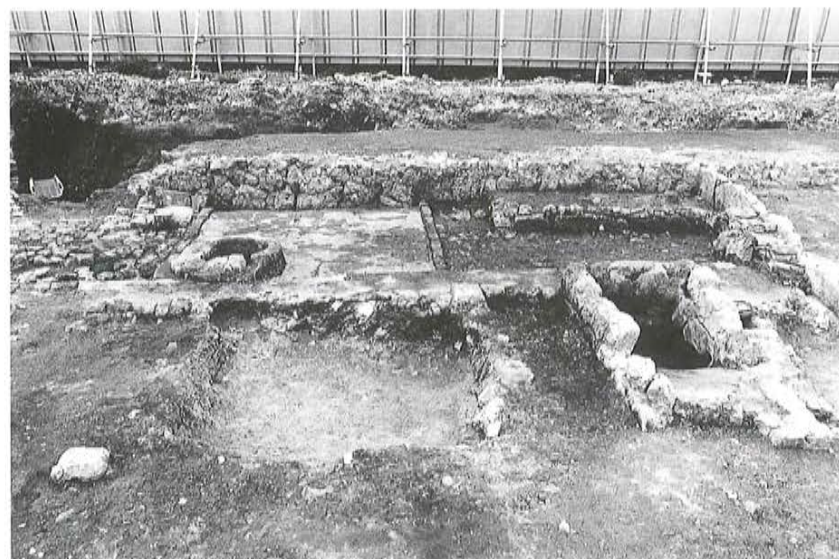
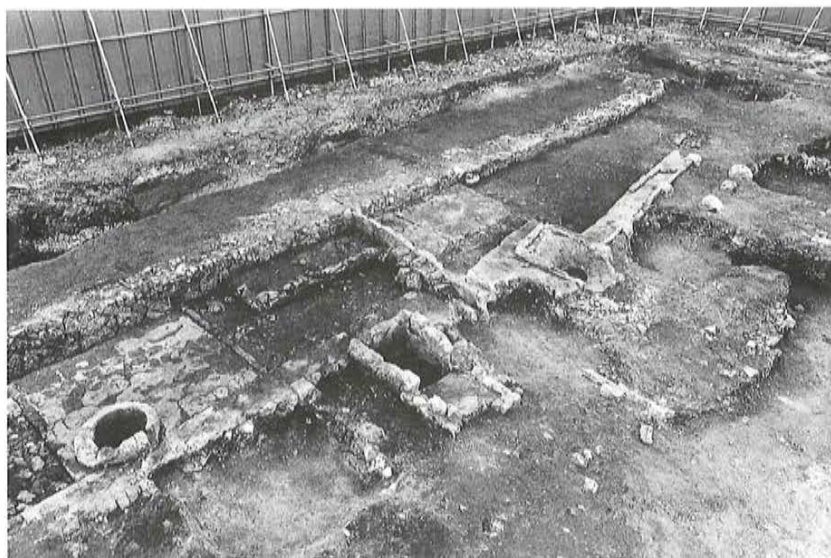
第14図版 礫集中部検出状況



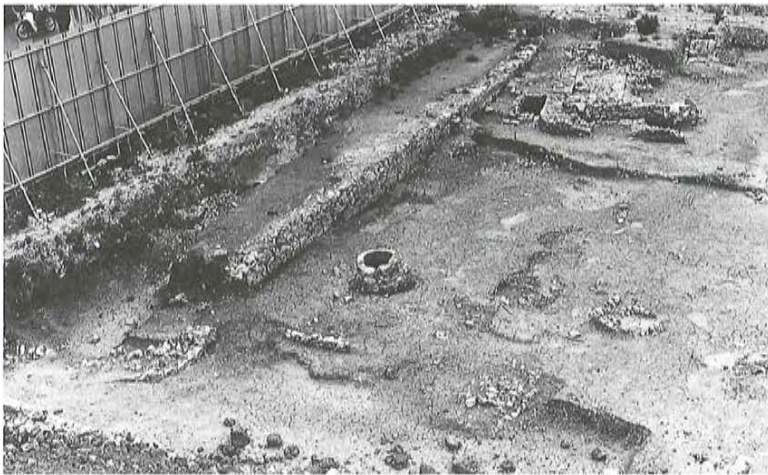
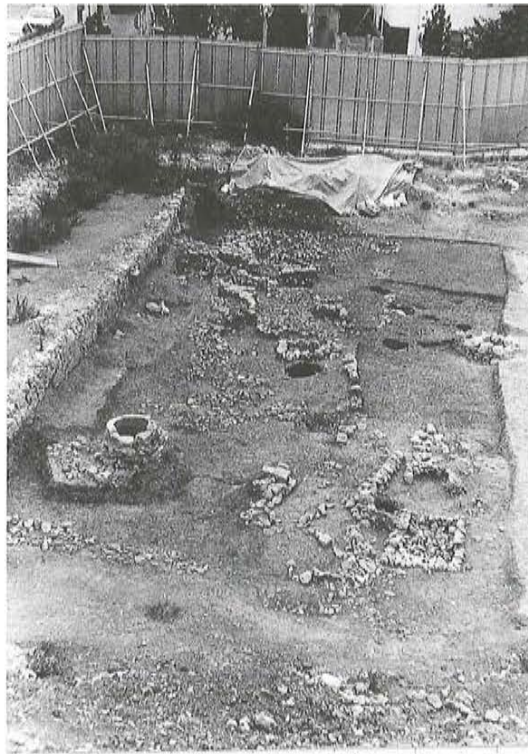
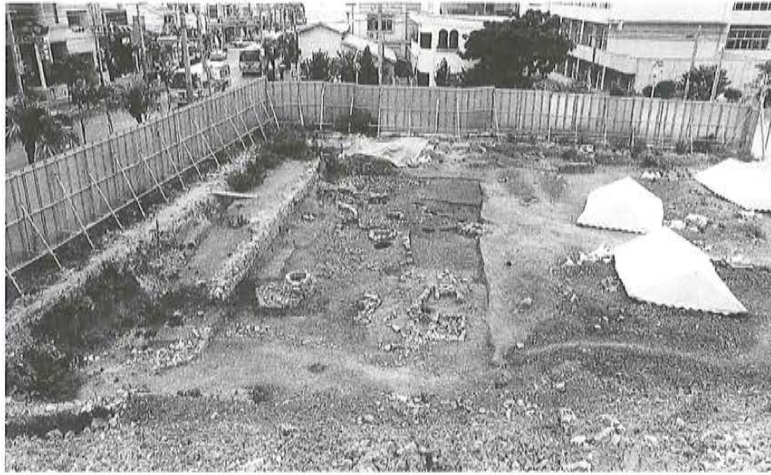
第15図版 石溜り検出状況



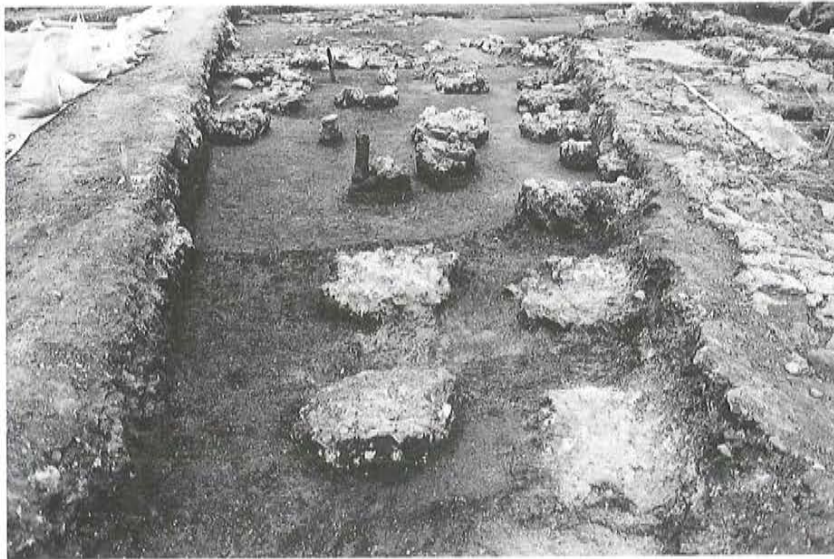
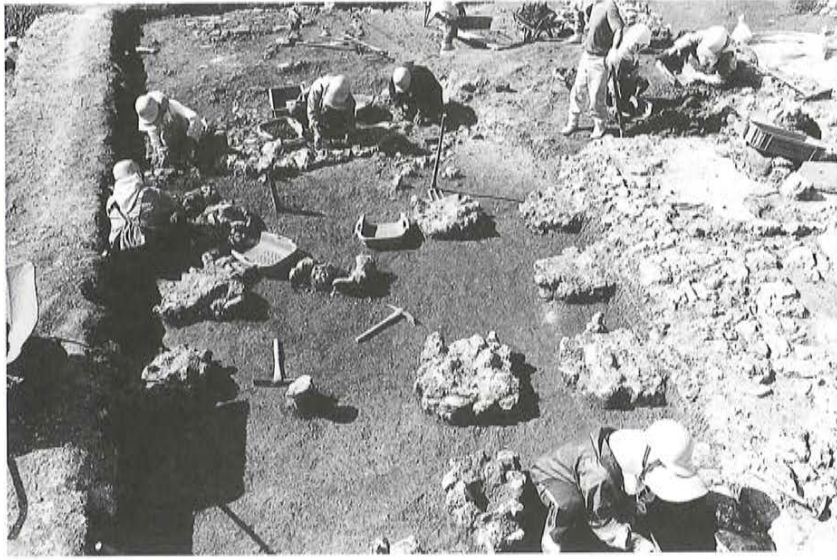
第16図版 建物遺構検出状況



第17図版 建物遺構検出状況



第18図版 建物遺構検出状況



第19図版 建物遺構基礎跡検出状況



第20図版 石積遺構検出状況



第21図版 井戸遺構検出状況



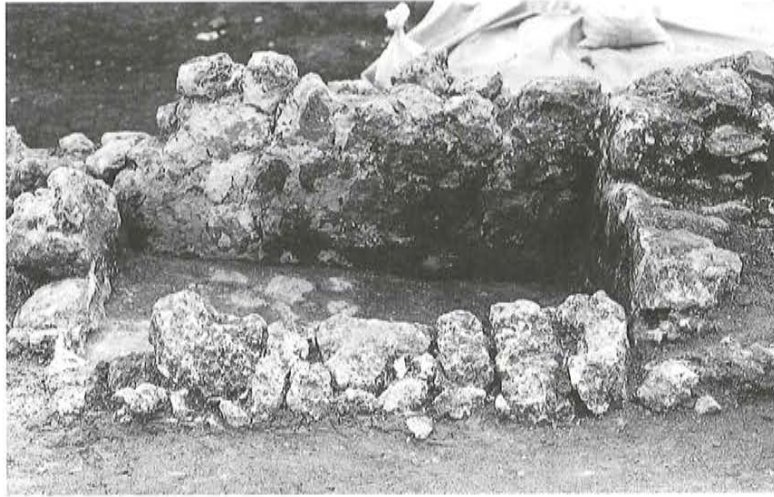
第22図版 井戸遺構検出状況



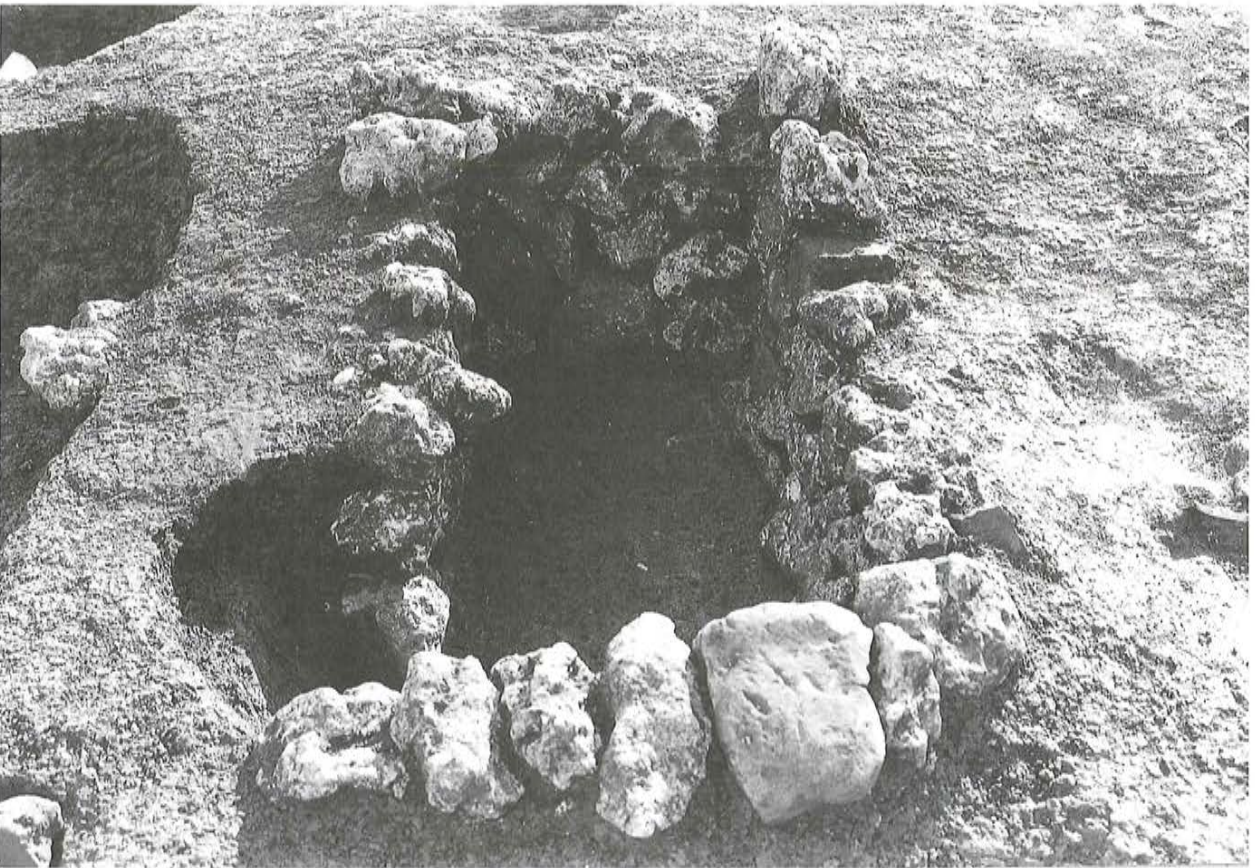
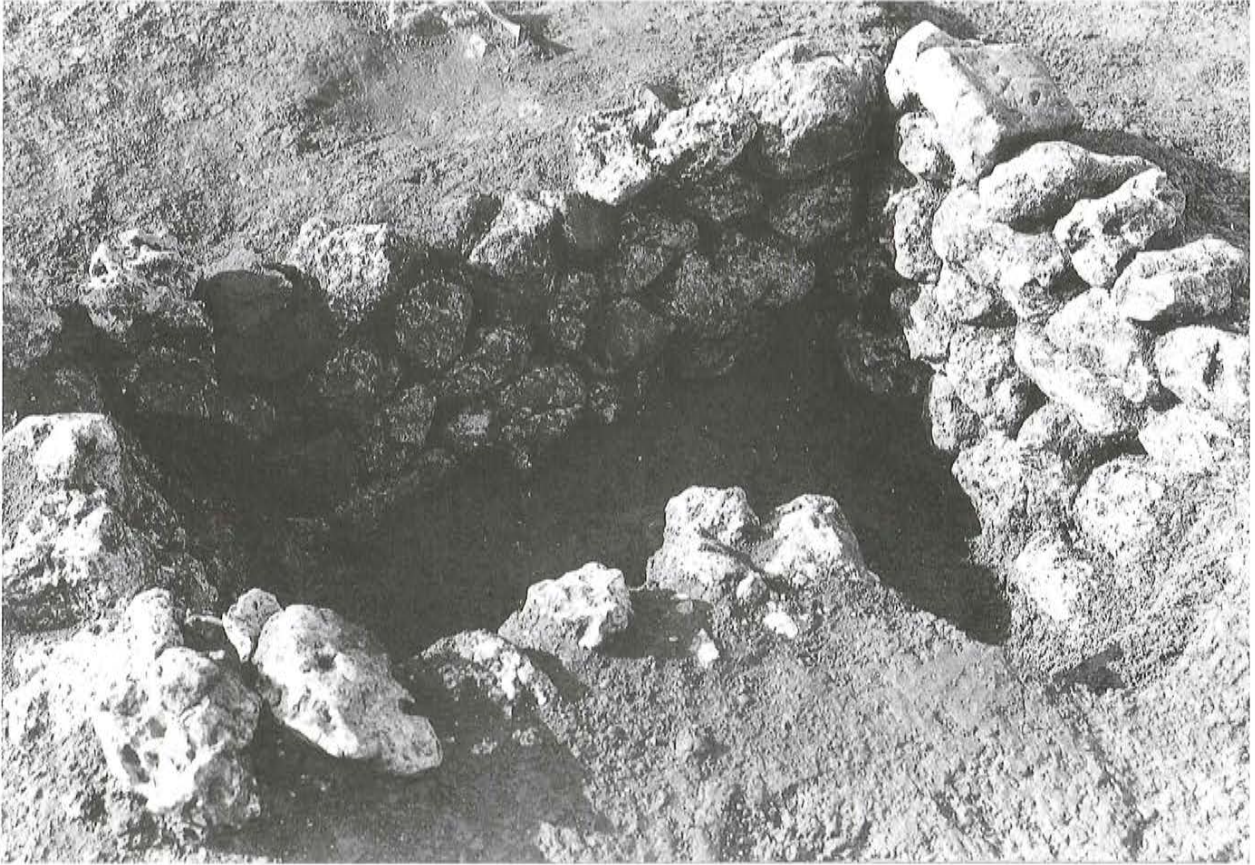
第23図版 井戸遺構検出状況



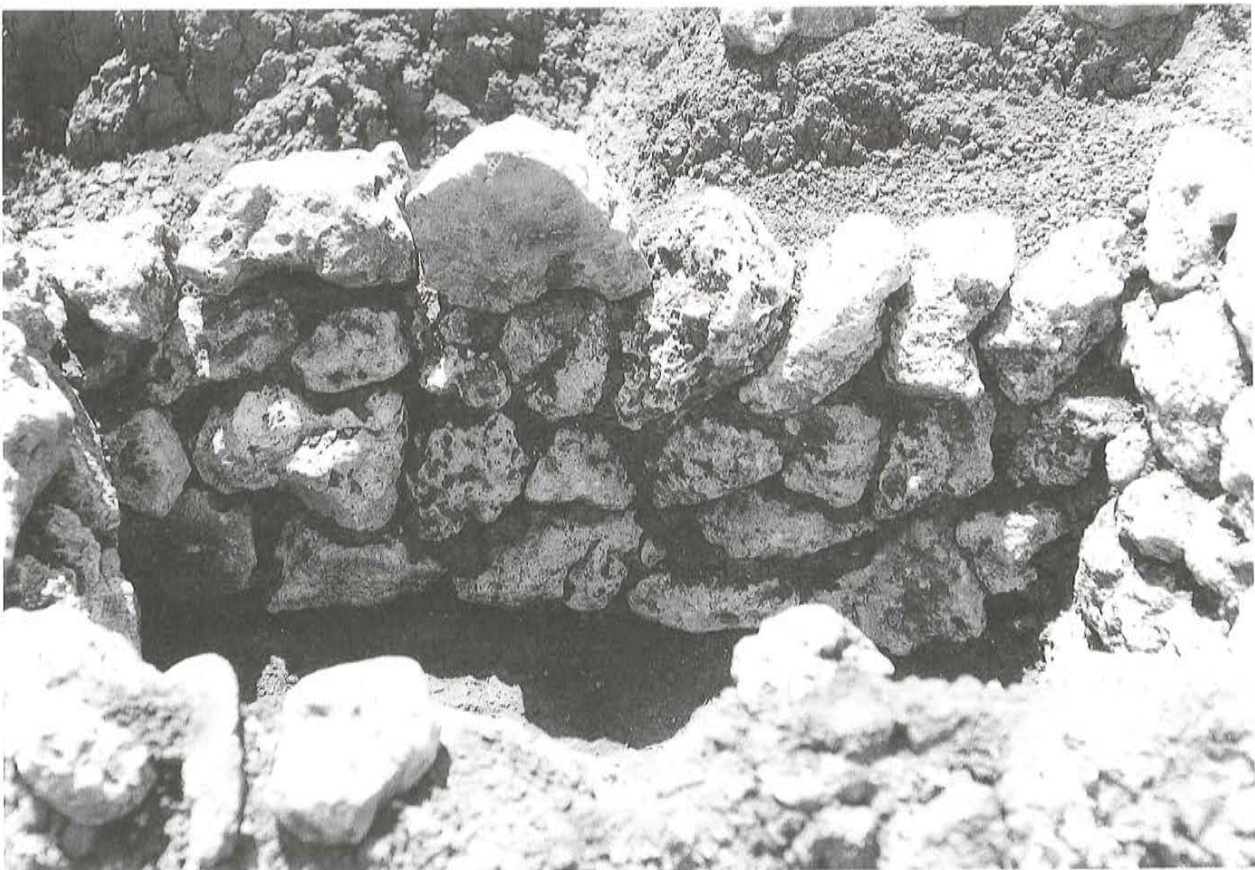
第24図版 井戸及び周辺の遺構検出状況



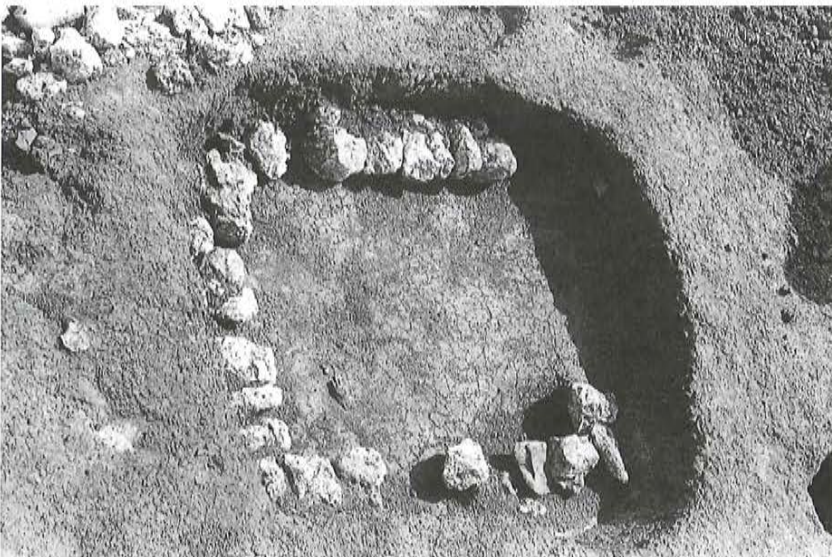
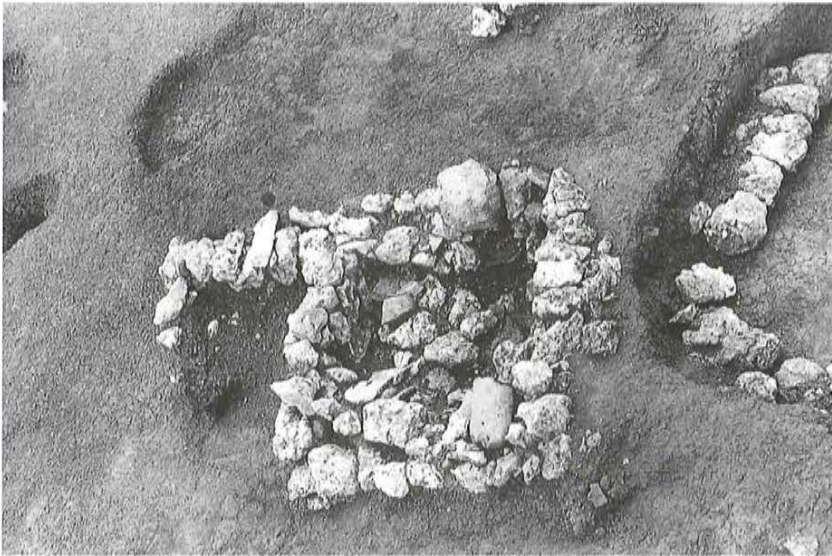
第25図版 方形状遺構検出状況



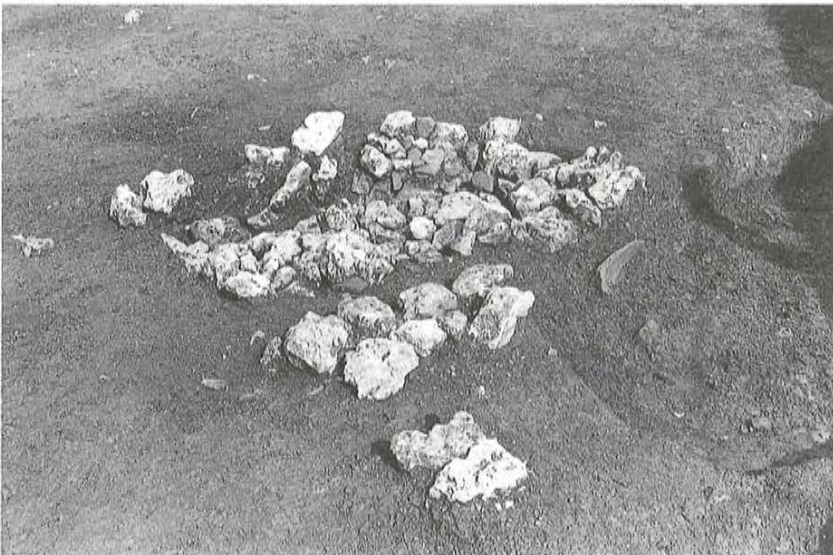
第26図版 方形状遺構検出状況



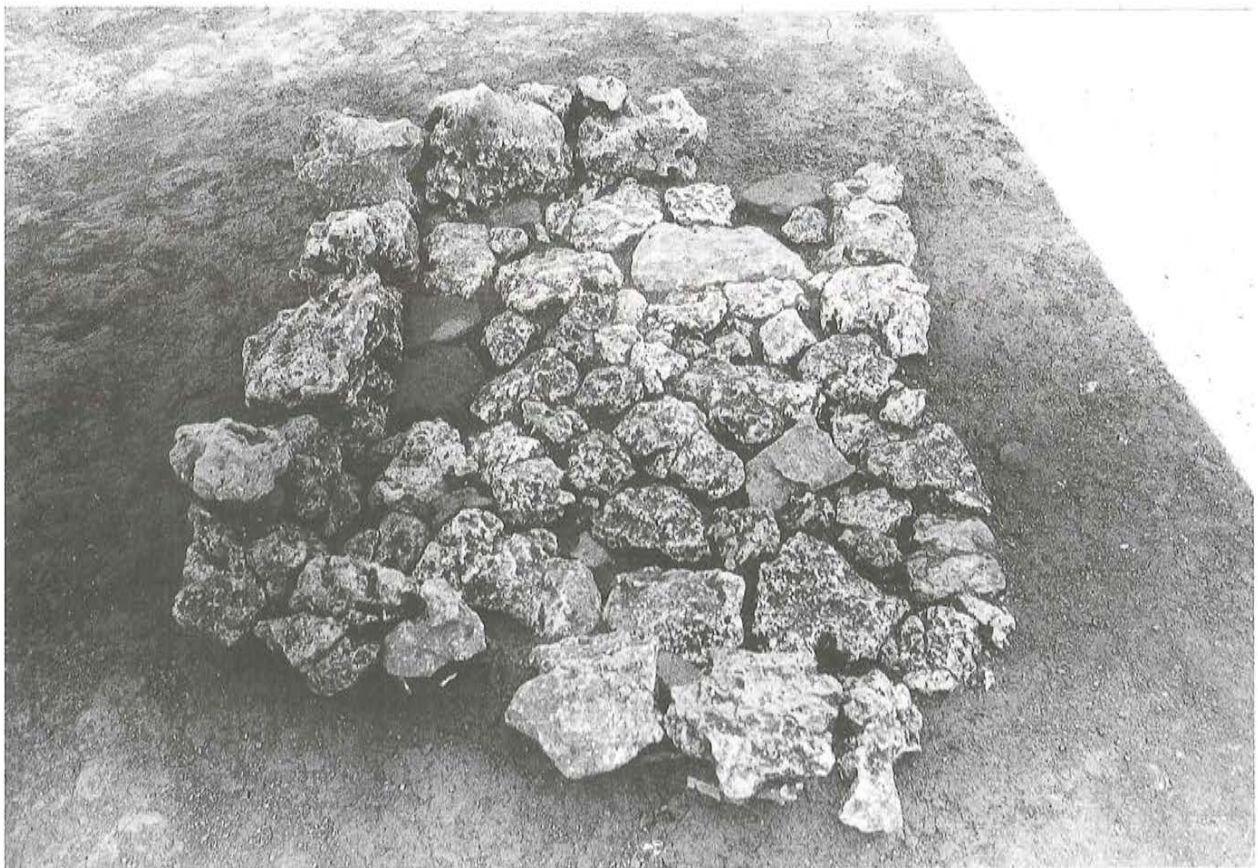
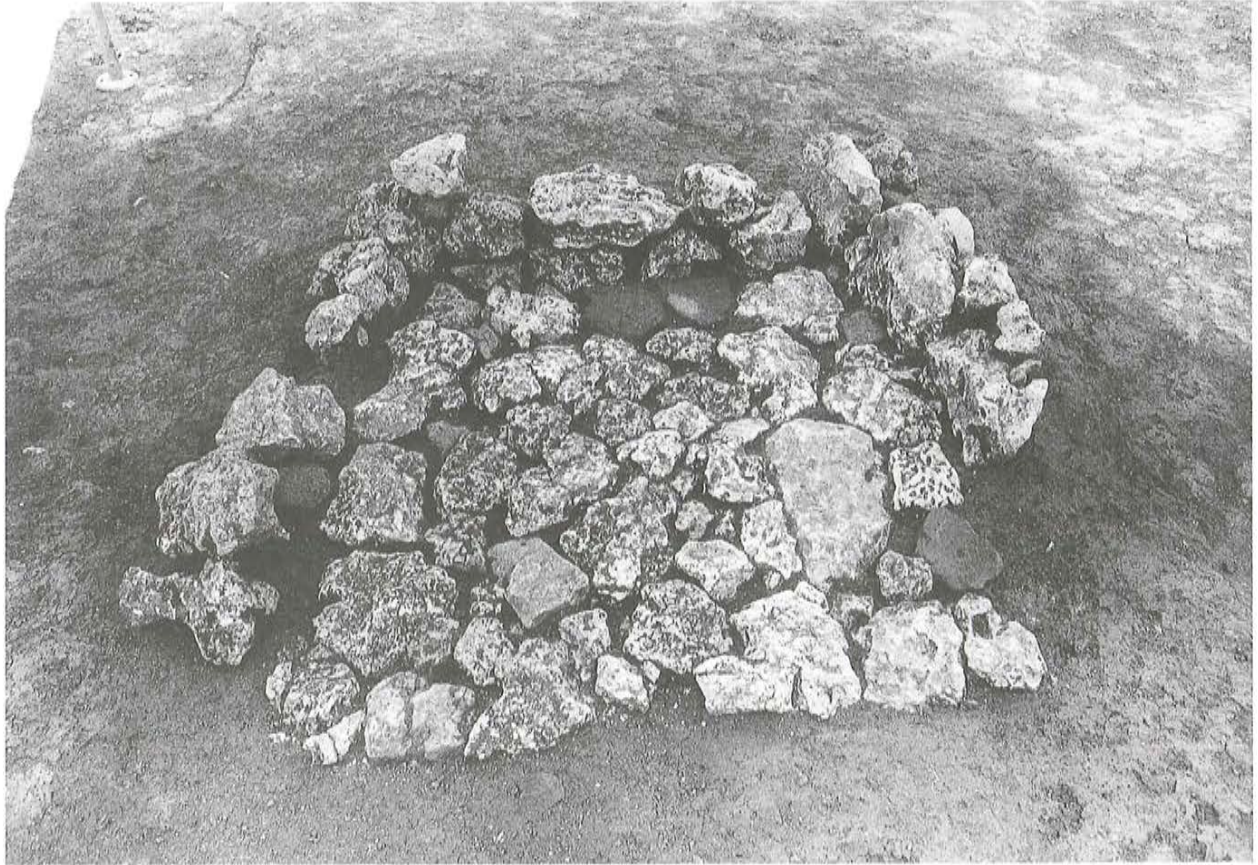
第27図版 方形状遺構検出状況



第28図版 方形状遺構検出状況



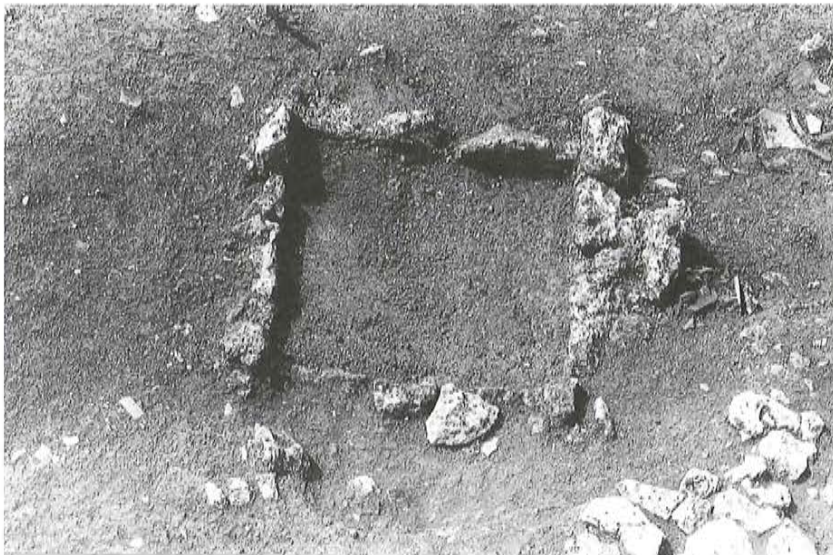
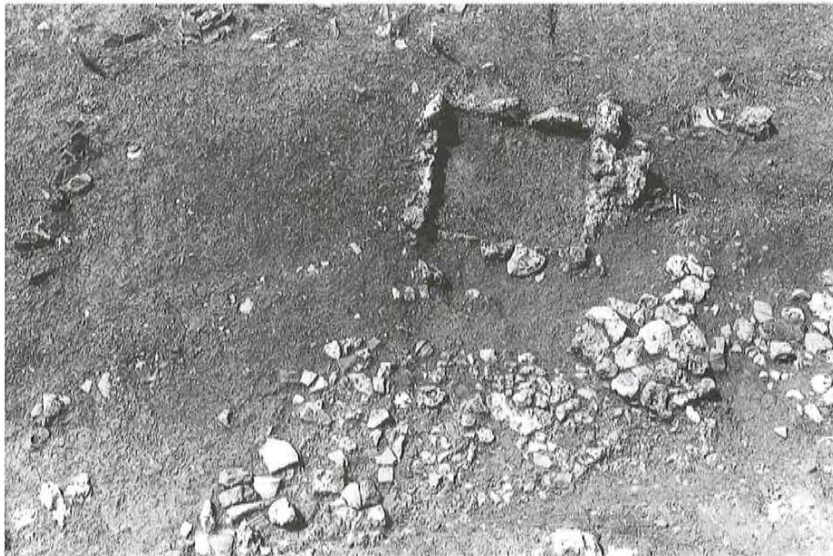
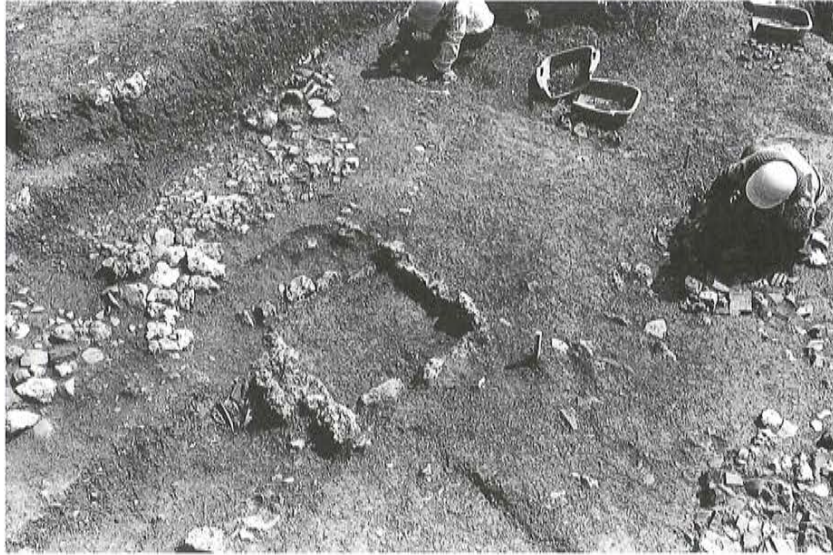
第29図版 方形状遺構検出状況



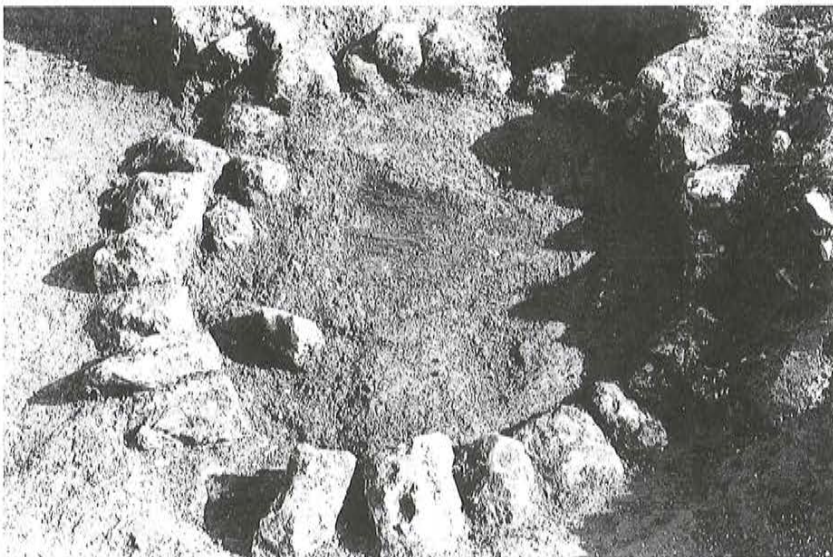
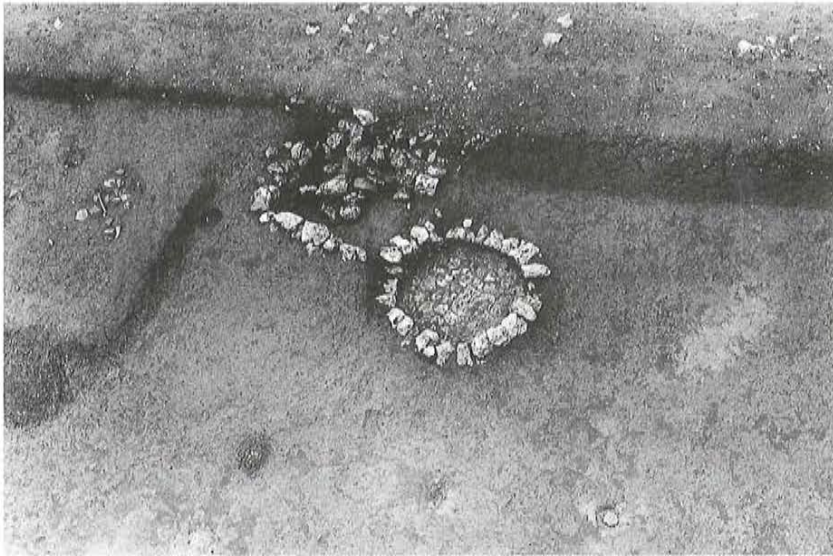
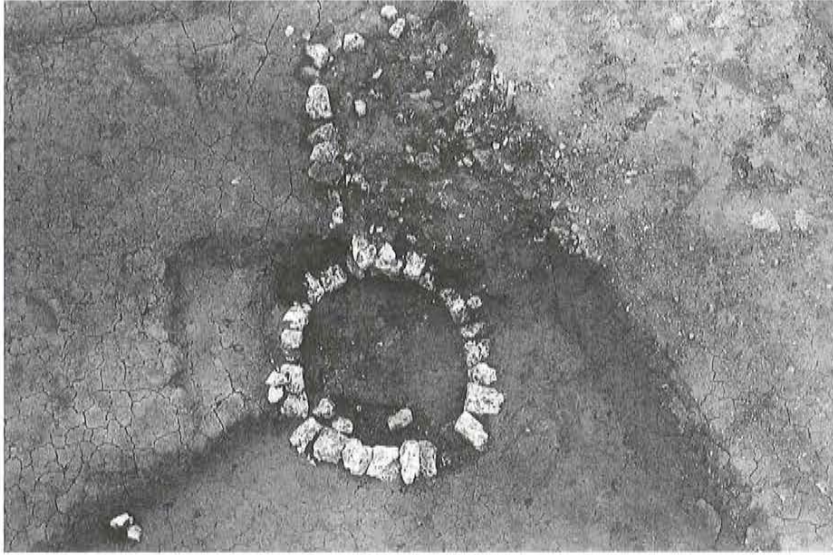
第30図版 方形状遺構検出状況



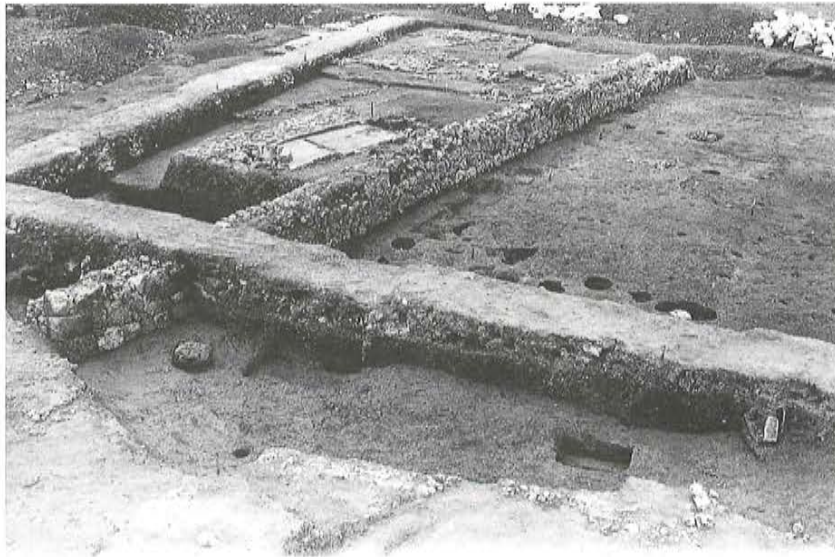
第31図版 方形状遺構検出状況



第32図版 方形状遺構検出状況



第33図版 円形状遺構検出状況



第34図版 各種遺構検出状況



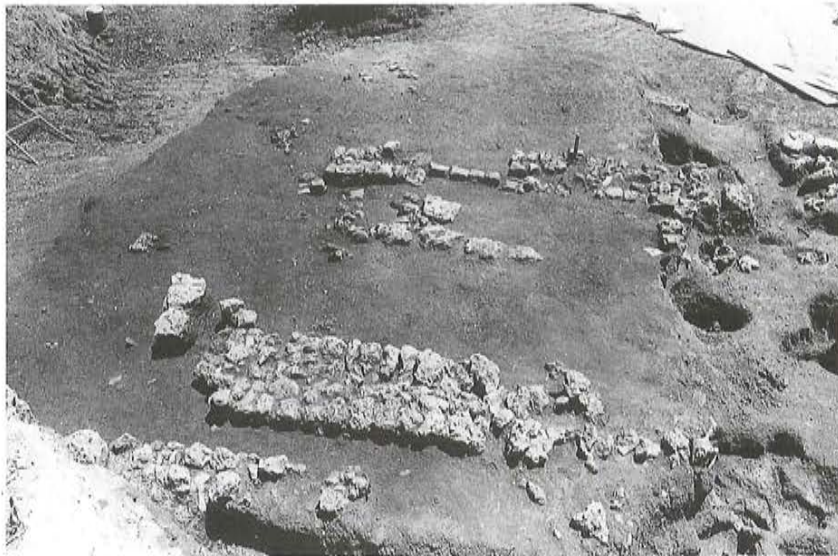
第35図版 各種遺構検出状況



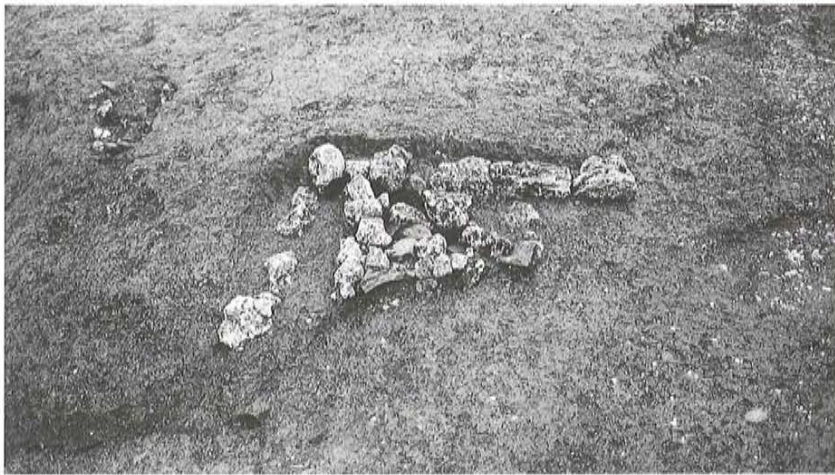
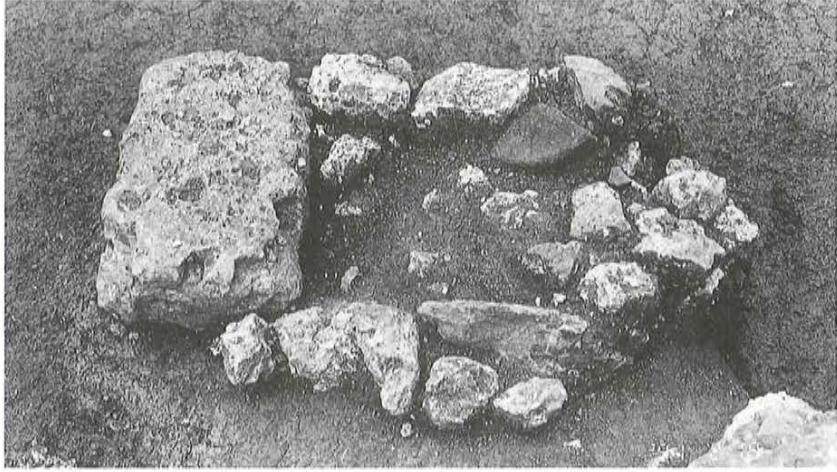
第36図版 各種遺構検出状況



第37図版 2号石列遺構検出状況



第38図版 石列遺構検出状況



第39図版 各種遺構検出状況



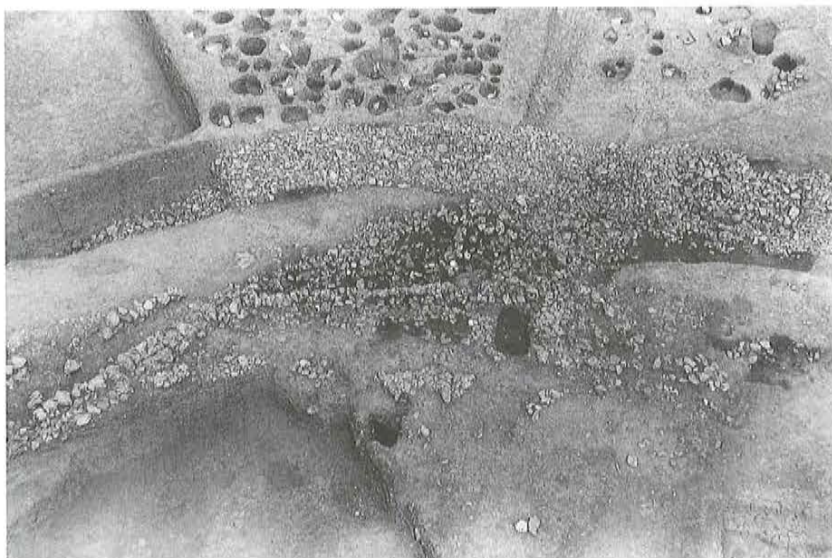
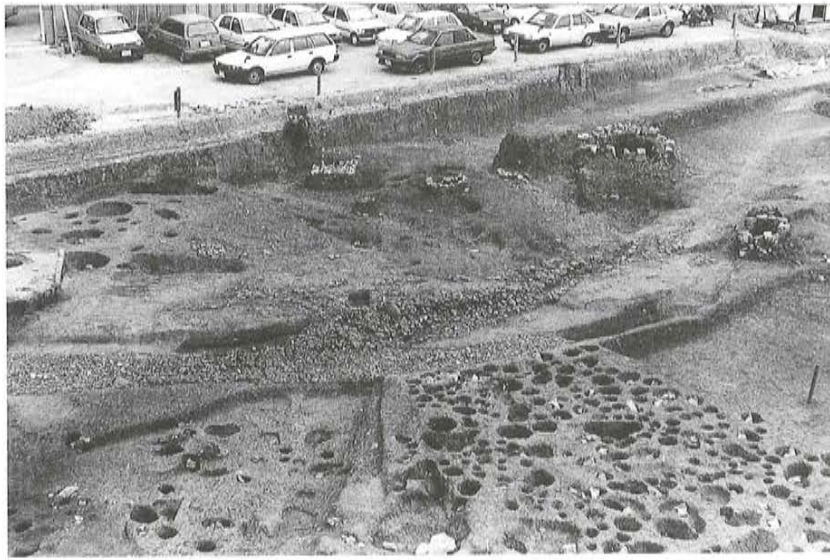
第40図版 方形状遺構検出状況



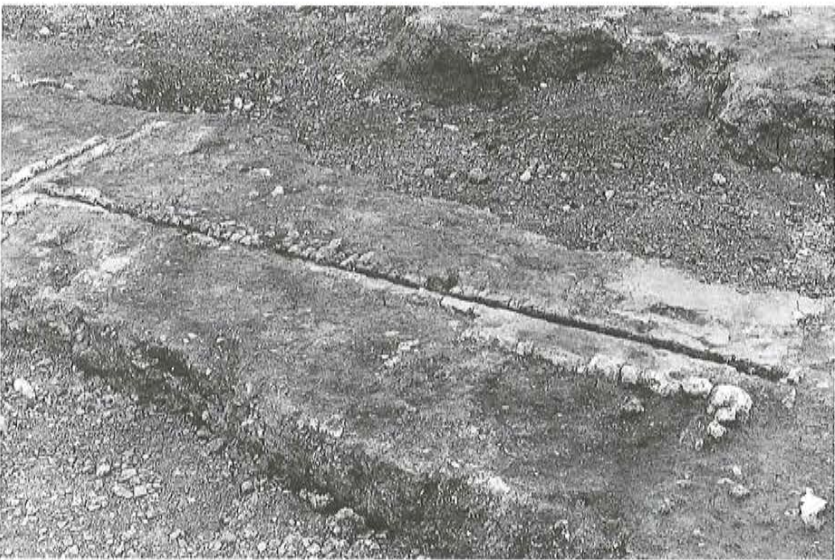
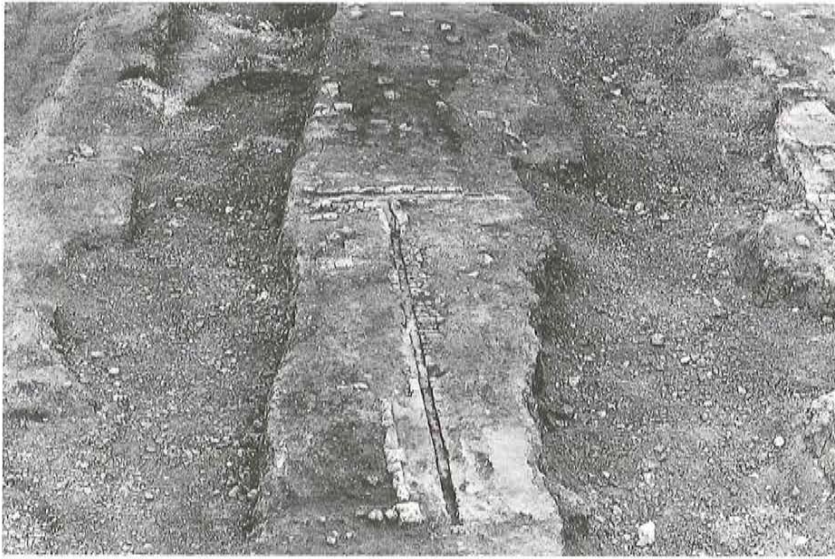
第41図版 方形状石敷遺構検出状況



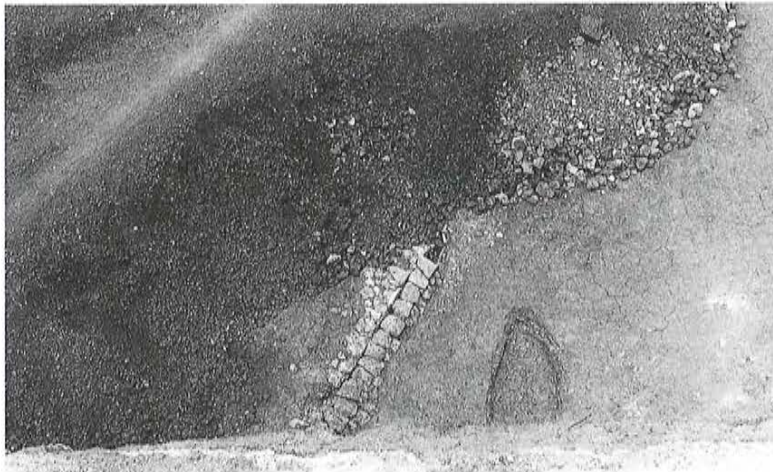
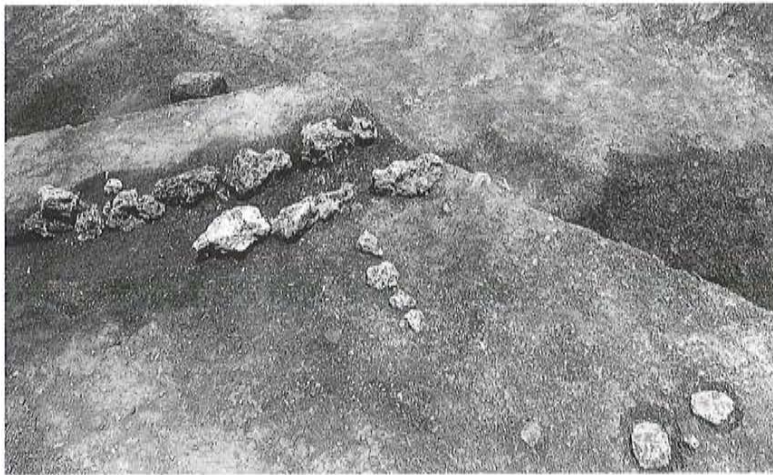
第42図版 石敷遺構検出状況



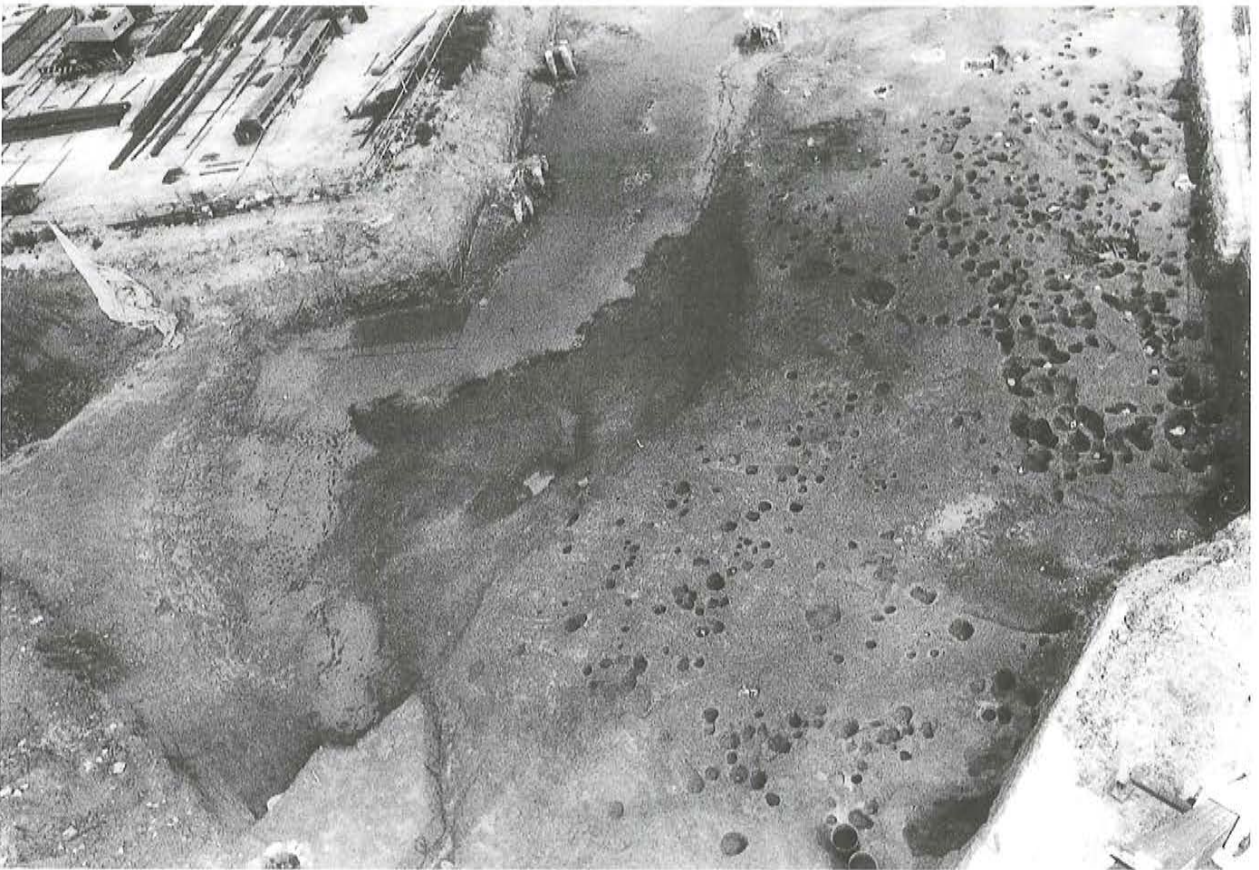
第43図版 大溝遺構検出状況



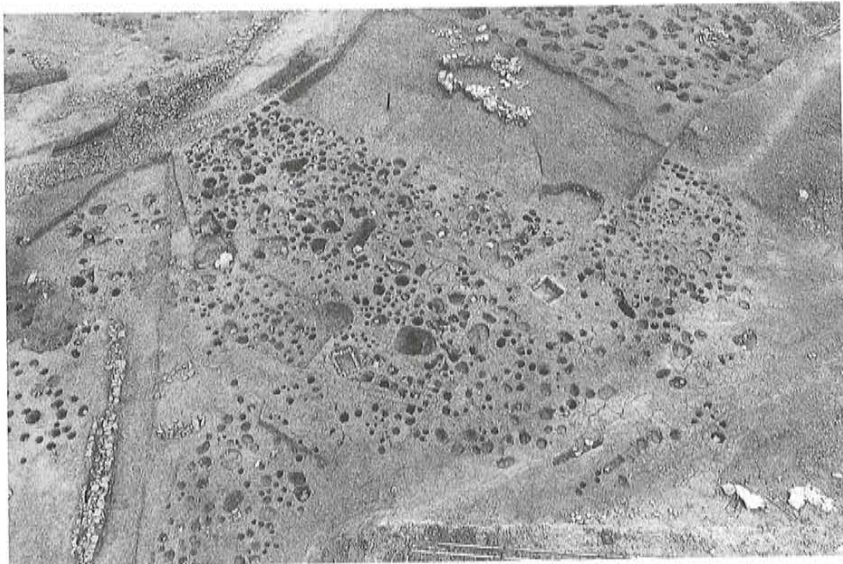
第44図版 溝遺構検出状況



第45図版 各種遺構検出状況



第46図版 ピット群検出状況



第47図版 ピット群検出状況

沖縄県文化財調査報告書第129集

湧田古窯跡（Ⅲ）

—県庁舎警察棟建設に係る発掘調査—

印刷 平成9年3月21日

発行 平成9年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900 那覇市泉崎1丁目2-2

TEL 098(866)2731～2733

印刷 沖縄高速印刷 株式会社

〒901-11 南風原町字兼城577

TEL 098(889)5513

